脱げない
よろい

げんじあきら

目次

〇深見の提案はみんなに反対された

〇長下の決断

〇殴られて顔の右が腫れて

〇三条史郎

〇隅安芸のとんでもない話し

〇真鍋だけ火の粉もないが

〇真鍋は救世主か

〇美濃と井伊の戦い

〇美濃飛翔と久々の同期会

〇牧本が先里研究室へ

〇牧本の説明会

〇深見の夢

〇人望がないと夢は叶わない
それぞれの道を

〇網野からお金を返えされて

〇リスクテイキング

〇深見の修正

〇有働がアメリカへ

〇ガリバーとの対決

〇深見のよろい

〇隅安芸が自信を取り戻して

〇深見が手伝ってかえって混乱した

〇９月11日お客さまの勉強会

〇網野の妊娠

〇深見を手伝う

〇深見のよろい

〇有働のイリノイからのメール

〇さもんとしろう『よろい』

〇秋元の上海からのメール

〇福岡からの美濃のメール

〇私の責任ではありません

〇深見の人事異動

〇深見のメール

〇よろいの価値観

〇深見が気になる

〇11月連続のお客さま説明会がはじまる

〇11月３日網野の結婚式

〇選抜試験
脱げないよろい

〇深見が飛び降りた

〇松江

〇先里からの手紙

３年前の新入社員研修

○神通力

深見甚太郎は、最近、自分の神通力のようなものが失せてきていると感じている。食品関係の技術系大学院から博士課程へ進んだ。博士でもある。

大会社でもないシンセン食品株式会社へ入社した。思いっきり自分のチカラを発揮したかった。大会社には、自分の先輩もたくさんいる。博士といっても、ゴロゴロいる。中堅の会社の方がやりやすいと考えた。

深見は、研究所ではなくて、マーケティングを希望した。３年前である。

みんなが驚いてしまった。深見甚太郎には、考えがあった。メーカーに勤めるからには、商品を出して売上を伸ばさないとやっていけない。いくら研究室で難しそうなことをやっていても、やはり、最後は商品だ。商品を発売するのだったら、マーケティングの部署がよい。それに、技術的なことは、深見には、どうにでもなると思っていた。

深見には神通力のようなものがあった。それは、大学時代の、多くの、深見の発表した論文による。

マーケティングの部署でも、深見甚太郎は、期待される新人だった。次々に新しい素材を取り上げた。深見は、新しい素材を持ち込むことが得意である。食品には、多くの可能性がある。

３年前の新入社員研修で、深見は、研究所に１週間いた。研究所が何をやっているのか知っておく必要があった。

深見は、正直言って、たいしたことはやっていない。そう思った。

新入社員研修の最後の日に、営業の新入社員も含めて、８人全員が研究所に集まった。

深見には、何の話があったのか、まるで憶えていない。先里一郎の話し以外は、記憶がない。深見は、研究所研修でも、ノートをとることは、ほとんどなかった。ノートに書いておかないといけないと感じるものは、何もなかった。しかし、この先里一郎の話だけは、メモをとってある。

概略、以下のような、話だった。
「あなたたちが、今すぐやらなければならないことは、よろいを脱ぐことです。よろいとは、あなたたちが小さい頃から、生身の自分の外側に、よろいのように、厚く身に着けたものです。学歴もその１つです。人は、生身の素晴らしさを見ているのではなくて、その外側の、よろいの立派さで、その人を判断しようとします。これは、人の習性です。あなたたちがこれまでの人生でやってきたことは、自分のよろいを、いかに厚く立派にするかということです。それ以外には、まだ何もやっていません。したがって、今日、あなたたちがここにいるけれども、あなたたちは、よろいが、そこに座っています。これからあなたたちは、報酬をもらって、何かを創りださなければいけない立場になります。いままでのように、よろいを厚く立派にすることとは異なります。よろいを厚く立派にしても、他者は、あなた方に、何の報酬も払いません。確かに、よろいは立派だとは言ってくれますが。他者があなた方に報酬を払うのは、あなたたちが成し遂げたことに対する対価として支払います。フツウ人は、よろいの厚さや立派さで人を判断しますので、いままでのように、これからも、よろいを厚くして立派にすればいいのだと判断してしまいます。あなたたちは、思考や行動を変えない可能性があります。しかし、何かを創り出すことに必要なものは、よろいではなくて、生身のあなたたちにくっついてきた感性です。よろいは何物も生み出しません。今あなたたちに一番大事なことは、このよろいを脱ぐということです。今のあなたたちのよろいは、このままでいくと、あなたたちの固定観念になってしまいます。自分を縛る枠になってしまいます」
先里一郎の話だけが、新入社員研修の話としては、外れていた。おかしな話しだった。こんな話を研究所の先里研究室の室長が話すべきなのだろうか、深見は、不思議に思った。この先里の話だけが印象に残っているし、ノートにメモとして残っている。
それっきりだったのだが、３年経って、このノートを取り出している。いまだに、意味がよくわからない。自分は博士だが、それもよろいと言っているのだろうか。必要ないと言っているのだろうか。必死になってたどり着いたものだ。必要なかったと言われても困る。
この新入社員研修の時の先里一郎のメモを見ているのも、最近、深見自身の

神通力が失せているのではないかと感じるからだ。
おかしなもので、新人の深見は、何かを持ってシンセン食品株式会社に入社してきた印象であった。何事も、深見の考えを取り入れて、物事が進行した。大きな失敗もない。次々に進んでいった。神通力があったのだ。
しかし、最近はおかしい。深見のことばよりも、商品モニターの結果や、研究所のエビデンスが重宝される。何かがおかしいのだ。
３年前の今日、研究所の新入社員研修会で、先里一郎の話を聞いた。それっきりになっていた。先里一郎の話を思い出すこともなかった。深見は、フツウの人になってしまったのだろうか。
10時になった。朝ごはんの器を洗わないといけない。パンとコーヒーの簡単なものだ。器を洗うと言っても、すぐに終わってしまう。最近は、このように考え事をしてしまう時間が多くなった。土曜と日曜は、特にである。シンセン食品株式会社は、大阪郊外の、先端的研究施設として開発された地域の中にある。本社と研究所がある。環境は申し分ない。深見は、駅から少し離れたアパートに住んでいる。大阪から遠いのに、なぜだかアパート代が高い。シンセン食品株式会社のマーケッティングの部署は、大阪市内にある。深見は、大阪まで通勤している。アパートは、シンセン食品株式会社の本社研究所のある、郊外の駅と同じところにある。通勤に１時間はかかってしまう。

〇牧本富士野

深見と同期の入社で、研究所にいる牧本富士野という女性がいる。入社以来、個人的にも、メールを通じて、情報交換をしている。意見交換をすると、ものすごくながいメールが行ったり来たりする。
彼女は、研究所を希望した。フツウの技術系の学生の選択する道である。
牧本富士野は、深見をライバルだと思っているフシがある。
深見の考えに、いつも少数だが、反対意見があるのも、牧本である。
新入社員研修の時の、先里の話しに、「おっしゃりたいことがよくわかりません」と言った。８人の新入社員は、唖然としてしまった。仮にも、先里研究室という個人の研究室を持っている古手の研究者である。みんなビックリ

してしまった。
先里一郎は、べつに困ったふうでもなく「３年経ったらもう一度今のように言ってみてください」そう言って、牧本をいなした。
その後の牧本のメールによると、何事につけても、先里一郎が気になっているようである。気になっているというより、ジャマな存在のように思える。
「牧本さんのよろいが話しているのですか？」
カチンときて会議室から出て行ったというメールが来たこともある。
先里一郎は、常に、牧本の前に現れるのではなくて、時々会議で一緒になるのだと言っていた。
牧本富士野は、入社２年目になったばかりの４月に、研究所を辞めたがっていた。シンセン食品株式会社も退社するかもしれないと言っていた。集まれる同期入社の社員が５人集まった。深見と牧本と営業の３人である。
上司の依頼で３か月もやっていた仕事が、マーケティングとの合同の打ち合わせで、なんでこんなことをやっているのだと責められた時、上司が、知らん顔をしていたからだそうだ。
「やってられへん」
牧本の口グセでもある。
この牧本の話で、一気に５人の同期も、同じような出来事を話しはじめた。
「やってられへん」
みんな同じだった。新入社員だから仕事を選ぶことはできない。もちろん上司も選べない。
「あの人達のためにオレたちはいるようなもんだよ」
あの人達というのは、上司のことである。上司の実績を上げるために部下がいる。上司は、自分のためになる部下を、新入社員の時から狙っている。
最近、やっと深見も理解できるようになってきた。
その夜、牧本の、研究所を辞めたいという感情を、全員が共有してしまった。そして遅くまで飲んだ。ミナミの居酒屋だった。
牧本の入社２年目の夏にも、牧本から、同じようなメールが来て、５人がミナミの居酒屋に集まった。
深見は、気になっていた。牧本の研究していることに、反対していたからだ。多分、研究が進められなくて「やってられへん」になったのではないか

と思っている。メールには「やってられへん」しか記していなかった。
同期の５人は、発端が牧本の「やってられへん」でも何でもよかった。同期で集まるチャンスなのだ。同期入社というのは好都合である。何を話しても、上に漏れることがない。そのことだけは信頼がある。牧本も、５人に話しても、研究所を辞めたいという感情が、他に伝わることがないと思っている。そういう信頼が、同期にはある。
５人は気になって、牧本が何を言うのか、顔を近づけた。
「ボーナスの成績がダメだって言うの〜やってられへん」
４人は、一斉に、なんだ〜という顔をした。
「深見以外はみんなボーナスの点良くないよ」
実際にそうだった。深見は、これでいいのだろうかと思うくらいに、ボーナスの成績が良かった。２年目の夏のことである。
その日は、牧本の辞めたいという話が、深刻でもなかったこともあって、楽しいおしゃべりになってしまった。５人が集まると、楽しい。励まし合っているわけでもないが、想いを共有できるところがある。悩みも、みんな似ている。将来のことが不安であることに変わりはない。
「深見君は働いてる感じするけど〜わたしたちは何やってるかわかんないね」
牧本は、こう言った。
２年目の夏は、こうだった。深見も、みんなあまり戦力にならないな〜と感じていた。
２年目の秋に、社内の社員提案会があった。若手の社員の、社内業務でも、商品企画でも、なんでもよい、アイデア説明会であった。ずっと続いている。牧本富士野は、社内で優勝した。５年前のヒット商品を、少し手を加えて、一挙に、若返りをさせる案だった。社内投票で１番になって、実際に実行された。深見も、牧本に投票した。売上も回復して、社長賞ももらった。なぜ「やってられへん」なのか、４人は不思議だった。
そして、ミナミの居酒屋に集まった。そして、みんな、牧本富士野が何を言うのか、見守った。
「社内で１番なのに他の企画を通してくれへん」
それとこれは別だろうとみんな思って、みんなは安心した。たいして深刻で

もない。
「１番は１番だけど〜それはそれだよ」
深見も、こう言った。牧本は納得できなかった。
しかし、５人は、牧本の「やってられへん」で、何度も集まることができて、それはそれで牧本に感謝している。言いたいことが言える仲間は少なくなってきた。
牧本富士野の４回目の「やってられへん」は、３年目の５月だった。先里一郎に「そろそろコンサバティブになってきましたか」と言われて、何やらわけのわからないことを先里に言ったらしい。上司に呼ばれて叱られた。
「またかよ〜もういいよ」営業で忙しい隅安芸二郎が言った。
「あの人の言ってることがようわからん」
牧本は腹をたてているようだった。先里一郎に対してである。隅安芸二郎は、先里一郎を少しは知っている。先里一郎は、営業部の求めに応じて、お得意さまに、商品や考えの説明会を開いてくれる。隅安芸たちがセットした説明会に、講師として参加してくれる。
お客さんは、全員、先里一郎の言っていることを納得している。なるほどと思ってしまう。聞いている隅安芸も、同じように、納得する。評判の説明会になる。
説明会後の打ち上げで、先里一郎が言っていたことに、牧本の「やってられへん」に係ることがあった。
先里一郎によると、新入社員は、入社３年間は、自分が生活者目線であるが、４年目からは、その会社目線になって、コンサバティブになると言っていた。
「わたしはシンセン食品目線なわけ？」
４人は、そうかもしれないと思って、同調するでもなく、首を振るでもなく、じっと前を向いていた。
「そんなに気に入らなかったら先里さんに聞いてみればいいじゃないか」
隅安芸二郎が言った。実を言うと、牧本ほどではないが、深見も、先里が言っていることを、キチンとは理解していない。何が言いたいのか、よくわからない。牧本の先里に対しての警戒感は、よくわかる。何か、責められている感じなのだ。深見に対してもである。

○隅安芸二郎

深見と牧本と同期入社に、営業の隅安芸二郎がいた。入社以来、深見と牧本と隅安芸は、同期の集まりを欠かしたことがない。隅安芸は、営業の将来のエース候補と言われている。入社の時に、うわさが広がっていた。

入社１年目の秋の、新製品の販売コンテストで、優勝してしまった。うわさでは、上司の手助けがあったからだと言われているらしい。深見には、実際はどうであったのか、よくわからない。

入社１年目で販売コンテストに優勝するなど、かってなかったことで、この時も、同期の６人が集まった。お祝いをした。

隅安芸二郎は、自信満々だった。自分にできないことは何もないという雰囲気だった。ほぼ１人でしゃべっていた。

入社２年目の秋に、深見にとっても、思わぬ出来事があった。隅安芸二郎が担当する名古屋の食品の問屋さんが、銀行取引停止になってしまったのだ。

12月になって落ち着いた頃、深見は、同期のみんなを集めた。隅安芸二郎をなぐさめようという会だった。５人が集まった。

全員、なかなか現れない隅安芸を心配した。

隅安芸は、被告が検事に説明するように、顛末を話した。１年目の秋の販売コンテストの優勝の時の自信はどこかへ消えていた。ただ、落ち度のないように、しっかり話そうとしていた。

隅安芸のあまりにも大きな変貌ぶりに、みんなは驚いた。深見も、信じられなかった。

銀行取引停止の当日も、隅安芸は名古屋にいた。注文の品が届かないという知らせがあって、問屋さんの倉庫に出向いていた。11時に、遅くなって、トラックが到着した。隅安芸は、伝票をもらって、安心して、大阪に返った。

その日の夕方、上司から、名古屋へ行って、在庫を引き上げてくるように指示された。隅安芸は、トラックの手配に手間取って、名古屋の問屋さんの倉庫に着いたのは、夜の８時になっていた。今朝11時に納入した商品のすべてが、すでになくなっていた。トラック２台分の商品である。

隅安芸は、何度も話したであろう当日の様子を、淡々と話した。それはあたかも、録音テープが話しているかのごとくに、事務的な話だった。

深見は、社内では、危ないと気づかないようでは、営業のセンスがないと言われていることを知っている。
１年前には、販売コンテストで優勝して、営業のセンス抜群と言われ、１年後には、当日の大量納入の商品も守れなくて、営業のセンスがないと言われている隅安芸を、どう解釈すればいいのかわからなかった。
深見には、隅安芸にはツキがなかったんだと思ってしまうところもあった。
牧本は、帰りに、隅安芸くんは、みの虫になってしまったと言った。深見には、どういう意味で、牧本が、みの虫と言ったのかはわからないが、おおよその察しはついた。
「この秋までわたしのことを肴にしていたのに」
牧本は、元気のあった隅安芸がなつかしそうだった。
それ以来、隅安芸は、あまり多くをしゃべらない。もう入社して３年になるが、いまだに、必要なこと以外はしゃべらない。同期の集まりは欠かしたことがないが、率先して、自分の意見を言うことはなくなった。
最近、隅安芸と同じく、大阪の営業をしている同期の有働湯治の評判が聞こえてくるようになった。

〇有働湯治

有働湯治は、目立たない男であった。８人の新入社員の中でも、目立たない。いつも、みんなの端にいるような男だった。深見にも、あまり記憶がない。目立たない影の薄い男だとしか言えない。同期の集まりにも、いるのかいないのかよくわからない。これでよく営業が務まると思う。
有働湯治の評判は、大豆たんぱくの原材料を、大量に、大手のおかしの会社に販売したことから生まれたらしい。深見はそう聞いている。
入社３年目のお祝いを兼ねて、有働湯治の話を聞く会をやることになった。深見が手配した。隅安芸も来る。同じ営業である。少し心配もしていた。

いつものように、５人の同期入社の仲間が集まって、入社３年のお祝いをやった。ミナミのいつもの居酒屋に集まった。相変わらず、隅安芸はしゃべらず、牧本は「やってられへん」を連発していた。深見は、どうも神通力が

失せてきている自分を見失いかけていると思って、静かになりがちだった。
１時間くらい経って、牧本が、有働くんの評判が研究所にも聞こえてきてるんだけどと、話を振った。
ところが、とんでもないことになってしまった。
「あの仕事はオレの仕事なのに有働が盗んだ」
隅安芸が、とんでもないことを言った。みんな驚いてしまった。
隅安芸が最初に気がついて、先里一郎にお願いして、大豆粉の効用や調理方法をまとめてもらって、名古屋のおかしのメーカーに売り込んだらしい。名古屋の会社には、大阪にも工場があって、大阪の工場の方が、ふさわしいからということで、紹介してくれた。隅安芸は、自分で大阪の工場に行くはずだったが、たまたま、緊急の仕事が、名古屋で発生したために、同期の大阪担当の有働に、ピンチヒッターを頼んだらしい。
有働は、思わぬ、大阪のおかしの工場の反応に、ピンチヒッターであることを忘れて、そのまま継続して担当すると隅安芸に言った。
隅安芸には、納得がいかなかったが、名古屋担当の上司と大阪担当の上司が相談した結果、担当が、有働になったらしい。深見には、そのように聞こえた。
同期入社の仲間が集まったのは、辛いことが多いから、お互いを分かち合おう、助け合おうとしたものだと、深見は思っている。
しかし、同期の２人が、仕事を盗んだとか盗まないとか、おかしな争いになっている。
隅安芸と有働は、同じミナミのオフィスにいる。深見も同じオフィスである。しかし、隅安芸と有働は、島を挟んだ向かいに座っている。
「会社で有働とは話したことがないんだ」
隅安芸は、こう言った。
このままではまずい。牧本が、なんとかしろと深見に目で言っている。しかし、深見には、どうしたらよいのかわからなかった。
有働の今年の成果目標は、はじまったばかりだが、もう今年の目標は達成されるのだと隅安芸は言った。
有働は、相変わらず目立たない素振りで、話さない。
有働は、隅安芸の言うように、隅安芸の仕事を盗んだのだろうか。深見に

は、どうすればよいのか、よいアイデアがなかった。
「有働くんはさ〜隅安芸くんにあげるもん〜なんかないの？」
牧本が言った。
「このままだったら〜隅安芸君〜やってられへんよ」
いまのままなら、今年の夏と暮れのボーナスは、有働に最高点がつくだろう。相当の差がつく。
「オレには、何かあげるようなものはないよ」
有働はボソッと言った。
「隅安芸にはワルイけれどラッキーだった」
これはもうタイヘンなことになってしまった。同期で集まる意味がなくなってしまったと深見は思った。これでは、この３年間、みんなで「やってられへん」を繰り返してきたのが、自分達に向かって「やってられへん」を言うようになる。
「先里さんはどうしてるの？」
経理の真鍋麻衣子が、不意に言った。
「中身は先里さんなんでしょ？」
真鍋麻衣子は、これは先里さんの実績ではないかと言いはじめた。また話しがややこしくなると、深見は思った。
「わたしが先里さんに聞いてみるから」
真鍋麻衣子はそう言った。
「何を聞くのですか？」
有働が訪ねた。
「先里さんは盗られたと思っているのか」
なんだか、おかしなことになってしまった。深見は、牧本に、目で合図した。カラオケにしよう。歌っている時は、メンドーなことは考えない。若者の特権である。

〇真鍋麻衣子

深見は、なにかにつけて、真鍋麻衣子を頼りにしている。同期会の会計もずっとお願いしている。２次会のカラオケのお金の徴収も、キチンとやって

くれる。深見が、同期会の会長でもないのだが、最初から、そうなっていて、誰も何も言わない。深見も、負担ではないので続けている。続けていられるのは、真鍋麻衣子が会計をやっているからである。東京支店にいる同期は、なかなか参加できないが、出張情報などを深見にくれる。東京支店の同期の出張に合わせて、同期会を開いたりしている。
昨日は、遅くまでミナミのカラオケ屋にいた。最終の電車まで歌っていた。いつも、ギリギリまで歌っている。よく最終電車に遅れないと思う。
11時ごろ、いきなり、真鍋麻衣子の長いメールがきた。
「先里さんの言ったことをそのまま伝えます」
長文だった。
「有働さんの成果にしたくなかったら、これからは、会社にとって好ましいことでも、有働さんのプラスのなることはやりたくないので、なにかあっても、何もしなくなるでしょう」
少しわからない。
「私はよろいがないので、隅安芸さんの実績になろうが有働さんの実績なろうが、そんなことはどうでもよくて、シンセン食品の成績になればよいと思っている」
またよろいが出てきたが、わかりにくいと深見は感じた。
「よろいは、自分の評価や評判や肩書などのように、その人の外側にあるものです。フツウは、人は、それを厚くして立派にしたがります」
ますますわからない。
「よろいがあると、盗まれたと思い、盗みたいと思ってしまいます。私はよろいがないので、どうぞ使ってくださいと思ってしまいます」
先里一郎という人は、どうも、今時の若者にはフィットしないと深見は思った。有働の、ラッキーだったは、深見は理解できるし、ラッキーを期待している。
深見は、このメールで、隅安芸と有働が機嫌がワルクなると思った。いかにも、２人が、批判されているように見える。先里だけが、オレは立派だと言っているように見える。
深見は、お昼休みに電話すると真鍋にメールした。

「あの人はどうぞ使ってくれと言っているのに、わたしたちが盗んだとか盗まれたとか言っているのは、おかしい」
真鍋の、単純な疑問だった。
「有働と隅安芸からなんか連絡はあったのですか？」
何も連絡がないと言った。多分、機嫌がワルイだろう。
「結局、先里さんは、何を言っているのですか？」
深見は、真鍋に聞いた。
「よろいを脱げだけど」
深見は、こういう禅問答のようなことは苦手だ。今は、ちょっとのことでボーナスが５万円くらい違うことは、フツウである。
「だから〜どうぞ使ってくれと言ってるのに〜わたしたちが盗むとか盗まないとか言ってるのって〜おかしいじゃない」
しつこく深見が聞いたので、真鍋は、怒ってしまった。
深見は、電話を切って考え込んでしまった。
このままでは、同期の絆のようなものが壊れると感じた。
いきなり、東京支店のセールスサポートをしている網野ゆみこからメールがあった。
「４月末で退職します」
短いメールだった。
盗むとか盗まれたとか言っている間に、思わぬことが発生した。
深見は、過去形で書かれている短いメールを見て、同期の仲間にできることは何もないだろうと思った。
すぐに真鍋からメールが来た。
「ゆみこが今度の土日に返ってくるから、みんなに会いたいか聞くから」
はやり、真鍋は情報通である。真鍋の返事を待つしかない。今度の土日というと、４月17と18日だ。深見には、何も予定がない日だった。
８人が７人に欠けることになる。

〇網野ゆみこ

網野ゆみこは、堺に実家があった。小柄でかわいい感じだった。深見は、話

してて疲れないことでは、網野ゆみこが１番だった。それは、有働も隅安芸も言っていた。奥さんにするならとみんな言っていた。
多分、結婚だろうと、深見は感じた。大阪時代に、彼がいたに決まっている。
夕方５時になって、真鍋麻衣子からメールがあった。
「タイヘン、とにかくみんな集めて」
こんな短いメールでは、さっぱりわからない。しかし、深見は、すぐに動いた。４月17日に、いつものミナミの居酒屋に集合である。そして、予約の電話をした。何人集まるのかわからない。
何がタイヘンなんだろう。同期でできることはあるのだろうか。
入社３年目になると、けっこう忙しくなる。忙しさに紛れて、深見も、17日のことを考えなかった。そして17日になった。土曜日である。
フツウは、土曜は、ゆっくりしていることが多い、遅くまで寝ている。それか出勤である。

いつもの５人が、適切な時間に現れた。ほぼ５分と違わない。網野は、まだ現れない。時間までに10分ある。
隅安芸と有働は、離れて座って話もしない。まだ、盗んだ盗まないが続いているらしい。牧本は、相変わらず「やってられへん」を連発している。真鍋は、何かを考えているようだった。
時間ピッタリに、網野が現れた。
網野は、同期会に１度も来たことがない。東京支店にいたこともあってだろうが。秋元雄二は、大阪に出張だから同期会をやってくれという連絡をよこしたりしていた。しかし、網野ゆみこは、１度もない。
真鍋が口を開いた。深見が会長とみんな思ってはいるが、実は、誰も決めたわけでもない。誰が口を開いてもかまわない。
「ゆみこは、今月末に会社を辞めて、食品の会社に販促担当のチーフマネージャーで招かれることになっています」
みんな驚いてしまった。チーフマネージャーは、いわゆる部長である。同期なのに、入社３年目過ぎたばかりなのに、部長である。
「わたしは、もっと大事な仕事をさせてくれるように会社にお願いしたんだ

けど、聞き入れてもらえなかった」
網野は、セールスサポーターに不満があった。入社以来３年間、この仕事一筋である。社内では、セールスサポーターだが、社外では、目立った存在だった。３年もやっていると、年は若いが、ベテランでもある。網野の不満を聞きつけると、好待遇で招くこともあるのだろう。深見は、勝手に、こんなことを思いながら聞いていた。
「思い切って動くと、自分の価値が見えてくることがわかった」
網野の自信が覗いている。
それにしても、真鍋がタイヘンだと言ったのは何だろう。
「わたしも、このままでいくと、ゆみこと同じことになる」
真鍋は、今の仕事に、先行きの希望がないことを言った。毎日同じことをやっているのだ。
ここから、みんなの仕事の先行きについて、話したいことを話した。みんな、それぞれ不満を持っていた。網野ゆみこの道は、その１つの解決策であると、みんな思った。
思えば、この３年間、自分の仕事のグレードに不満などなかった。１人前に仕事ができるようになりたい。それが、いきなりである。３年が過ぎて、いきなりである。網野の選択は、他の同期７人に、大きなインパクトを与えた。
深見は、カラオケを楽しそうに歌っている網野ゆみこを見ていて、ひょっとすると、今日は、同期のみんなに見せつけたかったのかもしれないと思った。網野ゆみこは、１度も同期会に来なかった。あとの７人は、けっこう、辛いことがあったりして、本音でなみだを流したりした、慰め合って、励まし合って、分かち合った。
しかし、網野だけは違っていた。最初から、同期のみんなが競争相手だったのかもしれない。深見は、曲を選びながら、考え込んでいた。
網野ゆみこは、真鍋麻衣子の部屋に泊まると言って、一緒に帰っていった。深見と同じ電車なのに、２人は、歌を歌って、さっさと帰って行った。
深見には、真鍋の言った「タイヘンだから集めて」が、よくわからなくなった。

○秋元雄二

深見は、網野と同じ東京支店の営業にいる、秋元雄二の意見を聞きたくなった。秋元には、仕事への不満はないのだろうか。

４月19日月曜日、深見は、秋元にメールをした。

「サンセン食品は、小さな食品会社で、シンセン食品の競争相手でもあるけど、人を使い捨てする会社で有名なので、個人的には、網野の先行きを、同期として心配している」

同じ東京の営業であるだけに、リアルな反応だと思った。17日の６人の同期が集まった時に出た意見とは、また視点が異なる話だった。結局、網野は、何をしたかったのか。

そして次の日だった、４月20日、人事異動があった。秋元雄二は、上海支店の営業課長になった。

早速、秋元雄二から、同期の全員にメールがきた。

「やっぱり、不満はあっても、ガンバって良かった。見る人は見ている」

４年目で課長である。いくら上海支店とはいえ、すごいことだと、同期のみんなが思った。

深見は、なんだか、入社３年が過ぎて、自分の神通力も失せてきたように感じるし、秋元雄二が先に課長になったりして、存在感が墜ちてきていると感じた。まさか、入社４年目にして、課長になる人が出るなんて、思いもよらなかった。

秋元雄二は、時々は、大阪に来て、同期会に参加していた。牧本を気に入っていると、みんなは思っていた。出張で大阪に来ると、なにかにつけて、同期会をやるように、深見にメールしてきた。多分、直接牧本には、メールがしにくいのだろう。

あまり、自分の意見も言ったことがなく、どちらかというと、追従型の人だと、深見は思っていた。それが、課長になったという今回のメールである。やはり、早く課長になりたかったのだということがわかった。そんなことは望んでいないとは言っていた。とんでもないことだった。深見も、早く管理職になりたい。しかし、マーケティングでは、先輩が多い。どう考えても、追い越すことは難しいように思う。

１週間後だった、４月27日、同じ同期で東京支店に勤務している美濃飛翔からメールがきた。
５月の連休に、修善寺温泉で遊ばないかという誘いだった。５月１日２日の宿泊割引券があるというメールだった。６名以上だと40％も割り引くというものだった。時間もなかったが、深見は、真鍋と相談して、全員にこのメールを転送した。深見の、６名以上が参加するのだったら成立させたい。ちなみに、深見と真鍋は参加予定だと追記した。
１時間も経たないうちに、全員からメールが来た。網野以外は、全員参加だった。秋元は、連休明けに上海に赴任だった。中国語の勉強をしている。たまたま、５月１日と２日は、中国語の学校も休みだった。
深見は、最近、いろいろあって、自分たちの明日のことを真剣に考えないといけないと思う。ゆっくり語り明かそう。そういうメールを出して、真鍋から、集合場所や、お金の手配などの連絡がいくことを告げた。
やっぱり、何かが変わろうとしていると、深見は思った。同期会が壊れようとしているようでもあり、お互いに、何かに頼りたいようでもあると、深見は感じていた。

〇美濃飛翔

深見達の同期８人は、他の同期とは異なっていた。ミナミの居酒屋以外では、集まったことがなかった。先輩や後輩の同期会を聞くと、１年に１度は旅行に行っている。深見は、それでいいと思っている。
５月１日に、修善寺温泉の現地集合だった。ホテル集合である。10時だった。大阪からだと、けっこう早く出てきた。
美濃飛翔は、１時間も前に来ていた。今日は、滝に出かけるのだが、美濃飛翔の車で出かける予定だった。深見には、よくわからなかった。美濃飛翔の車に７人も乗れるのかも、よくわからないが、美濃と真鍋に任せていた。
全員が集まって、夕方まで部屋が使えないので、荷物を預かってもらうことにした。荷物を預かってもらったのは、牧本と真鍋の２人だった。深見も隅安芸も有働も秋元も、ショルダーだったりボストンだったりだが、たいした

荷物ではなく、そのまま車に積み込んだ。
車が回されてきた。美濃飛翔の車のはずだった。ホテルの小型バスだった。
深見は、首をひねったものの、そのまま過した。
「もっと静かに運転しろよ」
いきなり美濃飛翔が大きな声を出した。みんなビックリしてしまった。美濃は、車を回してくれたホテルの社員が、急いでいて、急ブレーキで止まったのを怒った。社員は、平謝りだった。
どうもおかしいと、深見は感じていた。
「美濃飛翔の母親でございます。いつもお世話になっております」
ホテルの玄関で、いかにも女将さん風の50くらいの女性に挨拶されて、やっと気がついた。美濃飛翔は、ここの息子だったのだ。
みんな、どういう態度をすればよいのか迷った。深見も、迷った。息子が連れて来た客人なのか、一般のお客さんなのか、よくわからない。
夕食の時だった。少し高級食材のバイキングだった。お母さんがやってきて、鹿児島の焼酎を一本置いて行った。
美濃飛翔は、ずっと、この温泉ホテルの自慢話をしていた。そして、社員に、氷を催促して、お湯を催促した。そして、遅いと怒った。
深見は、どうしたものかと考えていた。そもそもは、語り明かそうだった。みんな、話したいことがたくさんある。牧本が、お腹いっぱいだからと、部屋に向かったのを合図のように、全員が腰を上げげた。
男子と女子の部屋に分かれて、しばらくして、牧本がやってきた。
「どうすんの〜」
牧本は、いつもこうなる。そして「やってられへんよ」になる。
美濃は、部屋にまだ１度も来ていない。
秋元は、露骨に、来るんじゃなかったという態度をしていた。真鍋もやってきた。そして深見の顔を見た。
「どうしてこうなっちゃったの〜」
ため息とも反省ともつかないような声だった。
「入るよ〜」
美濃飛翔が入ってきた。キャスターに、さっきの焼酎とお湯と氷と、つまみがたくさん乗っていた。そして、おにぎりが箱の中にたくさん入っていた。

「語り明かそう」
美濃飛翔は、キャスターをそのまま、男子の部屋に入れた。
またしても深見は、どうすればいいのか迷ってしまった。美濃飛翔はどういう男なのか。よくわからない。
今日はオレがキーパーやるから何でも言ってくれと言った。キーパーってなんなのか、よくわからない。
「酒が欲しければ言ってくれたらオレがやる」
牧本も真鍋も、深見を見た。判断できないのだ。これからどうしたらいいのか。
美濃は、窓際に、キャスターを持って行って、全員が座れるスペースをつくった。奥に、２つのベッドがあり、４人泊まれる部屋である。
「声が聞こえにくいのは、この部屋しかない」
確かに、窓を開けさえしなければ、声が聞こえにくいだろうと思った。
なんとはなしに、７人の座るところができて、乾杯をすることになった。
坐ったものの、一瞬、話がない。美濃は、焼酎をつくっている。
「美濃さんはここ継ぐの？」
牧本が、気になっていることを聞いた。
「社長は姉さんがやっているからオレは自由だ」
それではお母さんはなんだろう。お母さんは女将さんなのか。お姉さんは若女将なのか。
「なんで話さなかったの？オレの実家だけどって」
そしたらみんな来ないかもしれないと思ったらしい。
「ああ〜もういいから話してくれ」
美濃は、今日同期７人が集まったコンセプトを忘れてはいなかった。それにしても、深見にはよくわからないことがある。今の美濃と、さっきまでの美濃は、同じ美濃なのだろうか。よくわからない。
みんなの焼酎をつくって、美濃が言った。
「ちょっと、オレも聞いてもらいたいことがある」
みんな一斉に美濃を見た。
「オレの上司の井伊なんだけど」
同じ東京支店の上海に転勤になった秋元が、「ああ〜」と、同調するような

声を上げた。
他の５人には、何のことかよくわからない。
「入社以来３年間、ずっと、オレのやることにケチをつける」
美濃が何を言いたいのかよくわからない。
「いじめられてんの？」
牧本が言った。
「みんなはそんなことないのか」
みんなは顔を見合わせた。
「あの人は若い社員を目の敵にするから」
秋元雄二が話を繋いだ。
「オレだって、あの人が上司だったら上海営業の課長になんかなれないよ」
どうも、営業というのは、いろいろありそうである。深見は、営業をやったことがないので、よくわからない。
「美濃もよくないところがある」
秋元が続けた。
「井伊さんだけではなくて、上司はみんな、部下は自分の業績を上げるためにいると思っているんだけど〜美濃は自分の業績を上げることしか考えないから」
できたら、美濃より秋元を部下にしたいだろうと、深見も思った。
「そもそも、そういう考えがおかしい」
美濃は、口を尖らせて話しはじめた。
このあと、延々と、上司と部下の話になった。
「やっぱサラリーマンだから上司に嫌われたら終わりだよ」
秋元雄二の考えには、いい悪いではなくて、そうしなければならない部分もあることは、今回の秋元の課長人事でも、明らかだった。
美濃も、「そんなことはおかしい」とは言わなくなった。
「じゃ〜オレは〜もっと井伊さんの成績が上がるように配慮して仕事をしないといけないのか」
みんなは、そうだとも言わないまま、じっと美濃を見ていた。

入社３年が過ぎて

○牧本がキレてしまった

「わたしなんでもないことでキレたんよ」
５月18日だった。
駅の近くのカフェで待っていてくれと牧本からメールがきた。深見は、はじめてだった。牧本は、誰かに頼るタイプではない。話を聞いているのは、真鍋だろう。なぜ深見なのかも、よくわからなかった。
「あんたの部長の長下いるでしょ？」
やっぱりかと、深見は思った。
牧本の研究レポートをみんな読んでいて、長下が言った「商品に関係ないことやるなよ」が気になっていた。それが、牧本のレポートを見ていて言ったことなのか、他のレポートだったのか、深見にはよくわからなかった。
「わたし一生懸命やったんよ」
いつもの牧本の一生懸命論が出てきた。
「キレたって〜何をしたのですか？」
電話で何か言ったけどよく覚えてないということだった。多分、バカといったようなことだろう。仮にも、長下は、マーケティングの部長兼課長である。研究所のやったことに、商品としてゴーサインを出す権限を持っている。誰も、長下には逆らわない。マーケティングと研究所の最高の権力者である。
「どうしてですか？」
長下が、研究所の牧本の上司に、こんな研究をさせるなと言ってきたらしい。牧本としては、研究所の研究で、内緒にやっているものでもない。それなのに、上司に呼ばれて、中止するように言われたらしい。
「わたしもう何回もあるんよ」
牧本の「やってられへん」の半分くらいは、一生懸命やったのに、どうしてこんなことやってるんだと批判されることだ。それもマーケティングから批判される。深見の部署から批判される。

「わたしもう何したらいいかわからへん」
深見は、どう応えればいいのかわからなかった。
「深見さんたちはさ〜どんな研究だったらグッドなの？」
もう３年も経って、こんな話をしているのはおかしいと、深見は思った。
「売れそうな企画になりそうな研究だけど」
牧本は、驚いてしまった。
「じゃ〜研究の凄さとかどうでもいいわけ？ずっと学生の時から言われてきたんよ？わたし」
確かにそうである。深見も、ありふれた研究だと中止するように教授に言われたことが何度かある。
「ありふれてても売れそうな研究だったらいいわけ？」
なんとも 応えようがないと、深見は思った。
深見は、牧本と話しながら、牧本が心配になってきた。秋の人事異動が心配になった。
牧本は、「わたし凄い研究してきたんだよ？そのわたしをこうするわけ？」こう言うに決まっている。
深見も、こう言いそうな自分だった。ほんの数カ月前まで。

深見には、研究所のみんなには黙ってやっていることがあった。もちろん牧本にもである。長下の指示だった。
「研究所の考えていることはおかしい。自分の研究の実績になりそうなことしかやらん」
深見が、夜、残るように言われて、深見がやってきた研究を説明させられた。そして、今だったら、商品に結びつきそうな研究がわかるだろうと言われて、その場で提案させられた。
その提案の中で、長下は、１つの研究を、研究所に黙って、深見がやるように命じた。ビーカーを振るような研究ではない。調査に近いものだ。簡単といえば簡単だった。研究上に重要な意味はない。ありふれている。ただ、商品にしたらおもしろいかもしれないというのが、長下の意見だった。
「来季の新製品が少ないからマーケティングは苦しい。研究所には何も期待できない」

深見は、もう３年もマーケティングにいる。長下の言っていることは、理解できる。ただ、研究とはどういうものかということを追いかけてきた深見としては、なんとも、辛い判断だった。この研究に意味はない。しかし、長下には、この研究に意味はあるのだ。

この話を牧本にしていいものかどうか、深見は迷った。烈火のごとく怒りはじめるのではないかと思った。牧本は、怒って、取り返しのできない事態になるのかもしれない。いまでさえ、もう取り返しができないかもしれないのだ。
深見の、そんな心配をよそに、牧本は、相変わらず、「わたしやってられへんよ」を連発している。
深見は、８人の同期の１人として、また大きな問題を抱えてしまった気がした。
「わたしどうしたらいいの？」
深見には、牧本が欲しがっているアドバイスなどできるはずがない。そんなことより、自分の神通力が墜ちているのだ。長下に言われて、研究的意味のないことでも、手をつけるようになっているのだ。

○真鍋からの手紙のようなメール

５月21日金曜日だった。４時ごろ、真鍋から、手紙のような長いメールが、同期の７人に来た。網野は、もういない。
「先里さんに話を聞いたので参考になればと送ります」
どうして先里なのか、よくわからない。
「通常といっても、ほとんどの新入社員は、３年間は、会社の人というより、生活者の１人です。したがって、人間として、こう動くべきだといった思考をします。しかし、３年の間に、会社の本質がわかってきます。少なくとも、４年目には、全員が理解します。会社のニーズが、社会のニーズより優先することが多くなるのです。そのことを、身をもって、理解してきます。ですから、同期の８人がいたとして、１年目は、みんなの考えていることは同じですが、次第に、会社のニーズが優先してくるにつれて、８人の考

えがズレてきます。会社の中では、お互いに競争している実態も学んできて、同期の８人でさえ、競争相手であることを認識します。同期の８人に亀裂が入らずに、４年目を迎えることなど、皆無でしょう。あり得ないことです。次第に、同期の絆は壊れてきて、全員がバラバラになります。同期会なども、いつの間にか、なくなってしまいます。それが、一般的で、フツウのことです。会社における同期とは、こういうものです」
真鍋は、どういうつもりで、先里に話を聞きに行ったのだろう。気になってメールしてみた。
同期７人に、追伸が、真鍋からきた。
「このところ同期が壊れそうだから先里さんに聞いてみた」
なぜだとか聞いても、無意味だろう。真鍋は、イヤな予感がしているのだ。多分。

深見は、メールを、自分のパソコンにメールしておいた。
土曜日に、このメールを開いてみた。
先里は、よろいを脱げと言っていることは、同期の全員が知っている。それに、今度のメールである。よろいとどこが繋がっているのかわからない。
ながく、新入社員を見てきている先里が言っていることである。まず間違いはないのだろう。同期で入社しても、３年経てば壊れるということだ。現に、深見達の同期も、壊れてきている。網野は退職した。隅安芸と有働は、まだ、盗んだ盗まないという争いをしている。秋元は、上海の営業課長になって赴任した。美濃は、上司のいじめにあっている。牧本は、長下の権力に滅ぼされるかもしれない。深見自身も、神通力を失ってきていると思っている。もう、みんな、バラバラなのだ。
先里は、だからどうしろと言っているのだろう。それが、このメールには書かれていない。真鍋は、それも聞いたのだろうか。同期会がながく続いたことはないと、評論されても困る。

深見は、このメールのことを考えながら、長下に指示された研究をまとめなければいけないと思った。最近になってわかってきたことだが、マーケティングは、とにかくスピード勝負だ。少々曖昧でもかまわない。少しは誇張が

あってもかまわない。ウソさえなければよい。
こんな深見を、牧本は怒るだろうと思う。
こうなるとは思わなかった。深見がマーケティングを希望したのは、やはり、メーカーだから、いい研究を商品に結びつけなければならない。研究は自分の得意分野である。博士でもある。もっとしっかりした研究を、商品として確立させたかった。
計算が狂ったのは、研究所がやっている研究に、いい研究がないことだ。長下ではないが、これをどうやって商品にしろと言うのだろうと思ってしまう。
商品のことを考えないまま、研究成果を追ってしまう。深見も、大学時代は、同じことしかやっていない。しかし、３年間もマーケティングをやっていると、長下のように「こんな研究は止めろ」と言ってしまいそうである。
これは、深見の計算違いだった。

真鍋から電話がかかってきた。
３コ前の電車の駅近くのカフェに来てくれだった。多分、晩ごはんも食べることになるだろうと思った。
どうして３コ前の駅なのかがわからない。
驚いたことに、牧本が一緒にいた。
「ゴメン〜ゆっくりしてたかもしれんけど」
牧本が言った。真鍋は黙っていた。
「まきちゃんの話し聞いたんだけど〜ヤバイと思うの」
真鍋が深見を呼んだ理由がわかった。３年もシンセン株式会社にいると、牧本のやっていることは、ヤバイことだと、すぐにわかる。
「なんとかなんない？」
牧本は黙っていた。いつもの「やってられへん」も出ない。
「深見くんはさ〜どうすればいいと思ってるの？」
真鍋が聞いた。
「牧本の言っていることは理解できるけど、長下さんは牧本を左遷するかもしれない」
牧本に、「わたしはおかしくないよ？」と言う元気はないように見えた。

「だから深見くんに相談してるんじゃない」
真鍋は、そう言った。
「謝ればいいんじゃないか？」
深見は、それしかないと思っている。
「他になんかないの？まきちゃん謝りたくないんよ」
深見には、他の方法などないことを、よくわかっている。牧本にもプライドがあって、大事にしていることもよくわかっている。しかし、ゼッタイにまずい。それが会社というものだと、最近は言い切れる。
そのまま食事をして話を続けたのだが、牧本が謝るということばは、結局出なかった。

〇牧本富士野の人事異動
５月31日の夕方だった。真鍋からのメールだった。３コ前のカフェで待ってるから。深見の都合を無視している。多分、牧本のことだ。
話が微妙である。深見も、慎重に、誰にもわからないように、そっとオフィスを出た。まだみんないた。
「ゴメン〜忙しいのに」
真鍋が言った。牧本は、深見の顔も見ようとはしなかった。何かがあった。
「まきちゃん〜本社の総務にどうかって〜打診があったの」
深見も驚いてしまった。ものすごく早い。
「牧本は謝らなかったんだ」
牧本は、どうしていいかわからないといった様子だった。
「その話はホントなのか」
真鍋によると、総務部長が驚いて、思わずしゃべってしまったらしい。牧本は、研究所の希望の星と言われてきた。しかし、実態は、長下と揉めているように、牧本の研究は、商品化を前提にしていない。研究価値は高いかもしれないが、シンセン食品株式会社はメーカーである。商品にならない研究は価値がない。そう長下に言われる。
深見は、真鍋が送ってきた先里のメールを思い出していた。こうやって同期は壊れるし、新入社員が、フツウの社員になるのかと思った。それにして

も、技術系大学院から総務の仕事である。
困ったことになったのだが、３人とも何をすればよいのか、何もわからなかった。

驚いたことに、１週間後に人事異動があった。６月７日である。
牧本富士野が研究所から本社総務部へ移った。社内は、みんな驚いてしまった。牧本の失敗以外には、このようなケースは考えられない。何をしたのか、社内ではうわさが広がった。牧本が長下に噛みついたといううわさは、一挙に広がった。
この時ほど、同期７人が、会社に勤めることの辛さを、思い知ったことはなかった。牧本を気にしている秋元からは、深見に、状況を伝えるように矢の催促だった。みんな、集まりたかった。これは、いままでのこととは異なる。言いたいことを言って、ストレス解消をしていたこととは違う。
しかし、深見は、みんなを集めにくかった。こうやって同期が壊れると、先里が言っているようだった。

６月21日には総務に赴任するように指示が出されていた。牧本は、１週間、実家に帰った。神戸だった。
深見は、牧本が、もう会社には返って来ないのではないかと思っていた。あの牧本である。理不尽さには、ゼッタイ服従しないと思われた。
しかし牧本は研究所に帰ってきた。そして、６月21日には、総務に赴任した。総務に赴任といっても、研究所と本社の総務は、同じ敷地にある。場所が大きく変わるわけではないが、仕事の内容が変わる。
牧本から、メールも来なくなった。真鍋からも何も連絡がない。真鍋と牧本は、隣同士の島になる。
深見は、同期の仲間ほど頼りないものはないと実感した。何もできないのだ。牧本のために、何もしてあげられなかった。網野にもである。
深見自身も、神通力がなくなってきている。今度の牧本の件は、深見にも、慎重さを求められていると実感した。

深見が牧本と会うことはなくなった。以前は、研究所とマーケティングで

あった。定例会もあって、会合で会っていた。しかし、今は、牧本がどういう雰囲気で仕事をしているのか、さっぱりわからない。相変わらず「やってられへん」を連発しているのだろうか。多分、それがなくなっただろうと思う。
深見は、真鍋にメールした。
「牧本は何をしていますか？元気ですか？」
夕方になって返事が返ってきた。
「まきちゃんは、３コ前の駅のダンススクールに通っています。部活の復活だと言っています。マイケルのダンスです」
深見は、これほどまでに、同期が遠くなってしまったのかと思った。今度のことほど、同期が頼りにならないと感じたことはなかった。これは、７人みな同じだろう。そして、遠くなった。牧本の「やってられへんよ」は、懐かしくなってしまった。牧本は、もう言ってないだろう。

深見は、長下に指示された研究のことで、札幌に行くことになった。シンセン食品株式会社では、本社の総務が、一括して飛行機のチケットを手配している。総務宛てにお願いをした。返事が返ってきたのは、牧本だった。
「どうもありがとう〜元気そうで、ホッとしました」
こう付け足したのだが、「気〜つけて」くらい言ってくれていたのだが、何もなかった。寂しい。このままでは、同期を集めても、牧本は来ないかもしれないと、深見は思った。

○深見に降りかかったとんでもないこと

７月１日だった。深見に、とんでもないことが起こってしまった。
深見が担当して進めていて、かなりの売上を稼いでいた健康食品が、表示上の効能どおりではないと、民間の調査会社が発表したのだ。
シンセン食品株式会社では、担当していたのが深見である。突かれるようなことはないと思っていた。専門雑誌に掲載されたものだが、掲載後３日後には、取り扱いを止めるお店が現れた。思ってもみなかった事態になった。深見は、取扱い中止をしたお店を回って、説明をして歩いた。

「雑誌の記事は本当なのか聞いてますのや」
深見は、多分、取り扱い中止の流れを、止めることができないと思った。ゴチャゴチャ細かい反論をしても聞いてもらえない。もっとシンプルな結論を望んでいる。
「あの記事は本当なのか」
マーケティングでも深見は批判にさらされた。
「あんた博士でしょ？」
１コ下のまだ新人の女性に、ミナミの居酒屋の女将のような言い方をされても、深見には、顔を上げて反論することができない。
反省があるとすれば、売らんがために、ついつい気が入り過ぎてしまった。よくあることだ。それなのに、どうしてこれだけが、ひっかかってしまったのか。
長下は、諦めているようだった。多分、深見がやっているからと、チェックが曖昧になったと思っているだろう。
１週間経って、もう決着がついたと思ったのだが、１つのワードの文章が、先里研究室から発行されて、社内にメールされた。
先里一郎が、記事を書いた研究者と面談した内容だった。分析結果が間違っていると言っているのではなくて、焦点が偏っているというのが、先里の主張だった。シンセン食品株式会社も偏っているので、先里が、シンセン食品株式会社を守ることはできないが、先里と、分析者の、一致点を見出したものだった。
先里の結論は、パッケージ変更を至急に行って、先里の視点で、表現をやり直すというものだった。この案で、記事の執筆者も納得していると書かれてあった。
深見は、どうして関係のない先里一郎が出てくるのか、よくわからなかった。しかも、深見に何も知らせないまま、記事の執筆者と会っている。深見は、長下が、どういう反応をするか、興味があった。マーケティングを守ってくれるだろうと思っていた。先里にクレームをつけてくれるものだと思っていた。
「１週間でやってください」
深見は、唖然としてしまった。先里一郎という人は、どういう人なのだろ

う。なんか言いたそうな深見を見て、長下は言った。
「文句は言うな、このまま撤退に追い込まれたら。おまえはマーケティングにはいられなくなるんだぞ」
これは、深見の失敗なのだ。ついつい表現に入れ込んでしまったのだ。しかも、もっとまずことは、この健康食品の効能の焦点がズレていると先里に言われている。
深見の面目は、丸潰れである。
「先里さんの視点は違うと思いますけど」
深見は、長下にくい下がった。
「おまえの面目などどうでもいい」
一言で、深見は、何も言わなくなった。
７月14日に、新しいパッケージに修正されて、同じ商品が店頭に並んだ。あたかも、何事もなかったかのように、コトは進んだ。しかし、深見は、長下に呼ばれて言われた。
「暮れのボーナス少ないから挽回しろ」

真鍋からメールがきた。
「先里さんにお礼言ったの？」
深見は、なぜ先里にお礼を言わなければいけないのか、わからなかった。
「先里さんの案がなかったら、深見さんはどこか飛ばされてたって、みんなが言っている」
深見は、勝手に手を出してきた先里が気に入らないのだ。しかも、深見の視点がズレていることになってしまった。
真鍋のメールに返事もしなかった。お礼など言う気になれない。真鍋は、何かというと先里を出してくる。先里に意見を聞いてくる。先里の味方で、同期の深見の味方ではないような気がする。
深見は、ここのところ、牧本を気遣うことを忘れてしまった。それどころではない。深見の神通力が完全に失われたと思った。
真鍋から続けて長いメールがきた。深見が返事をしないからだろう。しかし、そのメールは、同期の７人全員に宛てられていた。
「同期の３年間は、お互いに競争がないから、同じ視点で、お互いを思いや

ることができます。しかし、次第に、社内事情に詳しくなって、社内事情の優先の仕方によって、お互いの焦点がズレてきます。しかも、個人の損得が、次第に、大きく係ります。３年間の純粋でもあった価値観は、もう一致を見ることはなくなります。個人的な損得の価値観が、優先します。それがフツウです。なぜこうなってしまうのか、よく知っていなければ、人間として困ったことになります。結論的に１言で言ってしまえば、新入社員時代の３年間には、それまで身に着けたよろいが、威力を発揮しなかったからです。自分のよろいが何かを言うこともなかったのです。ところが、３年を過ぎると、新たなその会社におけるよろいができてきて、どうにもならないワルサをしてしまいます。よろいを脱ぐことがますます難しくなっていくのです。よろいを脱げば、ラクになります」
先里さんに昨日聞いた話ですという真鍋のコメントが付いていた。
深見は、これを読んで、深見が、自分のよろいにこだわって、この健康食品の解決案を見い出せなかったと、言われているようだった。そう感じた。深見には、よろいがあると言われていると感じた。
深見は、このメールにも返事をしなかった。
真鍋が、こんなことを、なぜ先里に聞きに行かなければならないのか、全く理解できない。
続けてまた真鍋からメールがきた。
「同期というのは、同じ会社の中にいて、最も、よろいを排しやすい仲間になる可能性があります。同期という共通の基盤があって、セクションがバラバラの可能性があって、お互いの競争が少ないからです。人は、１人では生きられません。損得なしに、お互いに助け合うことができる可能性があります。よろいがあると、損得を排せません」
大事なことを忘れていたという、真鍋のコメントが付いていた。
深見は、もう完全に、真鍋はおかしいと思った。

○秋元雄二の嘆き

深見が、とんでもない降りかかった出来事で忙しい時、上海から、秋元雄二の、１通のメールが、七夕の日に来ていた。深見は、とりあえず、飛ばして

読んでいた。気にしているヒマもなかった。そして、真鍋のメールに前後して、秋元が出した次のメールは、気になるメールになっていた。
上海の３人の中国人の営業からバカにされていて困っているという内容だった。秋元雄二は、英語が話せない。もちろん中国語も話せない、勉強中なのだ。秋元は、親会社のシンセン食品株式会社の出身である。入社４年目とはいえ、立場がある。一緒に営業に出向いても、ガンバってくれないと嘆いていた。どうしてできなかったかを英語で説明されてもわからない。
もう、こんな毎日が続いていて、成果が上がらないと言っている。
次の日の真鍋が秋元に返事をしたメールを見て、深見は、気分がワルくなった。
「秋元くんには、何もできないんだから、３人の中国の営業の人の下働きをすればいいのではないですか？車の運転をしたり、途中でお茶をしたり、お金は秋元君が払うんだけど。何もできないのに、オレは販売課長だとか威張ってみても、どうにもならないと思うけど」
多分、また先里に聞きに行ったのだと、深見は思った。なにかにつけて、真鍋は、先里に意見を聞きに行っては、同期の７人にメールする。仮にも、秋元は、親会社のシンセン食品株式会社の営業課長である。真鍋の言うようなことはできない。何を考えているのか、さっぱりわからない。
秋元から返事がきた。
「そういうことだったら、オレじゃなくても、誰でもいいではないか、オレは、オレ流の営業のやり方がある。それが認められて、同期で最初の課長になったんだから」
少し、真鍋とは、噛み合わなくてきている。
深見は、このまま秋元がガンバっていると、上海での営業成績が上がらずに、結局、秋元は、１年ももたないのではないかと感じた。深見は、次第に、こういう読みに長けてきている自分を感じていた。
「秋元くん、オレ流のやり方を発揮できないのに、大きなこと言うのは止めた方がいいわよ」
真鍋が、追い打ちをかけるようなメールを送った。深見は、こういう言えそうもないことを言えるのも同期なのかと思った。
深見は、夜、自分のパソコンから、秋元に、メールした。

みんなにゴチャゴチャ言われるためにメールしたのではなくて、それでもガンバってと、励ましてくれるものだと思っていたとのことだった。同期とは、そういうものだ。
深見は、みんなではなくて、真鍋１人だと思った。みんなは、ガンバってくれでいいのだ。
真鍋にメールしてみた。
「バッカじゃないの？それでホントに同期が助け合うことになると思ってんの？深見くんだって、このままいったら、秋元君が危ないと思ってんでしょ？」
深見は、しょうがなく「うん」という、超短い返事をする以外になくなった。
深見は、もう同期についても、みんなの考えがバラバラになったと思った。秋元は励ましてほしいし、真鍋は助け合うことだ。深見は、どう思っているのだろう。自分のことはよくわからない。牧本は、頼りにはできないと思っているに違いない。
秋元は、３人の中国の営業の下働きをするだろうか。多分しないだろう。深見でもしない。これは、先里が真鍋に言ったことなのだろうか。先里は、何が言いたいのか、よくわからない。深見には、よくわからない。

深見が、夜自分のパソコンで秋元雄二にメールして１週間も経たなかった。子会社の上海シンセン食品株式会社の人事が発表された。
マネージャーとして、45歳の人が入社してきた。中国の人だった。秋元雄二は、営業課になっていた。課長で新しい人が来て、秋元は、降格させられたのだろう。
あたりまえかもしれない。営業は成績である。成績が上がらないと同期に嘆いているようでは、先が見えていた。５月の連中明けに東京支店から上海に赴任して、まだ２カ月である。アッという間の出来事だった。
深見は、心配になって、夜、秋元にメールしてみた。
自分が課長の時には、１件の新規の取り引き先も開拓できなかった。しかし、今度の新しいマネージャーは、上海の事情に詳しく、すでに３件の取引先を決めた。秋元は、新しいマネージャーにくっついて、上海での食品の仕

事を教わっているというメールだった。３人の中国の営業の社員とも、うまくいきはじめたらしい。
深見には、まだよくわからないところがある。仮にも、日本のシンセン食品株式会社の社員である。親会社である。
同期で集まった時の、秋元の誇らしげな態度は、あれは、何だったのだろう。たった２か月前である。おかしなことになってしまった。ここのところ、牧本といい、深見もだが、秋元も、何かに叩かれている。目に見えないものに叩かれている。牧本も深見も秋元も、辛い想いをしている。特に、自分の存在に係る辛い想いである。
去年までには、このようなことはなかった。網野の退職も、今年に入ってからだ。入社４年目になって、何かが、深見達を襲っている。

〇網野ゆみこからの突然のメール
「２００７年の新入社員研修が１番楽しかった。いろいろありがとう」
いきなりの網野ゆみこからのメールだった。最初に反応したのは真鍋だった。
「危ないんよ〜何かあったんよ」
深見には、どうしていいのかわからない。
深見も「どうしたんだ？何かあったのか」という返事をしたのだが、それっきりだった。まだ秋元のショックから、みんな立ち直っていなかった。
次の日、美濃飛翔から全員にメールがあった。
サンセン食品まで出かけてくれていた。
「網野ゆみこには、今は会えない。病院にいる。助かったと聞いた」
さっぱりわからない。深見は、美濃に電話をした。
「自殺した」
深見は、驚いてしまった。理由がわからない。
「真鍋が東京に来ると言っている。真鍋に聞いてくれ」
深見は、驚いてしまった。確かに、連休になる。連休にはなるが、なぜ真鍋は網野ゆみこのところへ行くのだろう。
深見は、真鍋にも電話した。もうメールはまどろっこしい。

「行きたいから行くんよ〜それだけ」
深見には、次の言葉がなかった。
「じゃ〜状況がわかったら知らせてくれ」
深見のこういう態度に、真鍋は怒ったようだった。
「何したらいいか考えてて」
それだけ言って、さっさと電話を切ってしまった。
深見は、考え込んでしまった。２００７年にシンセン食品株式会社に入社して、わずか３年である。３年といより、４年目に入った今年である。たった３ヶ月くらいの間に、仲間の８人に、思ってもみないことが起こっている。多分、最も辛かったのは網野だ。網野は、ハンティングされた。チーフマネージャーである。それが、アッという間に自ら生き残ることを断とうとした。何があったのか。

７月18日日曜だった。真鍋から電話があった。まだ朝の６時だった。
「すぐ新幹線で来て」
深見は、飛び起きた。
「何したらいいか考えたでしょ？」
深見は、何も考えていない。網野のために、深見が何をすればいいのか、ゼンゼンかわっていない。
「何か持っていくものはあるのか」
お金だけ持って来てと、真鍋は言った。
病院に着いたのは、まだお昼になっていなかった。
「真鍋は昨日どこに泊まったんだ？」
真鍋は、ビジネスホテルに泊まっていた。今日中に東京を引き払うから、一緒に手続きをやってくれと、真鍋は言った。不動産会社もメンドーそうだから。
深見は、網野のアパートに行きながら、事情を話してくれと言った。さっきも病院に行ったものの、真鍋は、深見を、網野に会わせなかった。
「サンセン食品の社長がワルだったんだよ。それ以上のことは深見君でも話せない」
深見は、だいたい察しはついた。しかし、自ら生き残ることを断つからに

は、深見がイメージする以上のことがあったのだろうと思った。
真鍋は、アパートに着くと、運送屋さんを呼んで、片づけをはじめた。今日中に、網野の堺の実家に送るのだと言った。
「どうしてお母さんたちがやらないんだ？」
深見は、両親も来てるだろうにと思った。
「そっちの箱は開けないで」
男物の衣類があった。
「社長のオンナやってたのか」
結婚するつもりだったのに、奥さんも子どももいたらビックリすると、真鍋は言った。真鍋は、スパッと切ってしまいたいと言った。アパートの不動産会社にも来てもらった。修理するところは何もなかった。７月の家賃を払わなければならない。
「お金持ってきたでしょ？」
真鍋の指示通り、お金を払った。男物の箱は、真鍋が、送る住所を、不動産会社に知らせていた。そして、引越し屋さんに荷物を持っていってもらった。その費用も深見が払った。
「東京に荷物がなにもなくなるけど、網野は困るんじゃないのか」
深見は、心配になった。
「明日のお昼の新幹線でわたしと一緒に堺に帰るんよ」
堺の病院を紹介されていると、真鍋は言った。
「深見くんさ〜ありがとう〜おかげでゼンブ終わった〜もう大阪に帰って」
確かにそうだ、真鍋の作戦通り、コトが進んだ。真鍋は１人では不安だったのだろう。深見が来た意味はあった。しかし、もう深見がやれることはない。あとは、堺の網野の家族がどうなるか、心配なだけだ。アッと言う間に真鍋は切り取った。心の傷をナイフで切り取るように、時間を切り取った。
深見は、４時ののぞみの自由席で、大阪に帰った。真鍋は、今日もビジネスホテルだろう。

連休明けの７月20日、深見は、真鍋にメールした。
「堺は上々ですか？」
「今のところグッドだけど」

短い返事だった。真鍋は、予定通り、網野と２人で堺に帰ってきて、堺の病院に入院しているだろう。そこまでは、うまくいったという意味だ。
深見は、真鍋がよくわからない。確かに仲間である。２００７年に、一緒にシンセン食品株式会社に入社した仲間である。ただそれだけなのに、真鍋のやっていることは、親以上のことである。少なくとも、深見にはできない。なんだろう。

○これで落ち着くと思っていた
深見は、同期で集まって話し合うことが、みんなのプラスになっていたことをわかっていた。しかし、今は、集まれないのだ。牧本も、多分来ないだろうと思った。もう大きく変わってしまった。何かにつけて集まっていたのに、集まることが楽しかったのに、今は、集まることが辛くなってしまった。
深見は、先里が言っていたとして、真鍋がメールしてくれた内容を読んでいた。３年が経過すると、いろいろなことが起こってくるというのは、当たりだった。コンサバになるのは、どうなのだろう。まだ深見にはわからない。同期がバラバラになるのも当たりだった。
先里は、何が言いたいのだろう。よろいを早く脱げと言っている。それは間違いない。しかし、それが何なのか、深見には、よくわからない。よろいは、そんなに悪さをするのだろうか。
夜、考えるでもなく、ウトウトしていると、網野からメールが来た。
「ナベから聞いたんだけど、お金深見君が払ってくれたそうだけど、就職決まって働いたら返すから、ちょっと待ってて。頼りになると思った。どうもありがとう」
深見は、すぐに返事をした。すぐに返事をしないと繋がらない気がした。
「お金のことは気にしないでいい、いつか、また会えるといいのにと思う」
おかしな話だが、深見は、網野のメールを見て、なんだかホッとした。しばらくぶりで、メールを見てホッとした。それが何か、よくわからない。

そして１週間後、網野からメールがきた。介護施設で栄養士として就職した

と書いてあった。栄養士だったのだ。
「まだ就職しただけだからお金ないから、まだ返せないよ」
「お金のことは気にしなくていいから元気にやってください」
もっと気の利いたメールにしたいのだが、早く返事をする方が先だと思うようになった。
網野のことは、これで落ち着くのではないかと思われた。
「もしもし〜すぐ来て〜堺にいるから」
真鍋の緊急電話だった。すぐに、網野のことだとわかった。堺というと、網野に決まっている。
８月２日で月曜だった。電車の中で、何があったのか想像してみた。最悪のこともあり得る。しかし、真鍋は、どうしてここまで網野に親身でいられるのだろう。不思議だった。真鍋に、何かと頼られている自分も、ワルクはないと思った。
介護施設の玄関で、真鍋は待っていた。
「ゆみこ〜食べないからって怒ったんよ〜おじいさん」
「施設長に言いつけられて、あの女がいると食べたくないになったんよ」
深見は、ホッとした。もっと最悪のことをイメージしていた。１度あることは２度あるというイメージをしていた。
「あんたおじいさん得意だからお願い」
とんでもないことになった。おじいさんに謝ってほしいから深見を呼び出したのだ。真鍋は、何を考えているのだろう。
「ゆみこ〜ダメなんよ〜よろい厚いから〜自分が栄養士だと思っちゃうんだよ」
真鍋は、おかしなことを言った。よろいが厚いからダメだと、網野のことを言った。どうなっているのだろう。先里一郎が、真鍋の影にいる。
「怒ったって食べたくないもんは食べたくないからさ〜」
真鍋は、網野に非があると言った。だから深見に謝ってくれである。
網野は、調理室にいるらしい。おじいさんは、網野を見かけないことを確認して、晩ごはんを食べたらしい。
「真鍋は、どうしてここまでやるんだ？」
「わたしゆみこの推薦人になってるんよ」

深見は、驚いてしまった。網野ゆみこが堺で就職できるように、真鍋麻衣子が推薦人になっていたのだ。推薦人というか、身元引受人でもあるのだろう。よく調べられたら、それだけで断る会社もあるだろう。一度は、自分を断とうとした。

深見は、施設長にお願いをした。おじいさんに会わせてほしいというお願いである。施設長は不思議な顔をした。この程度のことは、施設ではよくあることで、あまり気にしていないとのことだった。

網野が、気になって、心配になって、真鍋に電話したのだろう。

「わたし怒ったんよ〜ゆみこ〜おじいさんに無視されたらイヤなんよ〜カッコつけだから」

深見には、まだよくわからないところがあった。真鍋が、網野の何がダメだと言っているのか、よくわからない。

「深見くんさ〜おじいさんと同じ目線で話してよ？」

真鍋が、深見にも、おかしなことを言った。真鍋が自分で話した方がいいのではないかと思った。

「あのおじいさんはオンナが嫌いなんよ」

深見は、驚いてしまった。真鍋は、おじいさんとは会っていない。それにもかかわらず、オンナが嫌いだと言った。

「網野のごはんはおいしくないのですか？」

警戒されて、深見を見てもくれないおじいさんに、切り出した。

「網野は友達で、謝りたいと言っているんです」

やっと深見を見てくれた。

「網野は、おじいさんがごはんを食べないことを心配して、ちょっときついことを言ったんです」

おじいさんは、網野を連れてくるように、深見に言った。

まだ話して少ししか経っていない。深見は心配だったが、外にいた真鍋に頼んだ。

網野は、深々と、おじいさんに頭を下げた。

「明日からよろしくお願いします」

深見も、おじいさんにお願いして、外に出た。

どうなったのか、深見にはわからない。

「深見くんありがとう〜何から何まで深見くんに頼ってワルイと思ってるんよ」
真鍋もやってきて、網野にこう言った。
「ゆみこさ〜あんたよろい脱がないとやっていけないわよ〜おじいさんはさ〜もうよろいないからさ〜あんたのよろいがイヤなんよ」
網野は、まだよくわからないという顔をしながらでも、わかったと言った。
深見は、堺の駅前のレストランで、真鍋とごはんを食べた。
「ゆみこはダメなんよ〜社長に自分が選ばれたらうれしいんよ〜タダのオンナじゃない〜部長になったらうれしいんよ〜タダのサラリーマンじゃない〜おじいさんに無視されるとガマンできないんよ〜みんな〜ゆみこのよろいなんよ」
深見は、真鍋を見ているしかできなかった。
「いつも深見くんには助けてもらって〜ありがとう」

〇深見と先里
８月３日だった。シンセン食品株式会社も、夏休みは、交代で休むことになっていた。しかし、深見は、健康食品の中傷記事の後始末に追われていて、夏休みどころではなかった。先里が出してくれた文章で、シンセン食品株式会社の社内は落ち着いた。取り引き先も、そのまま商品を店頭に並べてくれている。しかし、深見にとっては、失態と言われている。中傷記事が出た時に、何もできなかったからだ。どうしていいのか、深見はわからなかった。言い訳を考えていたような気もする。
深見は、挽回しなければならない。暮れのボーナスは、大幅ダウンになる。
深見は、秋の新製品に、何かを提案せざるを得なくなっていた。挽回しなければならないからだ。いくつかある中では、あまり深見自身が、乗り気ではなかったものしか残っていない。それでも仕方がない。深見は、集中して、説得できる資料をつくっていた。３年もやっていると、コツもわかる。この前は、少し突っ込み過ぎた。
今晩アパートで徹夜でやれば、なんとかカタチになるだろうと思っている。
モノそのものは、研究所では完成に近いところまできている。

８月６日だった。深見は、秋の新製品の提案会に、割り込ませてもらった。もともと、シンセン食品株式会社は、新製品が多い会社ではない。少しでも可能性があれば、歓迎なのだ。深見の新しい提案も、ギリギリ秋の新製品に滑り込みそうである。長下も、何も言わない。無言の承認をしている。
「このテーマは、永年先里一郎さんがやってきてるので、話をよく聞いて来るように」
深見は、意外だった。マーケティングは最後の決断をするところである。そのように教えられてきた。深見も、責任があると言われてきたし、そう思っている。それが、研究所に話を聞いてこいというのは、どういうことだろうか。
そもそも、深見は、先里一郎がよくわからない。何をしているのかも、よくわからない。先里研究室というものがあるのだから、シンセン食品株式会社としては、貴重な人材なのだろう。
研究所の人達は、深見たちマーケティングに、自分の研究に興味を持ってもらいたくて、何度も出かけてくる。時間をとってくれというメールが、頻繁にくる。しかし、先里から、そのような要請があったことはない。深見には、先里の存在意義が、よくわかっていない。

早い方がメンドーにならなくていいと思って、明日伺いたいと先里一郎にメールした。
「お待ちしています。時間をお知らせください」
深見は、研究所の方が圧倒的に近い。９時には、もう先里研究室にいた。
「コーヒー煎れてますから」
先里研究室は、先里一郎が１人でやっている。秘書がいるわけでもない。この人は何だろうと思う。
「11時にマーケティングの会議があるので、できたら話をはじめたいのですが」
深見は、11時の会議が、重要な会議ではないのに、11時までにミナミのオフィスに行かなくてはならないと言った。もともと、長下が話を聞いてくるように指示したものだ。早く済ませておかないと、また、話を聞いてきたの

かと、聞かれると困る。
先里は、どうぞと言って、自分の机の横の椅子に、深見を坐らせた。深見のコーヒーも、先里がカップに注いだ。
「６年も前からやっているんだけど、マーケティングでは誰も取り上げげなかったテーマだけど、どうしてやる気になったのですか？」
あたかも先里がやってきたかのような言い方だが、研究所から提案されたのは、深見の１コ下の社員からだった。一応聞いてみた。
「先里さんのテーマと２つあったのですか？」
先里は、不思議な顔をした。
「私がずっとやってきたことを、仕上げるようにお願いしたんです」
先里は、自分のテーマを、３年目の新人にあげたのだろうか。もし、秋に新製品が出た時も、３年目の新人の実績になって、先里には、何もない。先里は、どうなっているのだろうか、深見の感覚では、よくわからない。深見は、挽回しなければならないので、これを取り上げている。
「このテーマをマーケティングが嫌ったのは、競合が強いからです」
深見は、そのこともよくわかっている。しかし、深見が挽回できる玉は、そんなに多くは残っていない。
先里は、困ったような顔をした。
「この強い競合に、どうやって立ち向かうのか、書いてみてください」
深見は、驚いてしまった。先里は、深見の上司ではない。あたかも上司のような言い方をする先里が、よくわからない。しかも、ガリバーがいることも承知しているが、どうやったらガリバーを打ち砕けるかなど、考えたこともない。
「たとえ５％でも喰い込めれば、それだけで大きな売上になります」
先里は、またもや困った顔をした。
「商品の戦いに、そういう戦いはありません」
深見は、カチンときてしまった。研究所の人間に、マーケティング上の指図はされたくない。それでも、「よく考えて失敗しないようにやります」
深見は、これだけ言って腰を上げた。これ以上先里と話したくなかった。
先里はなんなのか。マーケティングの先輩でも「商品の戦いにそういう戦いはありません」などと、深見に言う人はいない。

夜、真鍋からメールが入った。
「深見くん、先里さんにお礼言ったの？今日先里研究所に行ったみたいだけど」
深見は、どうして真鍋が知っているのか、不思議だった。それに、真鍋は、ずっと、先里にお礼を言えと言っている。深見は、真鍋に返事をしなかった。
「それに、土曜日なのに、先里さんは深見くんのために出勤したのに、深見くんはお礼も言わないの？」
次の日の朝、真鍋から電話がかかった。日曜の朝だった。
「先里さんは、深見くんのために、いろいろやってくれるから、深見くんの味方だから、お礼言っておいて」
深見には、先里が、深見の味方になってくれる感覚はなかった。なにかにつけて、深見を責める側にたつのではないかと思っている。
「わかった」深見は、真鍋の言っていることが、理解できていない。真鍋は、先里の考えに翻弄されているような気がしている。しかし、このままほっておくと、毎日、真鍋から電話がかかってくると思った。

〇深見の提案はみんなに反対された

次の日、８月９日月曜だった。秋の新製品候補の集中検討会がはじまった。もう時間がない。パッケージもできているものもあったが、深見の提案した新製品は、まだ何もできてはいない。
14時からはじまった深見の提案している新製品は、マーケティングの、ほぼ全員の反対を受けた。深見は、こういう新製品ははじめてだった。マーケティングの空気はよくわかっている。反対されそうなものには、手を着けない。しかし、今回は、そうも言ってはいられない。深見には、挽回しなければならない負い目があった。ガリバーがいるが、たとえ５％でもシェアーに喰い込むと、シンセン食品株式会社としては、大きな売上となる。
ほとんどの反対は、リスクだった。発売しても、振り向かせることができないという意見だった。店頭には並ぶかもしれないが、回転はしない。お客さ

まに買っていただけないという意見である。
白熱した。深見が、こういう立場にたつのは、珍しい。はじめてかもしれない。深見は、みんなが賛成してくれそうなテーマを選んできた。
「少しムリしてるんじゃないの？」
２コ先の先輩には、こう言われた。しかし、深見には、ここで引き下がるわけにはいかなかった。挽回がかかっているのだ。今年中に挽回するには、秋の新製品しかない。
「先里一郎さんに、どうしたらガリバーを打ち崩せるか聞いてこい」
深見は、会議のあとの長下のことばは、すごく意外だった。そもそも長下は、「あんたたちはモノをつくっていればいいんだ」そう言ってはばからない。研究所の人間は、生活者がわからないからどうにもならないと、よく言う。それなのにである。
「５％を狙ったって、結局ゼロになるんだよ」
長下は、先里と同じようなことを言った。
仕方なく、深見は、先里にメールをした。今から出かけることにした。夕方になるが、先里は、「どうぞ」だった。

先里研究室といっても、先里一郎が１人でやっている。大部屋の研究室の隅を、パーティションで仕切ってあるだけである。大部屋の研究室に入ろうとすると、真鍋が待っていた。どうして真鍋は、深見が研究所に来ることを知っているのだろう。
「先里さんには、みんなお世話になってるから、お礼言っておいて」
みんなとは誰のことを言っているのだろう。真鍋と深見の接点は、８人の同期しかない。同期の８人が世話になっていることになる。深見には、先里に世話になっている感じはない。
「いまそこで、経理の真鍋に会いました。みんな先里さんに世話になっているから、お礼を言っておいてくれとのことでした」
一応、深見が、８人の同期のボスのような役割をしている。
先里は、返事をするでもなく、手元の資料を揃えていた。
「一応、いままで調べたことを整理しておきました」
先里は、ファイルにしてある１冊を、深見に渡した。深見は、話をはじめる

前に、読まないといけないとは思った。
「ちょっと交通費の精算してきますから」
そう言って、先里は、先里研究室から出て行った。これを読めと言うのだろう。
深見は、驚いてしまった。１コ下の研究所の担当からは、モノに関する提案を聞いただけである。この商品が、どうして免疫賦活になるかなど、聞いていない。実験もしている。ただ、これだけのエビデンスでは、大きなことは言えないかもしれない。ガリバーの商品と異なるのは、ビタミンミネラルを主にして、展開していることである。ガリバーの商品は、エネルギーだ。この話も聞いてはいない。どうして、ビタミンミネラルが、エネルギーになったのだろう。先里に、聞いてみなければならない。
先里は、どういう立場の人間なのか、いまだによくわからない。深見は、３年もシンセン食品株式会社にいる。それなのに、先里という、先里研究室の室長がわかっていない。

「研究所でも、このテーマを取り上げることには、みんな反対するんですよ」
先里は、言った。
「できるだけマーケティングも賛成しやすいように、修正するんです」
この新製品の訴求ポイントが、ビタミンミネラルからエネルギーに変わったのは、ガリバーのチカラを利用しようとする配慮からだと、先里は言った。
「先里さんの考えですか？」
「私は、そのような弱気なことはやらない」
研究所の中でも、ゴツゴツのものを丸くしていることを、はじめて知った。マーケティングでは、それをもっと丸くしてある。
深見は困った。時間がないのに、これまで深見が言ってきたことを、ここで修正すると、またみんなにゴチャゴチャ言われる。
「マーケティングでみんな反対していて、長下さんも困っているんです」
「なぜみんなが反対しているのか、考えなければならない」
深見は、また困ったことが増えると予感した。マーケティングのみんなが反対している理由など、考えたくはない。みんなと反目したくない。できれ

ば、今回も、このテーマを取り上げたくない。しかし、深見には、挽回しなければならない負い目がある。
「みんな強く戦った経験がないから、ガリバーに挑むのが怖いんですよ」
深見は、だから先里と話をしたくないと思っていた。いまさら、ガリバーを打ち崩すなどと言えないし、言いたくはない。強く戦ったことがないと言うのは、こういうことを指しているのだろう。
「ガリバーがエネルギーを訴求しているから、同じ訴求で５％でもと思うような弱気な作戦では、結局ゼロになります」
長下と同じようなことを先里は言った。
「勝負どころは、お客さんが、この商品は、エネルギーなのか、ビタミンミネラルなのか、自分で判断することです」
「私は、お客さんは、本当は、ビタミンミネラルと判断すると信じている」
先里と話さなければ良かったと思った。どうせ今年の秋も、これといった新製品がない。マーケティングのみんなは、今は深見の提案に反対しているが、もう少し時間が経てば、「仕方ないか」になると、読んでいる。もう３年もマーケティングをやっている。読めるのだ。
それなのに、ここにきて、ガリバーと正攻法で戦うような提案修正は、得策ではない。
「これお借りしていいですか？」
「差し上げます」
深見には、先里の、こういうところも、ゼンゼンわからない。今は、他者が考えているアイデアだって、未発表であれば、自分の案だと言ってしまうことが、フツウになっている。自分でアイデアをひねり出すより、アイデアを盗めそうな場面をつくりたがる。
こんな時代に、先里は、差し上げますと言う。さっぱりわからない。

〇長下の決断

次の日８月10日も、秋の新製品の検討会だった。15時なって、長下が言った。
「深見の提案している新製品をこれから１時間話し合います」

深見は、慌ててメモリースティックを取りに、机に走った。昨日、夜中まで、先里の資料を読んで、スライドをつくっておいた。
「昨日、先里研究室と話しているはずだけど、説明してください」
長下は、深見に、説明を促した。
おかしなことになったと思った。スライドは、先里のスライドに近い。昨日までの深見の説明とは、少々異なってきた。免疫賦活の話など、昨日まではしなかった。みんな静かに聞いていた。
ガリバーの話になって、やっぱり、エネルギーにしないと、お客さんは、この商品が、エネルギーだとみんなわかっている。シンセン食品株式会社だけが、ビタミンミネラルだと言っても、通用しない。
この新製品の深みは増したが、深見の考えが変わったわけではなかった。たとえ５％でも、大きな売上になるという考えである。
今日は、みんなの反対が少なくなった。研究所も、けっこうやっているという印象になったのだと思った。
しばらくして長下が言った。
「免疫賦活とビタミンミネラルで、11月１日発売にします。５千万円の予算をつけます」
おかしなことになってしまった。深見はそう思った。これでまた滑ったら、挽回どころではない。牧本と同じように、専門の仕事をさせてもらえなくなる。どこかに飛ばされる。

夜になって、深見は、長下に話があると言って、時間を空けてもらった。
「私は、リスクが大きいと思います。賛成できません」
深見は、今年２回目の失敗で、長下に、どこかに飛ばされることを予想していた。
長下が次に言ったことばは、深見にとって、予想外だった。
「深見が降りてもこれはやるから」
深見の頭は、霧に包まれたように、真っ白になってしまった。
次の日、深見は、長下に呼ばれた。
「私は、やはりリスクが大きいと思います」
そして、次の日だった。

「三条くんにやってもらうことにしたから、深見君は、別のテーマを探してください」
全く意外だった。三条史郎は、深見の３年先輩である。これといって実績はない。深見には、どうしてこういうことになってしまったのか、全く理解できなかった。みんなも反対している。リスクが高い。
深見は、長下に喰い下がった。
「このやり方では失敗します」
「失敗しそうなテーマをなぜ選択したのか」
長下は、少しでも稼げればいいという消極的な考えは、ガリバーと戦う時には、避けなければならない選択だと言った。それは、マイナスになる可能性があるかららしい。
「深見は、個人的なことばかりが気になってるが、時には、失敗してもいいから、やらなければならない時もある」
長下からは、普段聞かれないことばが出てきた。
「それで失敗したらボーナス助けてくれるのですか？」
そう聞きたいところだったが、深見は、ガマンした。
なんとも割り切れない。深見は、交替させられたのだ。深見は、連続して屈辱を浴びた。担当していた健康食品の中傷記事から、健康商品を守れなかった。守ったのは、先里一郎だった。そして、挽回のためにはじめようとした、ガリバーのいる食品である。それも、担当を交替させられた。
その帰り、深見は、ミナミで深酒をした。誰も、深見の気持などわかってはくれない。１人で深酒をした。
深見には、どう考えても納得がいかない。いつも長下が言っているように動いたら、今回は、とんでもないことになった。先里は、マーケティングの敵だと思っていたのに、長下は、先里と同じようなことを言っている。さっぱりわからない。翻弄されていると思った。

○殴られて顔の右が腫れて

遅くまで深酒してパソコンも開かなかった。出がけに、一応開いてみた。今日休んだら、長下に、なんと言われるかわからない。頭はガンガンするが、

とにかく、急ごう。
真鍋からのメールが入っていた。
「深見くん交替させらたの？コンサバになったんだってみんな言ってるけど」
深見は、深いため息をついてカギを締めた。
電車もながい。座りたいのに座れない。頭はガンガンである。真鍋はどうしてなんでも知っているのだろう。深見が担当を交替させられたのは、昨日である。昨日の夜のメールだから、昨日のうちに知っていたことになる。それに、コンサバになったのかとは、どういうことだろう。先里が、３年過ぎるとコンサバになると言っていたが、このことか。
コンサバというより、怖さを知ってきたことではないかと思った。同期のみんなも、４年目に入って、ロクなことがない。牧本は、権力者の長下に、言ってはならないことを口走って、人事異動である。アッと言う間の異動だった。網野は、自ら生きることを断とうとした。上海のマネージャーになった秋元は、すでにマネージャーではない。美濃飛翔は、依然として井伊にいじめられているらしい。みんな、怖さを知ったのだ。
深見も、怖さを知った。特に、牧本の件では、怖いと思った。学校は違うが、大学院で研究を得意としてきた。総務の仕事がレベルが低いと言うつもりはないが、やはり、研究できなかったら、気持が萎えるだろうと思った。深見の場合は、あえて、自分でマーケティングを選択した。研究は片手間でできるという自負があった。
最近の、深見に降りかかっている出来事は、深見に恐怖感を与えている。担当交替ならまだいいが、牧本のように、思ってもみない仕事をさせられたら、耐えられないだろうと思う。
立っているのに、ウトウトしてしまう。電車は気持が良い。

三条史郎は、喜んでいた。５千万円もの予算を付けられたのだから、そういうテーマを担当するのだから、うれしいに決まっている。深見は、三条への引継ぎを行った。
三条がこれだけ喜ぶのに、深見は、どうして反対したのだろう。よく考えないといけない。

マーケティングのみんなは、失敗すると思っているから反対なのだ。深見は、安全な道を選ばないといけない。安全な道とは、たとえガリバーの追従であっても、少しの売上を稼げればよいという作戦が好ましい。
深見は、今日の自分が、少し違う考えであることがわかった。責任をとるのは三条だからだろう。しかし、なぜ三条は喜ぶのだろう。それがよくわからない。
10時になって、三条は、「あとは明日でいいでいいから」と言った。研究所に行くと言って出かけた。行く先に、先里研究室と書いてあった。

ガリバーのいる食品は、三条史郎に引き継いだが、深見が挽回するチャンスが、遠のいたことになった。至急に、新しい新製品を探さなければならない。もう８月中旬である。どう考えても、秋の新製品には、間に合いそうにない。長下に逆らってまで安全策にこだわたが、良かったのだろうか。結局、自分の首を絞めたのではないかとも思える。
お昼から、秋の新製品検討会があった。三条は研究所に出向いたので、ガリバーのいる食品の話はない。しかし、他の新製品がある。時間もない。担当している新製品を守ろうとして、みんな必死になる。みんな自分が担当しているテーマがかわいい。
深見は、急に、気が抜けた風船のようになった。空気は入っているのだが、揺れる先が定まらない。浮いているのだが、なくても気にならない風船である。みんな、深見を無視して話が進みはじめた。

深見は、今日もミナミの居酒屋に寄った。１人でカウンターで焼酎の水割りを飲んでいると、ついつい、量も増えてしまう。よろけて、隣で飲んでいた男の連れの女性の肩に触れてしまった。あとは、覚えていない。数回殴られたと思った。
店の主人が、肩を揺すっていた。
「あんたも良くないんだよ？飲み過ぎだよ」
幸いなことに、どこにも傷がなかった。歯が痛かった。
「右が腫れてるんけど」
深見は、タクシーを呼んでもらった。もうタクシーでしか帰れない。いくら

かかるかわからない。

〇三条史郎
「深見さんどうしたの？」
マーケティングは女性の社員が多い。誰が見ても、顔の右側が腫れている。
「歯が痛くて困っているんだけど」
都合のよいことに、外傷が何もない。口の中がキレている。背広もグシャグシャになっていた。朝ごはんも食べられなかった。パンさえも傷に触って痛いのだ。この痛さは治るのだろうか。牛乳しか飲めない。
これだけ痛いと、頭の回路が失われることに、はじめて気がついた。何も考える気力が出ない。グッドアイデアなど、出そうにない。
「深見、新しい新製品考えたのか」
長下は、深見の右の顔が腫れているのも気がつかないのだろうか、早く新しい新製品を考えろと言っている。まだ２日しか経っていない。
９時半になって、マーケティング検討会がはじまった。秋の新製品企画である。
三条史郎は、多分、昨日は寝ていないだろうと思った。分厚いスライドを抱えているように見えた。最初は、三条史郎の、ガリバーのいる新製品からだった。10時30分まで、１時間の時間が与えられた。
三条は、いままで、これといった実績を持っていない。ただのマーケティングの便利屋さんだった。パワーポイントの新しい技を駆使して、みんなに教えてくれた。検討会があると、パソコンを用意するのは、三条だった。このまま、便利屋さんで朽ちてしまうだろうと、みんな思っていた。
三条の話は、思いもよらないものだった。ガリバーと正面で戦うためにはという話だった。ガリバーの弱点は、女性のファンを獲得できないことだった。それは、深見にもわかる。男のエネルギーという感じである。ところが、三条の案は、オンナのビタミンミネラルになっている。男は捨てるのだと言う。
「深見はどう思う？前任者として」
長下が、どうして自分に振ってくるのかわからない。

「お客さんが、エネルギーとして理解しているので、リスクが高いかもしれない」
深見は、持論を言った。
「ガリバーがやっていることは無視します。いくら多くの売上があっても関係ありません」
無視するとは、どういうことだろうか。シンセン食品株式会社は、独自の路線でいくということだろうか。小さな会社なのに。深見は、先里の影を感じていた。深見は、先里を拒否している。しかし、三条は、先里を受け入れているように感じられた。
「本当は、この素材からして、ビタミンミネラルが主たる特長になるはずなのに、ガリバーが、エネルギーにしてしまったのです」
それは、宣伝力によるものだと、三条は言った。
「今日は、オンナに絞っていくということだけを確認しておこう」
長下は、やるつもりなのだ。オンナに絞るという意味は、ビタミンミネラルになる。葉酸がフツウの食品より多く含まれていることも、訴求ポイントになるかもしれないと、深見は思った。

お昼過ぎに、三条から時間を空けてくれという話があった。三条は、深見の３年先輩である。何も実績がないとはいえ、先輩の指示には従わなければならない。お昼は、牛乳しか飲めなかった。依然として、頭がガンガンする。
「これ、先里さんに渡されたんだけど」
三条は、深見にファイルを渡した。深見が、迷っていると、三条が言った。
「あまり先里さんのことが好きではないようだから、気に入らなかったら、受け取らなくていいから」
多分、先里がそう言ったに違いない。
現在販売しているシンセン食品株式会社の商品に追加するものだった。主力商品に、どうやって育てるかが書かれてあった。
「先里さんが私に渡してくれと言ったのですか？」
深見は、聞いてみた。
「時間がないから、やるんだったらすぐに動かないといけない」
深見と三条の関係は、昨日まで、深見が３年後輩なのに、逆転しているかの

ような雰囲気だった。
「三条さんお願いします」
深見の頼みを、なんでも三条はきいてくれた。
それが、一転、逆転をしたかのようだった。三条は、深見が困っている、秋の新製品企画を、渡そうとしている。先里に頼まれたのだろうが、三条が、断っても、済まされることだ。
「明日返事をします」
深見は、そう言って、そのファイルを受け取った。
先里は、深見がこれまで会ってきた人とは、何かが異なっている。このような新製品の企画を、気に入ったら使ってくれなどと言う人に会ったことがない。

深見は、次の日の朝、検討会がはじまる前に、長下に時間をもらった。
８月13日の朝だった。お盆休みであるが、シンセン食品株式会社のマーケティングは、全員が出勤していた。まだ秋の新製品が決まっていないのだ。２つは決まって、販促の準備に入っている。これだけでは足りない。
10時からの検討会で、三条が、コピー案を説明した。多分、女性のコピーライターにムリを言ったと思う。
「オンナの味方、ビタミン葉酸がたっぷり、ミネラルもたっぷり」
深見は、たっぷりでもないとは思ったが、許される範囲だろうと思った。三条は、５千万円の使い方を事細かく説明した。ガリバーに較べたら、多分１／10くらいの規模だろう。しかし、シンセン食品株式会社にとっては、小さくない額である。
「時間もないから、これは決定します。あとは三条君に任せるので、ガンバってください。ガリバーを意識しないで進めてください」
長下は、そう言って、次は、深見のテーマだと言って、深見に説明を求めた。
深見が話しはじめて３名のメンバーが席をたった。電話だったが、返ってこなかった。可もなく不可もないからだと、深見は思った。しかし、リスクが少ないことでは、よい企画だと、深見は思っていた。
「この企画は時間がないから、深見君に任せます。至急にパッケージや販促

にかかってください。予算は３００万円です」
長下が言った。３００万円の予算は、販促費のことである。商品を追加発売するだけだから、３００万円でやれということだろう。

帰りの電車で、深見は、三条史郎のことを考えていた。
深見にとっての三条史郎は、気にならない人だった。競争相手でもない。学歴も違うし、深見は博士である。それが、ここ２日の三条の話を聞いていると、いままでの三条が、何であったのか理解に苦しむ。今は説得力に溢れている。深見には、それがさっぱりわからない。
パソコンを開いて、久しぶりに晩ごはんをつくろうと思った。お好み焼きをつくろうと思って、強力粉と薄力粉を調べた。なが芋が少ししかなかった。卵はあった。
弱火で焼いていると、真鍋からメールが入った。
「三条さんが引き継いでガンバってやれそうなんだって？人って、ほとんど、能力に差がないって言うからね。あるのはよろいの差だけらしいって。深見くんも新しいのはじめたんだって？ガンバって」
真鍋はなんだろう。どうしてこういうことを知っているのだろう。マーケティングに、おしゃべりがいるのか。
深見は、返事をしなかった。お好み焼きをつくるのに忙しい。
深見は、お好み焼きを１週間に１度はつくって食べる。魚肉のソーセージがおいしい。納豆もおいしい。なんでもないようだが、ひょっとすると、お店とあまり変わらないかもしれないと思う。
「もしもし〜メール見てるの？」
真鍋は、メールの返事をしないと、必ず電話がかかってくる。時々、メンドーになったりする。
「人の能力に差なんかないっていうのは〜真鍋の意見なの？」
「先里さんが言ってる〜よろいの差しかないって」
深見は、またよろいの話かと思った。また早くよろいを脱げになるのだろうと予想できる。
「三条さん〜能力あるんだよね。いいものはいいって〜先里さんに話し聞けば〜ヒントいっぱいもらえるからさ〜」

真鍋は、栃木の人である。最近は、時々大阪弁が出るが、東京の学校だったし、東京弁である。
先里さんにヒントもらえるって何だろう。
「みんなさ〜自分ができてないからね〜考えが定まってないんよ」
深見は、真鍋が、次第に哲学的になってくるのを感じている。先里の影響が大きい。
「深見くんもさ〜せっかく先里さんのような人が近くにいるんだからさ〜参考にさせてもらえばいいじゃない」
「真鍋はさ〜どうしてオレのことにそこまで突っ込むんだ？」
真鍋は、深見だけではない、網野のことだって、親身に入り込む。
「たまたま同期だからね〜仕方ないよ」
同期だけとは思えないが、親身になるのが、ワルイわけではない。ただ、深見には不思議なだけである。

○隅安芸のとんでもない話し

８月14日と15日は、お盆休みとも重なって、マーケティングも、休みになった。三条は、ミナミのオフィスへ出勤したと思う。深見も、朝はゆっくりしたが、お昼から、ミナミに向かった。パッケージデザインを外注しているが、プッシュしないといけない。
気になって三条の机に行ってみた。横のテーブルに、ガリバーのいる新製品のパッケージ案が並んでいた。もう絞り込んだらしい。三条はいなかった。深見は、みっともないパッケージではないと思った。女っぽいデザインだった。

夕方だった。三条がジーンズで現れて、電話をかけまくっていた。生産ラインの調整に行ってきたらしい。パッケージも自動梱包になるようだ。生産ラインに組み込まれる。修正が必要のようだった。
深見の方は、自動梱包にはならない。手作業で詰めていく。なんとでもなる。それにしても、自動梱包で生産して、余ったらどうするのだろう。深見には、考えられないことだった。

明日も出勤して、販促の計画をしようと思った。
深見は、引き上げようと思った。明日もある。隅安芸がドアの向こうで手を振っていた。
「話があるんだけど」

隅安芸の話は、とんでもない話だった。
隅安芸は、今年の目標を、まったくクリヤーできないでいる。すごい玉があったのだが、有働に持って行かれてしまった。有働は、すでに今年の目標さえもクリヤーしているのに、隅安芸は、ゼンゼンダメである。
「転職するから」
隅安芸の話しぶりでは、もう決断して動いているようだった。
「そう簡単に転職できるとも思えないけど」
隅安芸は、営業職では難しいと言った。ノウハウを持っていることが少ないからだ。お客さんを抱えているのだったら別である。
「今のお客さんを持って行くのか」
「それでしか転職できない」
深見にはよくわからない。これは、良くないことではないかと思った。
「深見だったらどうする？」
「追い込まれたらやるかもしれない」
「オレは追い詰められてる」
深見には、もう同期で助け合うといったことが、キレイ事でしかない気がしてきた。去年まで、何かにつけて集まってきた。東京の３人以外の５人の同期は、常に集まってきた。隅安芸もその１人だった。
隅安芸には、もう助けが必要な時を失していると、深見は思った。

帰りに、駅のホームから、深見は、真鍋に電話した。
「営業だからってノウハウ必要ないわけじゃないでしょ？」
急に真鍋に怒られても困ると深見は思った。
「ただ売ってこいじゃダメだよ」
真鍋に電話すべきではなかったと思った。
「三条さんのさ〜ガリバーの難しい新製品あるでしょ？」

真鍋は何でも知っている。
「誰かさ〜おみこし担ぐ人いないと難しいよ？隅安芸くんさ〜やってくれればいいのに」
確かにそうだ。
「電話してくれる？自分で手を挙げろって」
深見は、そこまでやるつんもりはない。
「深見くん電話しそうもないからわたし電話する」
夜の12時になって、隅安芸から電話があった。
「渡真利さんと電話して、やらせてもらうことにしたから、転職の話はなしだから」
深見は、驚いてしまった。さっき真鍋と話したばかりである。
「辞めるつもりだったら、その意気込みでやってくれと言われた」
なにか、おかしなことになっていると思った。真鍋が電話したに違いない。
深見には、何がどうなっているのか、全く理解できなかった。

次の日も休日である。15日だった。11時ごろ、深見はミナミのオフィスに出かけた。驚いたことに、隅安芸が来ていた。昨日の夜、ドアの向こうで、手を振って、転職すると言っていた。焼酎を８杯は飲んだ。
隅安芸は、深見を見て、軽く手を挙げただけだった。三条は、口に泡を噴かせて、猛烈に隅安芸に話していた。そして、三条と隅安芸は、どこかに出かけた。昨日の夜はなんだったのか。
深見は、生産を確かめるために、協力工場に向かった。パッケージはまだ完成していないが、手詰めである。どうにでもなる。
深見の新製品は、誰も反対しない。そして、誰も期待しない。誰も気にもしないものだとわかる。長下も、大きな金額を目標に載せなかった。
三条の、ガリバーのいる新製品には、まだ目標が載っていない。生産体制や販売体制を固めるように、長下は、三条に指示しているようだ。まだ初回の数字も出てはいない。しかし、包装を生産ラインに組み込んでいる。ラインを動かせば、１日１万くらい、簡単にできてしまう。

○真鍋だけ火の粉もないが

16日の朝、電車の中で、深見は、真鍋のことを考えていた。８人の新入社員がいた。同期だった。３年が過ぎて、全員に、火の粉が降りかかっている。深見も同じである。担当した健康食品を中傷記事から守れなかった。守ったのは、先里一郎だった。挽回のためのガリバーのいる新製品は、深見の安全策が受け入れられずに、担当を替えさせられた。そして、今は、売っている商品の追加新製品をやっている。少しではあるが、安全に売上を増やせる。よく考えてみると、真鍋だけには、何もない。火の粉もない。どうしてだろうか。真鍋自身が、順風満帆だと思っているのだろうか。他の７人は、誰もが苦戦している。仕事だけに苦戦しているのではなくて、生きることにも苦戦している。生きることは難しいと思っている。

電車から、ケータイメールを、真鍋にした。

「真鍋だけが順風満帆だと思っているのか、それはなぜか」

「わたしはよろいないからラクなんよ〜それだけ」

すぐに返事が返ってきた。

真鍋は、もう完全に先里の考えに犯されていると思った。真鍋はどこかに行ってしまったのだ。

短い返事だったが、真鍋は、今の自分に満足しているらしいことがわかる。牧本も網野も隅安芸も秋元も美濃も、そして深見も、苦戦している。有働だって、隅安芸から仕事を盗んだと言われていて、やはり苦しいだろう。盗んだことは間違いない。

真鍋だけが何もない。

「よろいがないからラクだっていうのはなんだ？」

「わたし私欲がなくなったんよ」

もう、真鍋は、完全に先里の考えに犯されている。私欲がなかったら困るではないか。エラクなりたいからガンバっている。深見だって、博士になりたいから努力した。今は、みんな一目おいてくれる。欲がない人間はダメだと思う。そう思うのだが、９時過ぎた。長下に呼ばれた。

パッケージも決めた。生産ラインの調整も終わっている。販促案もできた。雑誌広告の原稿は、来週上がる。３００万円の使い道も確定している。長下

は、「わかった」と一言言っただけだった。

15時頃だった。先里一郎の姿を見かけた。どこかに出かけていたのだろうか。一瞬だった。そのまま研究所に帰ったのだろう。
三条から、マーケティングの全員に、ガリバーのいる新製品の説明動画を見せるので、興味があれば来てくれだった。説明動画とはどういうものだろうか。５千万円ではテレビの宣伝もできないだろう。
「女性とビタミンと葉酸とミネラル」という題目だった。
30秒の動画である。
いつつくったのだろう。この動画は、撮影をしていない。ありものを動かしているが、映像がキレイである。ガリバーのエネルギー訴求とは全く異なっている。同じ素材である。どこにもエネルギーが出てこない。
「シナリオは先里さんにお願いしました」
「映像は２日徹夜でお願いしました」
「ホームページで流します」
「テレビの枠が安くとれれば、どこかの地域で流せるかもしれません」
大阪か東京の都会に決まっている。
先里とは、どういう人だろう。
「テレビの交渉をはじめるように」
長下が言った。
フツウは、広告代理店に、テレビ枠とコマーシャル素材つくりを一括頼むのに、コマーシャル素材だけは、もうできている。
隅安芸が前に出て言った。
「お店に説明に持ち歩く動画も完成したので説明します」
誰も予想をしていなかった。
「４分ちょっとあります。４分くらいだったらバイヤーにお願いできます」
みんな、唖然としてしまった。営業がバイヤーに説明する内容が、盛り込まれていた。営業は、この動画を使った方が、うまくいく。そして、シンセン食品株式会社としても、誰が話しても同じ話になって、パワーもつく。いままで、どうしてこういうものがつくれなかったのか、不思議であった。
「これは営業の助けになるな〜ありがとう」

長下は、隅安芸にお礼を言った。
「私は営業の旗振りが仕事ですから」
隅安芸が言った。当然だと言わんばかりだった。
ほんの数日前まで、転職するからと深見に言った男である。

なにかがおかしい。
網野も、どうにもならない窮地から真鍋が救い出した。隅安芸も、転職の危機から真鍋が救い出した。まだ先のことはわからないが、今のところは、真鍋が、救世主になっている。
深見のことも、もしかして、同じだったのかもしれない。三条の仕事が、これまでは順調である。深見の仕事だった。深見は、抵抗して拒否した。網野も隅安芸も、真鍋に同意している。真鍋は、救世主なのか。
「深見さん、なんかありますか？」
三条がいきなり深見に振った。真鍋のことを考えていた。
「ああ〜グッドだと思いました」

〇真鍋は救世主か

次の日８月17日だった。各営業拠点に、隅安芸から、ガリバーのいる新製品のお店への説明会についてというメールが流れた。ＣＣで長下と三条がついていた。30秒の動画と、４分の動画をメールで送っていた。そして、それぞれの使い方について記されていた。説明会は、隅安芸に直接連絡くれるようになっていた。隅安芸が説明に行くのだろうか。
説明担当が、三条と先里になっていた。
隅安芸は、どうなったのだろう。深見にはよくわからない。
お昼休みに、真鍋にメールした。
「隅安芸が変わったけど、何を話したのか」

夜になって、真鍋から電話があった。深見は、ナポリタンをつくっていた。
「ゴメン〜出張だったんよ〜メールあったのはわかってたんだけど」
深見は、ナポリタンを途中で止めた。

「わたし何も話してないよ？隅安芸くんには」
「どうせ辞めるんだったら、思い切ってやれば？難しいこと」
これくらいなもんだと言った。
この真鍋のことばが、隅安芸を動かしている。
「人ってさ〜ギリギリになったらよろいなくなる時あるから」
またよろいの話になった。
「隅安芸くんはさ〜よろいなくなったんよ」
深見には、よくわからない。何がなくなったと言うのだろうか。
「今はさ〜隅安芸くん〜怖いもんないんよ」
真鍋のことばは、大阪弁なのか東京弁なのかわからない。
もっと話していたかったが、自分もはまってしまいそうで、途中でごはん支度だと言った。
深見は、イタリアンが得意である。ピザは生地からつくるし、ピザソースは自分でつくる。自分でつくった生地の方がおいしいと思う。ナポリタンだって、ピザソースを使う。これがまたおいしい。
真鍋のことを考えながら、ナポリタンを食べはじめた。
真鍋は救世主なのだろうか。
急に思いついて、深見は、真鍋にメールした。
「真鍋に聞きたいんだけど、隅安芸はよろいなくなったらしいけど、深見はどうなんだ？」
多分明日の朝のメールになるだろうと思った。深見は、まだナポリタンを食べていた。
すぐに真鍋から返事が来た。
「深見くんはいい人なんだけど〜頼りにもなるんだけど〜よろいいっぱい着てるからタイヘンだよ」
真鍋から深見を見たら、こうなるのかもしれない。真鍋は、とにかく、よろいを脱げば、人間として素晴らしいと思っているのだろう。深見とは考えが異なる。はだかでふんどし１つで暮らしたら、喰い殺される。いじめられないように、よろいで守らないと、生きられない。
「真鍋は、いつよろいを脱いだんだ？」
すぐに返事が返ってきた。

「去年、先里さんに、いろいろ話を聞いてからだよ。フツウは、よろいは脱ごうと思っても脱げないらしい」
「なぜ真鍋は脱げたんだ？」
「愛がわかったからだと思うよ？」
ここで止めようと、深見は思った。愛の話にしたくはない。よろいと愛がどう係っているのか、わからない。わかりたくいもない。やはり、真鍋は、先里に大きな影響を受けてしまった。それが良いことなのか、ワルイことなのかわからない。
どうして真鍋だけに火の粉が降らないのか、不思議だ。真鍋は、救世主のようにも見える。そしたら、よろいを脱ぐことは良いことなのか。先里の影響を受けることは、良いことなのか。
とりあえず、シャワーをしてこようと思った。

シャワーを出てメールを見た。
「もうガマンができない」
美濃飛翔だった。上司の井伊に対してだろう。隅安芸と同じように、転職と言うのだろうか。
真鍋もこのメールを見ているはずなのに、何も反応していない。疲れて寝たのだろうか。
短いメールだったが、美濃の苦しさが伝わる。美濃も自分勝手な営業をしているのだろうが、上司と合わなければ、やはり苦しい。もう３年も、美濃はガマンしてきたのだろう。叫びたくもなる。
続いて、美濃からメールがきた。
「札幌支店に転勤願いを出した」
なぜ本社のある大阪ではなくて、札幌なのだろう。よくわからない。
同期のみんなは、美濃の実家の伊豆の温泉ホテルで、美濃の苦しさを聞いている。短いことばでも伝わる。
「同期として何かやれることはないのか」
深見は、それくらいしか、メールの文を思いつかなかった。みんな苦しい。深見自身も苦しんでいる。
真鍋だけが、別の世界にいるような気がしてきた。

〇美濃と井伊の戦い

８月18日になった。深見は、もう10月16日出荷の新製品は、確実に出せると思っている。数も、そう多くはない。リスクも少ない。
11月１日出荷の三条のガリバーのいる新製品は、必死に歩きまわっている。お店の説明会に、先里が出向いているらしい。ダブった場合にのみ、三条が出向いているらしい。隅安芸は、先里と常に行動を共にしているのだろう。まずは、お店に扱っていただかなくては話にならない。お店は、お客さんが来てくれる仕掛けをするのかどうかが気になる。
三条は、東京と大阪と名古屋だけ、12月いっぱい、30秒の、あの動画を流すと言っている。それでも、５千万円すべてを使うものでもないらしい。自分で画像をつくれば、けっこう安くやれるのだろう。
深見は、三条が自信を持って担当しているのかどうか、確かめることができない。会うことがないのだ。お互いに忙しい。特に、三条は忙しいし、隅安芸も忙しい。先里も、研究所には、あまりいないのだろう。先里一郎が、こういう技を持っているとは知らなかった。一度、どこかで聞いてみたいものだと思った。お店の説明会で話すことは、けっこう難しい。うまくいかなくては、商品を扱ってはもらえない。

お昼過ぎになって、美濃と井伊のうわさが飛んできた。美濃は、井伊を通さずに、直接人事に、札幌転勤の要望をしたらしい。直訴になった。東京支店の店長も知らなかった。
美濃にしたら、筋を通しても通るものではないことは、よく承知していただろう。もし、ゴチャゴチャになれば、覚悟はできているかもしれない。深見は、またメンドーなことになる予感がした。
美濃のあの短いメールには、覚悟が詰まっていると思った。
人事に近い真鍋に聞くと、詳しいことがわかるかもしれない。
「美濃が人事に札幌転勤を直訴したうわさが飛んで来たんだけど、なにか知ってますか？」
「深見くんさ〜美濃くんのためになんかやってあげたいの？」
深見は、頭を抱えてしまった。そういうつもりで真鍋にメールしたのではな

い。真鍋に読まれていると思った。もちろん、美濃に何かをしてやろうなどとは思っていない深見には、真鍋に返信することはない。
さらに夕刻になって、美濃と井伊が、みんなの前で、ののしり合ったといううわさが飛んできた。もうこのままでは済まされない。
三条と隅安芸の姿は、依然として見えない。社内のうわさどころではないのだろう。

会社は、素早かった。次の日８月19日早朝に、人事異動があった。井伊は札幌支店の営業だった。降格である。隅安芸は福岡支店の営業である。３日以内に赴任するように記されてあった。シンセン食品株式会社創業以来はじめてのことらしい。両成敗である。
朝の９時30分に、真鍋から同期８人にメールがきた。
「美濃くん、今日大阪寄って、明日朝１番で福岡行くって言うから、19時にいつもの居酒屋だから」
こういう話は、常に深見がやっていた。ここのところ、真鍋に変わったように思う。もともと、同期会の会長などいない。だれがやってもかまわない。会計だけは、真鍋と決めてある。
深見は、すぐに、参加するとメールした。しかし、網野にも、牧本にも、秋元にもメールしてあるのは、どうしてだろう。多分、真鍋と深見と有働くらいしか来れないだろうに。

〇美濃飛翔と久々の同期会
深見は、30分も前にミナミのいつもの居酒屋に入った。お店の人とは、顔なじみである。とくに深見は、酔って失態をしている。顔を殴られた。仲間に言わないように口止めをしてある。深見は、ここ以外で酒を飲んだことがない。
「早いね〜よかった〜美濃くんあんまり時間ないんよ」
真鍋が美濃と一緒にいた。美濃の顔は、追い詰められた顔ではなかった。
吹っ切れているのかもしれない。
みんな忙しいからとりあえず乾杯をした。乾杯をしていると、有働が来た。

有働と美濃は同じ営業である。営業はしいたげられてるからと、営業にしかわからないような握手をしていた。
意外なことに、牧本が現れた。深見も美濃も有働も驚いてしまった。
「やあ〜」
深見は、そう言うのが精一杯である。牧本とは、あの人事異動以来、話したこともないし、メールもない。
「美濃くんタイヘンやったね〜終わったのかもしれんけど」
美濃は、どう返事をしたらいいのか、迷っているらしかった。牧本の方がショックは大きいだろうに。
また驚いたことに、網野が現れた。
男たちは一様に驚いたが、真鍋と牧本は、平気な顔をしていた。事前に、網野が来ることは知っていたのだろう。19時にギリギリになって、隅安芸がバタバタと入ってきた。
「遅くなってゴメン」
「平気〜時間ちょうどだから」
真鍋が隅安芸をかばっている時に、秋元が現れた。これは、ホントにみんな驚いた。上海にいるはずである。
「夏休み２日もらった。ちょうど大阪にいた」
８人全員が揃ってしまった。何年振りだろうか。まだシンセン食品株式会社に入社して３年が過ぎたところなのに、８人全員が集まったことがないのだ。
一瞬、空白が生じた。
みんな、それぞれが、驚いている。なぜ８人全員になったのか、驚いている。
「深見くんなんか言って」
真鍋が振ってきた。
「いろいろ話したいこともあると思うけど、今日は美濃のために集まったとこがあるから、美濃は、朝１番で福岡に行かないといけないから、時間を決めておこう」
美濃は22時の大阪発最終便で福岡に入りたいと言った。
「みんなの顔を見て、そうしようと、今思った。オレだけが辛いわけでもな

いことは、よくわかってる。みんなの顔を見ただけで、元気が出た」
秋元も、関空深夜発で上海に帰ることにすると言った。
じゃ〜９時までここで飲めるか。
ミナミからだと、伊丹も関空も電車の方が早い。
「食べないとダメだから〜食べて食べて」
真鍋だけは、お母さんのように振舞っている。
網野が口を開いた。
「わたし、もうみんなとは会えないと思ってた。特に、なべちゃんには、親以上に世話になったし、深見くんには、まだお金を返してない。だけど、今は介護の施設の栄養士だけど、楽しくやってる。なべちゃんには、あんたよろいあるからダメなんよって怒られ続けてきて、最近、やっと、いろいろなことがわかってきた。わたしのこと拝んでくれるおばあちゃんもいて、生きがい感じてる。おいしいごはんをありがとうだけど。わたしはなにもしないで同期の世話になりっぱなしだけど、顔見せて美濃くんが喜んでくれるんだったら、それくらいは、できるから」
明らかに網野は変った。大きく変わった。ギラギラしていたものがなくなった。深見は、そう思った。
美濃も続いた。
「真鍋からいっぱいメールもらったんだけど、同期はみんな美濃くんの味方だかと言われて、思い切って大阪に寄ったんだけど、さっきも言ったけど、オレだけが辛いわけじゃないから、みんなの顔見て、もうそれでいいと思ってる。明日からガンバル。いまさら井伊さんのワルクチをここで言ってもはじまらない。集まってくれてありがとう」
時間が来たら先に行くからと、秋元も口を開いた。
「上海の販売のマネージャーになった時、一瞬、オレはすごい男だと思ったけど、何もノウハウを持っていない男だと、すぐに気がついた。上海で、地盤も何もないから、１件もお客さんがとれずに、すぐにクビになった。今は、上海語も話せるようになったし英語も勉強してるし、腰も低くなったし、よろいも少なくなったし、うまくいっている。真鍋には感謝している。オレだけが苦しんでたわけじゃなくて、みんな苦しんでた。オレはもう平気だよっていう意味で今日来てる」

深見は、これほどまでに、真鍋がみんなに影響を及ぼしているとは思わなかった。もし真鍋がいなかったら、今日８人が集まることはなかったのだ。まさしく、救世主のようだ。

深見は、８人の同期が全員集まったのに、意外に早く帰れて、ホッとしていた。考えてみると、真鍋以外の７人が全員ピンチなのだが、今日のみんなの話では、最悪の状況を脱しているようだった。もう逃げ場がなくなったと嘆いている仲間がいなくなった。おかしなことだった。今年に入って、入社４年目になって、次々とみんなを襲った出来事は、これもおかしなことに、今日現在では、最悪な状況ではなくなっている。それはなんだろうか。
どう考えても、真鍋だ。真鍋が、泥沼に手を突っ込んで、引き上げている。
真鍋はなんだろう。そして、真鍋の影にいる先里はなんだろう。

○牧本が先里研究室へ
深見は、朝の混んでいる電車に揺られながら、牧本のことを考えていた。
牧本は、技術系の大学院を出てシンセン食品株式会社に就職した。研究所で研究の仕事につくのがあたりまえだと考えていた。最初から、今のような、社員の出張の航空券の手配のような仕事だったら、シンセン食品株式会社には入社しなかっただろう。牧本も少しはワルイとはいえ、切れて思わず言ってしまった一言で、人事異動になった。
誰もが、牧本は、シンセン食品株式会社を辞めると思った。そしてずっと音信がなかった。
しかし、昨日８月19日の牧本の態度は、穏やかで、苦悩に満ちているといったものではなかった。不満はあるのだろうに。軽口が少なくなって、寂しい気はするが、牧本は牧本で、新しい自分を探しているような気がした。深見には、よくわからない。深見だったら、辞表を叩きつけただろう。それは確実に。
あの牧本の穏やかな態度は、牧本にとって、いいことだろうか、ワルイことだろうか。このまま時間が経過するとは思えない。長下は、深見の上司である。権力者だ。気に入らないかもしれないが、人材は有効に使わないといけ

ないのではないかと思う。
10時だった。人事異動があった。深見は、驚いてしまった。牧本が、本社の総務から、先里研究室に異動になったのだ。牧本は、昨日の夜、何も言わなかった。知っていたに違いない。
「昨日の夜は知っていたのか」
ケータイメールをしてみた。
「知らなかった。でも、深見くんは、なんでそんなこと知りたいの？」
確かにそうだ。昨日知っていたのに黙っていたら、それでなんだろう。真鍋にも、同じようなことを言われた。
どうも、深見が変わったのではなくて、真鍋や牧本が変わったと思った。前だったら、情報交換だと言って喜んでいたのに。何かがおかしい。深見には、よくわからない。
会社のやっていることはよくわからない。
「牧本のことだけど、どうなったんだ」
真鍋にメールしてみた。
「まきちゃん何があっても平気なんよ、よろい脱いだから」
深見が知りたいことが返ってこない。
深見は、どうして自分だけが、何か判断が違う気がしていた。何かが気になっている。余計なメールをしてみたりする。

15時だった。驚いたことに、牧本が、先里と一緒にマーケティングに現れた。そして、長下の机に向かった。先里が、何をしたかったのか、わかる。今日の人事異動で今日の行動である。先里という人は、どうなっているのだろう。隅安芸と先里と牧本が、急いで出て行った。京都のお客さんに説明会らしい。夜だ。
三条の話では、先里は、あまりにも説明会が多くて、誰か、自分の考えを説明できる人を探していたらしい。それが牧本で、先里は、長下にお礼に来たのだと言った。そして、早速、実地の学習をはじめた。
牧本は、平然としていたように見えた。あの少しノリのある大阪弁で話すと、一人漫才になるが、大丈夫だろうか。

成功するのか失敗するのかよくわからない、ガリバーのいる新製品は、もともとは、深見が取り上げたものだ。先里が創り上げて塩漬けになっていたものだ。その企画に、隅安芸と牧本の２人が主たる仕事として参加することになっている。もし深見がやっていたら、同期の３人が係っていることになる。
しかし、深見は、先里が好きではない。マーケティングは、最小のリスクで最大の成果を上げる手法だ。先里のように、リスクを負うのが怖いからと言われたのでは、マーケティングを研究した人間としては、反発せざるを得ない。やり方が違うと思う。
それにしても、長下はどうしたのだろう。あれだけ、研究所のやっていることに、ネガティブだったのに、今は、先里の、ちょっと説明しなければわかりにくいやり方を推奨している。この方法がシンセン食品株式会社のやり方なら、それはそれで、深見は得意だ。入社して３年が過ぎたが、先里的説明の多い商品が推奨されたことはない。営業がやりきれないのだ。
今は、先里的だが、ずっと続くとは思えない。牧本はどうなるのだろうか。

８月21日土曜日だが、深見は、生産の確認に出向いて、お昼からミナミのオフィスに寄った。
会議室が騒がしい。深見は、顔を覗かせた。営業会議をやっているらしい。
時々、全国営業会議をやっている。店長だけが集まるので、土曜日が多い。
そして、明日はゴルフだろう。
牧本の声が聞こえた。
隅安芸が出てきた。
「何かあったのか」
店長会議で、急きょ、どういう説明をしているのか、やってくれと言われたのだそうだ。確かに、店長にも話さないで、いきなりお店の説明会をやっている。長下も来ているのだと言った。このガリバーのいる新製品は、だんだん大ゴトになっているような気がする。先里は、福岡のお店の説明会に出かけているらしい。三条は東京だと言った。
牧本は、昨日の辞令なのに、今日はもう店長会議で説明をしている。どうなっているのだろう。

１人漫才にはなっていないようだ。

〇牧本の説明会

８月22日日曜だ。深見は、仕事しかやることがない。お昼をミナミのいつもの居酒屋で食べて、オフィスに向かった。同期が集まる居酒屋は、オフィスから歩いて15分はある。それくら離れていないと、シンセン食品の社員と鉢合わせしても困る。けっこう、際どい話もしている。
牧本が来ていた。会議室から声がした。
机に行くと、三条がいた。
「牧本の声がしていたけど」
明日から３日間、神奈川埼玉千葉を回るのだと言った。東京と大阪と名古屋は、すべて説明会をさせていただきたいと、三条は言った。
「どうなのですか？感触は」
三条にも、まだよくわかっていないらしい。先里は、説明会の数だけ拡大すると言っているらしい。
牧本は誰にしゃべっているのだろう。
「大阪のお客さん１社に来てもらっています」
「お昼から説明会になっています」
三条は、丁寧に深見に説明した。
先里もいなくて三条もここにいて、牧本だけで説明会をやっているようだ。
どうなっているのだろう。不思議である。
隅安芸が来て「三条さんお願いします」と言った。
シンセン食品株式会社の果物野菜ジュースを冷蔵庫で冷やして、お茶のかわりに出している。
「何人だっけ？」
「43本です」
隅安芸と三条は、冷蔵庫に、果物野菜ジュースを取りに行った。
深見は、ものすごく不思議な感じがしていた。牧本は、３日前まで、技術系大学院を出ながら、長下への余計な一言で、総務で出張航空券の手配をしていた。深見から見ると、なぜ辞表を叩きつけないのか、わからない。隅安芸

は、深見に、「オレ転職するから」と言った。ほんの少し前である。三条は、マーケティングの便利屋だった。３年も後輩の深見の指示にも、ワルイ顔１つせずに、従っていた。
その３人が、ガリバーのいる新製品を仕切っている。まだ成功するかどうかよくわからないのだが、ここまでは、仕切っている。深見は、こういうリスクの大きいことはすべきではないと、いまでも思っている。もっとリスクを小さくして、大きな成果を狙わないといけない。どんなに一生懸命になったとしても、ガリバーはガリバーなのだ。
今は、三条と言い争うつもりはない。いずれわかると、深見は思っている。マーケットとは、強いものが勝つのだ。深見は、そのように勉強してきた。

４時ごろになって、牧本が、余った果物野菜ジュースを持って、深見のところにやってきた。
「やあ〜」
「牧本は、急な仕事なのに、よくできるな」
「30秒と４分の映像がすごいんよ〜それに先里さんのパワーポイントも、わたしはそれ見て、すぐわかったからさ〜それだけ」
それにしても、他者に話せるのだからすごい。
「簡単なんよ〜オンナはエネルギーなんかいらんよ」
深見は、それでもよくわからなかった。牧本が信じていなかったら、質問にも、自信をもって応じられないだろうに。
「牧本一緒に帰らないか」
「わたしこれから神奈川行くんよ〜明日９時から説明会あるからさ〜明日３回あるんよ〜神奈川」
べつに、忙しくてイヤがってるふうでもない。楽しそうだ。
「忙しくてタイヘンなんだ」
「タイヘンじゃないわよ〜やることが曲がんないから」
深見は、牧本の言っていることがよくわかる。
だいたい、このような、ガリバーのいる新製品などをやると、いつも、どこからか横ヤリが入ってきて、トーンダウンするか、曖昧なまま中止になるか、どっちかになる。それが、今回は、何もない。

「先里さんがいるからだけどね」
深見は、牧本が言ったことに、反感を覚えた。どうして先里がついていると、方針が曲がらないのか。よくわからない。深見は、３年もマーケティングの仕事をしている。しかし、先里が係ると方針が曲がらないなど、聞いたことがない。
隅安芸が大きなボストンバックを２つ持ってやってきた。
「ワルイ〜もう行かないと新幹線予約してあるから」
隅安芸は、深見と牧本の話を中断させてワルイという態度をした。
「三条さんは行かないのですか？」
「三条さんは大阪まだたくさんあるから」
「またね」
牧本は、張り切っているようには見えないし、もちろん落ち込んでいるわけでもなさそうだ。ごくフツウに、新大阪に向かった。

帰りの電車の中で、深見は、イヤな予感がした。
ひょっとすると、深見は、このガリバーのいる新製品が成功することを望んではいないのではないかと思った。深見が、ガリバーがいるから、ガリバーのエネルギー訴求に乗って、コバンザメのように、少しでも売上を稼げばいいと思って提案したことが、とんでもないことになっている。正面で、ガリバーと戦うことになってしまっている。ターゲットが、オトコとオンナの違いはあるが。
これが成功すると、深見が否定されることになる。この成功に、同期の、隅安芸と牧本が係っている。おかしなことになってきた。
深見は、イヤな予感がしていた。

〇深見の夢
その夜、福岡に行った美濃からメールが全員に入ってきた。８月22日だった。
「毎日会社に行くのがイヤだったけど、福岡に来て、そうでもなくなった。福岡のオンナは気が強いけれど、情が深い感じがする。真鍋には世話になっ

た。うまくやれそうだから、心配しないでいいです」
真鍋は、美濃に、何をしたのだろう。何かよくわからない。深見は、この前から、もう同期の８人を集めることなど難しいと思っていたし、全員にメールすることもないと思っていた。しかし、真鍋ならできる。それがよくわからない。真鍋は、平気で８人にメールを出す。真鍋とみんなの間には、何かがある。
真鍋は、こういう人ではなかった。どちらかというと、深見の後にいた。だから、事実上、深見が、同期会の会長になっている。真鍋は会計をやっている。なにがどうなったかわからないが、最近は、真鍋が会長兼会計ではないかと思ってしまう。
美濃からまたメールがきた。
「今日、ホテル住まいだったが、アパートに移った。東京のアパートは、姉が、荷物も送ってくれて、解約もしてくれた。オレは、自分勝手に、東京には１日もいたくないのでと、姉にムリ言った。ホテルの女将も忙しいのに、申し訳ないと思っている。アパートの住所を知らせるので、福岡に来た時は寄ってください。いきなりでは困るので、メールを事前に下さい。アパートは、３ＤＫでかなり広いので、泊まることもできます。真鍋も網野も牧本も、歓迎します」
深見は、やはり、美濃も変わってしまったと思った。何がどう変わったのか、具体的に言い表せない。しかし、美濃らしくない。みんなで伊豆の、美濃の実家の温泉ホテルに行った時の、美濃がホテルの社員を怒る姿とは、重ならない。何がどうなったのかわからない。
深見達は、シンセン食品株式会社に入社して４年目になる。８人である。全員、４年目に入って、苦しい出来事が、次々に起こっている。そして、真鍋が、その泥沼に手を突っ込んで、みんなを引き上げているかのように見える。だから、みんな真鍋に感謝している。牧本だって、口には出さないが、「なべちゃんがいなかったらもうみんなの前にはいないわよ」と言いそうである。
真鍋は、何をしているのだろう。泥沼に手を突っ込んで何をしているのだろう。深見には、みんなが真鍋に感謝することが、さっぱりわからない。
美濃は、引っ越して忙しかったのだろう。しかし、素早い。こういうこと

は、スパッとやらないといけない。真鍋が、網野のことで東京に向かった時、昨日までの悪夢をスパッと切り取るような動きをしたが、美濃も、同じように、素早く、次のための動きをしている。
真鍋の影響力が大きい。
また真鍋のことを考えている。
真鍋はどうしたというのだろう。なぜ東京まで出かけて、網野を泥沼から引き上げようとするのだろう。深見は、そこまではしない。真鍋に、東京に手伝いに来てくれと言われたら、断らない。しかし、深見は、網野の事情に、深く入り込めない。
深見は、パソコンの前で、座イスに座ったまま、眠ってしまった。完全に眠った。ここのところ、休みがない。忙しくしている。
深見は、夢を見ていた。
栄養士である母親をいつも見て育った。忙しい母親の後を追った。家では、いつもパソコンを使って計算をしていた。大学の講師でもあった。ある時、母親が、深見に言った。深見が中学生の時だった。
「この世界では女は難しいのよ、あんたは男だから一生懸命勉強して、エラクなってほしいの」
大学に入ると、母親が深見に言ったことが、よく理解できるようになった。やはり男の世界なのだ。深見の夢には、父親が出てこない。フツウのサラリーマンだった。人の良いサラリーマンだった。深見の生き方に、影響を与えたことはない。すべて、母親の影響である。博士課程に進んだのも、母親にとっては、当然でもあった。深見も当然だった。父親は、何も言わない。
深見は、一生懸命に勉強してきた。勉強のことでは、何でも１番だった。シンセン食品株式会社に入社したのは、若い時からチカラを発揮できると思ったからだ。中堅の会社の方が動きやすい。しかも、深見は、マーケティングを希望した。同期のだれもが、牧本と同じく、研究所を希望すると思っていた。
深見には、夢があった。社長になることだ。母親は、いまでも、フツウの栄養士である。依然として講師である。学問界でも実業界でも、パッとすることがない。深見は違う。母親に言われたとおり、ガンバル。就職したからには、社長になる。食品の会社の社長になる。

寒くなって、深見は目が覚めた。歯磨きをしてベッドに行かないといけない。もう月曜になっている。
深見の夢は、いつも、社長になっていない夢だ。なぜだろう。どうしたら社長になれるのか、わかってないからかもしれない。シナリオがわからない。
深見が社長になれば、母親が１番喜んでくれるはずである。
とりあえず、今やっている仕事に落ち度がないことが大事だ。同期のみんなのように、決定的に人事異動を伴うような、失敗をしないことだ。
深見は、歯を磨いていた。
同期のみんなは、大きな痛手を受けた。深見も痛手ではあったが、失敗ではないと思っている。網野や牧本や隅安芸や秋元や美濃のような痛手ではない。それなのに、網野や牧本や隅安芸や秋元や美濃が元気を取り戻しているのが、よくわからない。社長になるには、失敗をしてはいけない。
なのに、なにかおかしい。それは、真鍋だ。
真鍋が、泥沼に手を突っ込んで、みんなを引き上げている。もし真鍋がいなければ、泥沼で溺れ死んだかもしれない。
深見は、シンセン食品株式会社の社長になれるのだろうか、少し、自信がなくなってきている。ただ、深見が、シンセン食品株式会社の社長になりたがっている話は、誰にもしてはいない。誰にも気づかれてはいない。

〇人望がないと夢は叶わない

８月23日月曜日の朝、深見は、電車で、「人望」という本を読んでいる。「社長になるにはシリーズ」でもある。ブックカバーをして、会社でも、誰にも読まれないようにしてある。社長になりたいのだったら、それなりに努力しないとダメだと思う。深見が、「人望」なる本を読んでいると知ったら、みんな驚くだろうと思う。なぜなら、深見は、そういうこととは無縁だと思われているからだ。深見が興味あるのは、成績である。人望がなくても、成績が上がればそれで良いと思っていると思われている。
確かにそうなのだが、どの本を読んでも、人望のない社長など、すぐに辞めている。人望とは、人気でもないらしいし、何かを成し遂げる期待もなけれ

ば、人望にならないらしい。
人望は、深見に欠けるものだけに、心得なければならないと思っている。社長になるのは、ゼッタイ欠かせないことだ。
深見は、人望を勉強している。

深見が、ミナミのオフィスに着くと、長下が待っていた。
「深見の新製品は、もう生産に入れるそうだから、三条の新製品を、手伝ってやってくれ」
深見は返事に困ってしまった。
「何を手伝うのですか？ここで前任の私が入ったら、三条さんや隅安芸や牧本もやりにくいと思いますけど」
長下は、すごく意外な顔をした。そして、次のことばが出なくなった。
「手伝いたくないのか」
長下のそのことばに、カリッときてしまった。
「私の考えは、コバンザメでもいいから、エネルギーでやって、少しでも売上を稼ぐことです。それが１番リスクが少ないと思ってます。手伝えと言われても難しいです」

11時になった時、牧本からメールが入ってきた。
「深見くん、わたしを手伝うの断ったの？」
牧本は今日は神奈川のはずである。
すぐに次のケータイメールがきた。
「このビタミン葉酸ミネラルは専門的に難しいから、説明者が限られるでしょ？先里さんは、わたしの他には、深見くんだって言ってた。10日くらでいいから、長下さんにＯＫして」
牧本の、命令っぽいメールにもカリッときてしまった。
「もともと、このやり方は、賛成できないから、長下さんに意見をしたら、担当替えになったものだ。そうそう簡単に、屈するようなことはできない」
「バッカじゃないの？もう矢は放たれたんだからさ〜矢が放たれる前だったらそういう話もいいけど、なに言ってんの？」
いつもの牧本に戻っている。

また次のメールがきた。
「深見くんのやり方は、民主主義じゃないよ？」
「おかしな矢を放ったのは長下さんだから、長下さんが決めたことが民主主義になるのはおかしい」
それっきり、牧本からはメールがこなくなった。長下の、手伝ってやれも、それっきりになった。
だいたい、自分の考えに信念がない。いくら権力者の長下が言ったとしても、自分の信念に沿って、反対だったら反対すべきだと思う。深見はそう考えている。それで担当を替えられても仕方がない。実際、そうなってしまった。
それを、手伝ってやれとは、どういうことだろうか。
牧本が、長下に頼んだことは、察しがつく。だから牧本が怒ってメールをよこした。

深見は、お昼に、いつもの居酒屋まで行って、「人望」を走り読みした。
気になっていた。
牧本がピンチなのだろう。牧本を手伝わないことは、人望がないことだろうか。誰かに聞いてみたかったが、それもできない。人望のある人物は、こういう時に、何をするのだろうか。
いかにも酒が飲みたくなるお昼の定食を食べながら、「人望」を読んでみたが、どこにも、それらしいことは書かれていない。
深見には、そもそも、人望なるものが、よくわからない。自分の信念を曲げてまで、手伝ってくれないかと言われたら、手伝うのか。
そもそも牧本はなんだろう。どうして深見に手伝わせるように指示してくれと、長下に頼めるのか。自分だって、長下に、痛い目に合わされている。先里も、深見しかいないだろうとは、よく言うもんだ。
深見には、よくわからない。牧本も長下もわからない。牧本が言っていたが、もう矢は放たれたんだからというのは、どういうことだろう。ガリバーのいる新製品を発売することになったら、反対している深見も、手伝うべきなのか。牧本は、バッカじゃないかと言っていた。

その夜、牧本から、またメールがきた。
「深見くんはさ〜ビタミン葉酸ミネラルはオンナにはどうでもいいと思ってんの？」
「そうではなくて、どっちが成功するかの話をしている。ガリバーコバンザメでエネルギーの方が成功する」
「成功するんだったらなんでもいいわけ？」
またおかしな話になっている。これは、マーケティング戦略の話であって、オンナがどうとかの話ではない。
牧本には、深見のこだわりが、無意味に見えるようである。そしたら、牧本の一言で、長下に人事異動させられたことに、牧本はこだわっていないのか。
「もう終わったことゴチャゴチャ言ったらあかんよ」
深見は、驚いてしまった。牧本は、しばらく誰とも話さなかったではないか、会社を辞めるのではないかと、みんなが思った。牧本も良くないが、長下もよくない。会社も理不尽だということを示した。それなのに、もう終わったことと済ませることができるのか。
いま人望がありそうな真鍋に投げてみた。牧本がおかしなことを言って困っている。
「まきちゃんの一言、まきちゃんのよろいが言ったんよ」
最近の真鍋のメールは、何を言っているのかよくわからない。真鍋にメールしなければ良かった。

それぞれの道を

〇網野からお金を返えされて

８月24日、お昼前だった。網野から電話がかかってきた。
「わたし今日休みでミナミの居酒屋にいるんだけど、来れない？お金渡そうと思って」
深見は、お昼前だったが、歩いて15分はかかる居酒屋に出かけた。
「ゴメン」
網野は、元気そうだった。一緒に、人の良さそうな男が一緒だった。
「うち農家なんだけど〜来てくれるんよ」
網野の実家が農家で、養子がいないと困る話は、聞いたことがない。
「介護士してんの」
深見は、酒の肴のようなお昼定食を頼んだ。
「これ、なべちゃんに聞いた金額だけど」
網野は、お金の入った封筒を差し出した。
「大丈夫なのか？」
「何から何までゼンブ話したから平気」
11月３日に網野康友になるのだという介護士の彼は、網野と一緒に頭を下げた。網野康友は、もう、網野ゆみこと同じ立場にたっている。深見に感謝している。
「11月３日だから、案内出すから来てくれる？」
深見は、断る理由など何もなかった。

夜、深見は、自分のパソコンから、同期の７人に、今日の網野のことをメールした。11月３日、網野は、誰に案内を出すのかわからなかったが、とにかく、７人にメールした。
なぜだか、うれしかった。
「深見くんどうもありがとう〜これからもみんなのチカラになってあげて」
真鍋のメールは、どうもおかしい。

網野は、シンセン食品株式会社に入社して３年が経過して、大きな転機が訪れた。東京支店にいて、引き抜かれてチーフマネージャになったのはいいが、そこの社長のオンナになって、結婚していたことを知って、自殺を図った。真鍋が網野の泥沼に手を突っ込んで、引き上げて、堺の実家に戻した。そして、介護施設の栄養士として就職して、介護士と知り合って、今日、深見は、網野康友になる人と会った。
深見は、この狭いところでアクセクしているが、網野は、もっと大きな池の中で、悪戦苦闘していたような気がした。深見は、真鍋に指示されて、網野を助けただけだ。真鍋がいなかったら、深見は、網野を泥沼から引き上げるようなことはしない。
網野は、悪戦苦闘だが、網野の道を切り拓いているような気がした。実家が農家である。農家も継ぐのだろう。ひょっとすると、家族は、喜んでいるのかもしれない。
深見は、網野のことを考えていた。真鍋のことを考えていた。
真鍋のような人がいなければ、網野は、潰れていたかもしれない。人は、１人では生きにくいかもしれない。網野は、深見に感謝していて、２人で深見に頭を下げたが、真鍋には、どうしているのだろう。頭を下げるとか、そういうことではないだろうと思った。
しかし、あの思い出したくもないイヤな出来事を、網野は平然として話せるようになっているのは、どういうことだろうか。平然として話せなければ、網野康友になる人とも、うまくはいかないだろう。
しかも。深見に会わせることができるのだ。
深見だったら、同じようなことができるかどうか、自信がなかった。多分、隠し続ける気がした。したがって、当時の様子を知る友人とは、会わなくなる気がする。それがフツウだろうに。しかし、網野は違う。
「感心するんだけど」
深見は、真鍋にメールしてみた」
「ゆみこはよろい脱いだからね」
すぐに返事が返ってくるのはよいが、真鍋のメールは、よろいのことばかりだ。何を言っているのかわからない。
小学校のころから女子の方が、なんでも先に行っていた。勉強もできるし運

動能力あったし、セクシーになった。オトコは、ずっと子どもっぽい。
入社して４年目に入って、真鍋も網野も牧本も、やはり先に行っている気がする。どういう先なのか、深見にはよくわからない。真鍋流だと、先によろいを脱いだことになるのだろうが、よろいを脱いで何がいいのか、よくわからない。
同期が８人いたが、みんなそれぞれの道へ歩みはじめているような気がする。網野は、特に、シンセン食品株式会社とは、ゼンゼン関係がなくなっている。どうして、８人の同期会に来たりするのだろう。
真鍋がいなくなったら、網野も牧本も来ないか。
深見は、パソコンの前の座イスで、ウトウトしてしまった。暑くて、ベッドに入れない。

○リスクテイキング

深見は、次の日８月25日の朝、電車で、「人望」という本を読んでいた。深見は、社長になりたい。人望がなければ、社長にはなれないと書いてある。それはそうだ。みんなに嫌われるようでは、社長にはなれないだろう。「人間力」という本も、読もうと思っている。この手の本は、深見の得意とするところではない。みんなは、深見は、合理性の権化だと思っているし、社長というのは、個人的好き嫌いを排して、会社の合理性に向かわなければならないと思っている。
何度読んでも、よくわからない。
「深見くんはいい人だからさ〜」
真鍋がしきりに言う、いい人とは、どういうことだろうか。人望があることとは違うのだろうか。真鍋に聞いてみたいものだが、多分、違うと言うだろう。
リーダーシップも、まだまだ足りない。リスクテイキングが足りないと、リーダーシップがうまくいかないと書いてあった。深見は、リスクを最小にして最大の実績を上げるのが、マーケティングだと思っている。社長でもある。ずっと、リスクテイキングはしてきたつもりだった。しかし、この「人望」という本には、深見が考えているリスクテイキングと、違うことが書い

てある。
深見は、朝の電車の中では読み切れずに、お昼休みに、弁当を買ってきて、食べながら読みはじめた。
ひょっとすると、深見は、リスクテイキングの意味を逆さに理解していたかもしれないと思いはじめていた。リスクの多いテーマに挑戦しなくなったことを、リスクテイキングしなくなったと、この「人望」という本では言っているようだ。
深見は、ひょっとして、まずかったかもしれないと思ってきた。リスクテイキングということばを知ったのは、シンセン食品株式会社に入社して、隠れてリーダーシップの勉強をはじめてからだ。どこかに、リスクテイキングなしには、リーダーシップはないという文をよんだことがある。
リスクを最小にするプログラムを持たないまま、仕事をしてしまうことだと思ってしまった。
それが、自分の考えとも一致する。
これはタイヘンなことかもしれないと思った。
そもそも、ガリバーのいる新製品の作戦でも、深見流のリスクテイキングで、ガリバーのコバンザメ作戦を思いついた。たとえ売上が少しであっても、リスクは最小に抑えられる。宣伝などしなくてもよい。
この「人望」に書かれているリスクテイキングによると、深見は、リスクテイキングをしない人になってしまう。リーダーシップに欠ける人になってしまう。
この「人望」という本の作者がおかしいのではないかと思った。この作者は、リスクテイキングを逆さに理解しているのではないかと思った。これは調べなければならない。
深見は、社長になる道を勉強している。リーダーシップに欠かせないのがリスクテイキングだとしたら、これは、まずいことだ。
「ちょっと出かけます」
深見は、ネットで調べて、本屋にも出かけてみた。
次第に、深見が逆に理解してしまったのではないかと、思うようになった。
時々深見が言う「リスクテイキングしないとダメだよ」は、みんなに、どう捉えられていたのだろう。

晩ごはんは、ピザにした、深見は、ピザソースも自分でつくれるし、ピザ生地も自分でつくれる。冷蔵しているピザ生地でパンも焼ける。今日は、魚肉ソーセージと納豆を乗せたピザにした。
ピザは、考えながら食べることができて便利である。深見は、まだ朝から、リスクテイキングを追いかけていた。そして、ピザを食べながら、自分が、まったく逆に理解していたことに、確信を持った。
もし長下が、リスクテイキングを正確に理解していたならば、深見のことを、リスクテイキングしないヤツだと思ったに違いない。三条だって、リスクテイキングをする人間だとは思わないが、長下の言うことは素直に聞く。深見は、間違って理解していたリスクテイキングであっても、長下に反対しても、自分の考えを通す。
すると、ガリバーのいる新製品の、コバンザメ作戦は、リーダーの作戦ではなくなる。
深見は、すべて、勉強して、自分の行動を決めてきた。リスクテイキングを逆さに理解したことは、決定的だった。しかし、まだ、ここ１年くらいの理解だ。なんとかなるかもしれないと思った。
牧本が手伝ってくれと言ったのに断った。このリスクテイキングを逆さに理解したためだ。そして、反対している自分に手伝えという無神経さが気に入らない。
深見は、ピザを食べながら、考え込んでしまった。勉強の仕方がまずい。リスクテイキングを逆に理解してしまうなんて、勉強の仕方がまずい。これだけで、リーダーシップがないと思われる。
深見は、何でも勉強して、１番だった。勉強の仕方にノウハウを持っている。みんなは、短時間に勉強してやり方を吸収する深見を見て、驚いていた。学生時代からずっとそうだった。それが、最近、どうもおかしい。神通力がなくなったかのようである。なんだろう。
このガリバーがいる新製品でも、深見のやっていることは、リーダーシップに欠けることだったのかもしれない。神通力のようなことではない。何かがおかしいのだが、それが、深見にはよくわからない。

〇深見の修正

８月26日の朝、深見が部屋に入ると、牧本は長下と話をしていた。三条もいた。隅安芸もいた。まだ説明会は続いているのだろう。
長下が、深見を呼んだ。
昨日の夜、深見は、牧本に、手伝ってもよいとのメールを送っておいたのだ。
「いいのか？」
「ええ」
「じゃ～今日から10日やってくれ」
長下は、なにも言わなかった。
深見は、東北北海道を回ることになった。１日３回の説明会を10日である。時には、観客が２人の場合もある。それよりも、説明会をやれるほどの情報発信ができることが素晴らしいことだと、牧本が言った。
深見は、リスクテイキングの挽回をしたいだけだ。リスクを冒さないことがリーダーだと思っていたが、どうやら逆らしい。深見の行動を少し修正しないといけない。
もし、ガリバーのいる新製品が失敗しても、単に手伝っただけだと言える状態にしておかないといけない。１番まずいことは、深見が、自分ではリーダーの選択と思っていた、ガリバーのコバンザメ作戦が、みんなからは、情けない弱気のリーダーシップのない作戦に捉えられることだ。長下は、そう受け取った可能性がある。修正しないといけない。

明日の朝から、深見は、仙台へ行くことになった。牧本は、福岡へ行く。東京大阪名古屋だけのつもりだったが、岡山広島福岡といった主要都市で説明会ができる。
深見は、８月27日仙台から、９月４日まで、東北北海道を回ることになった。牧本は、午後から、もう岡山に出かける。午前中に、牧本から教わらなければならない。
深見は、こういうことは、得意である。牧本も、深見であれば、１時間もあれば、牧本の代役は果たせるようになると思っている。

深見は、お昼を、牧本と一緒に食べた。弁当を買ってきて、会議室で食べた。牧本が、苦労していることや、気をつけていることを話しておきたいと、深見に言ったからだ。
牧本は、お店の人もけっこう勉強しているから、甘く考えていたらよくないということと、今回のポイントは、ガリバーがエネルギー訴求しているのに、シンセン食品株式会社が、ビタミン葉酸ミネラルを訴求していることだ。その違いを明確にしないと、お店には、ガリバーがすでにあるので、同じものを置いてはくれない。
先里の、これがホントなんだという話をするのだと言った。
深見は、多分、新幹線の中で勉強すれば大丈夫だろうと思った。深見は、こういうことは得意なのだ。
確かに、ガリバーがあって、それに挑戦している。これがリスクテイキングなのか。やっと、深見は、修正できた。
しかし、多分、この作戦は失敗すると思った。やはり、ガリバーはガリバーだ。店頭に並べることすらできないのではないかと思っている。それが、深見の本音だ。しかし、リスクテイキングをする姿勢を示さないといけない。それが、リーダーシップには欠かせないと、「人望」という本には書かれている。

深見は、慌てて一旦アパートに帰った。ボストンバックに着替えを詰め込んで、ピザを焼いた。食べないと、冷蔵している生地がダメになる。仙台の宿が決まったと、隅安芸からメールがきた。隅安芸が深見と一緒に行動してくれる。牧本は、１人で動くのだ。三条は何をするのだろう。パッケージの最終確認やテストランなど、忙しいのだろう。
有働から、ケータイとパソコンの両方にメールが入った。
「明日アメリカに出張に行く。大豆たんぱくのコストが合わなくなった」
深見は、驚いてしまった。仕入れの担当でもない有働が、なぜアメリカに行くのだろう。よくわからない。確かに、アメリカかオーストラリアの大豆だろう。加工はシンセン食品株式会社でやってはいるものの、やはり、大豆そのもの品質や価格が問題である。
コストが合わなくなったとは、他社との競合のことだろう。

深見は、同期８人が、それぞれ、みんな新しい道へ進みはじめていると感じた。

○有働がアメリカへ

深見が仙台のホテルを出ようとした時、有働からメールがきた。
「ひょっとすると、しばらくアメリカにいることになるかもしれない。シンセン食品株式会社には、大豆について、詳しい人が誰もいない。これだけたくさんの売上があるのに」
深見は急いでいた。
「ガンバって」
短いメールしかするヒマがなかった。急いで、ホテルを出た。隅安芸も一緒だ。
深見は、深見の最初の説明会を無難に終えた。説明会といっても、聞いていただいた人は３名だった。１時間も空けていただいた。反応は、まずまずだと隅安芸は言った。即返事というわけにはいかなかったが、ガリバーのいる新製品は、取り扱っていただける可能性がある。今日の２回目の説明会は、12時からだった。お店の勉強会をやっているのだそうで、そこに、30分、もぐりこませてもらった。30分だと、動画も短くしなければならない。先里のスライドも、飛ばすスライドを決めておかなくてはならない。隅安芸は、ゼッタイに、時間をオーバーしてはならないと言った。
深見は、勉強することが得意だ。スライドや動画が２本もあって、少し難しい専門的な話を、易しく話すことが、深見に与えられたテーマだ。こういうことは、慣れている。深見が少し苦手なことは、真っ白で、何も描かれていないキャンパスに、自由に、何かを描きなさいと言われることだ。問題の出し方がおかしいと思う。
ビタミン葉酸ミネラルの必要性を話すことくらい、簡単なことだ。深見は、ギリギリ30分の話を終えると、次のテーマに移っていって、深見は、早くどいてくれになってしまう。隅安芸が、終わりのあいさつをして、パソコンを終了させた。
やはり、隅安芸は、慣れている。お客さんのところで、何をしなければなら

ないか、よくわかっている。
今日の３回目の話は、３時からである。時間がある。深見と隅安芸は、遅い昼食をとった。
「有働もタイヘンなことになってしまった」
隅安芸が、言った。
隅安芸は、自分の仕事を有働が盗ったと言った。もともと大豆の仕事は、隅安芸が、先里の協力を得て、売り込みはじめたものだ。その大豆の仕事が、こういうことになろうとは、思ってもいなかった。隅安芸は、有働がアメリカに行くことになったのは、先里の「ただ売ってるだけでは生き残れない」と、有働に話したからだと言った。
またもや先里が出てきた。
「有働に先里さんを紹介したのか」
深見は聞いてみた。
現在は、先里と隅安芸は、ガリバーのいる新製品で、説明会などで一緒にいることが多い。その時に、大豆の仕事のことを、先里は、隅安芸に話した。今のままでは、価格競争に巻き込まれてしまうと。シンセン食品株式会社は、商社にアメリカからの大豆の輸入を、委ねているだけだ。
「有働に、アメリカで具体的に何をするのか、わかっているとは思えない」
隅安芸は、言った。隅安芸は、先里のことばを、そのまま有働に伝えたのだ。確かに、そのとおりだ。誰だって、このままではまずい。そうかといって、研究所に、大豆の専門家がいるわけでもない。
「有働は、動いた」
隅安芸は、有働がアメリカに行くことは、だれから命令されたものでもないと言った。有働は、勇気がある。隅安芸は、盗んだ盗まないでケンカになっていた有働を、褒めている。フツウであれば、会社に文句を言う。会社の判断が良くない。だれも専門家がいないのに、売れるからと仕事をはじめた。
「先里さんが言うには、会社はコンクリートと配線しかないから」
またおかしなことを先里は言うと思った。会社には、理念があったり方針があったりするではないか。
「誰かが考えて何かをしなければ、会社は沈滞する。会社はただのハードだから」

「それを有働に話したのか」
もし有働が信じれば、自分で動くかもしれない。深見は、そのようなことは信じない。深見は、社長になることが夢だ。会社は、社長が動かしている。会社は単なるハードというのは、おかしい。
深見は、隅安芸と話ながら、何かにつけて先里が出てくることに、違和感を覚えていた。そして、以前から、深見は、先里の考えに共感ができない。真鍋もだが、隅安芸も有働も。先里の影響を受けるのは、好ましくないと思った。先里は、何かおかしい。深見が勉強してきたこととは、違う話をしている。
「有働は苦労するだろうけど、アメリカに行くことは、有働の新しい道を拓くことになるかもしれない」
隅安芸の解釈である。隅安芸も変わった。有働をライバル視していたのに、今日は客観視している。しばらく隅安芸と話していなかったが、隅安芸も、変わってしまった。有働は、もちろん変わった。会社がワルイなどと言わなくなった。

〇ガリバーとの対決

８月28日土曜日だ。普段なら、深見は、11時ごろまでフトンの中だ。盛岡のホテルを出ようとしていた。
「深見くん平気？」
牧本の元気な声だった。
「ガリバーの会社さ〜少し焦ってきたって三条さんから電話があった」
深見には、なにもない。隅安芸に聞いてみた。
「そうらしいけど〜ガリバーのことはどうでもいいから」
深見は、隅安芸の顔を、思わず見てしまった。
「深見くんさ〜東北と北海道まだ暑いから、身体に気をつけて」
深見は、ありがとうと言うだけだった。それより、隅安芸の、「ガリバーはどうでもいいから」が気になった。ガリバーは、どうでもよくない。ガリバーが怒れば、シンセン食品株式会社の新製品など、押し出されてしまう。

10時に、盛岡の最初の説明会だった。勉強会の１時間をいただいたものだ。30名の勉強会だった。驚いたことに、９時から10時まで、ガリバーの勉強会だった。エネルギーの話である。テレビ宣伝もしていて、超売れている商品だ。お店でも、大きな売場を確保している。宣伝がなければ止まるかもしれないが、回転している。
隅安芸と深見は、ガリバーの話を聞くことはできなかった。９時45分に会場に入るように指示されていた。
ガリバーとビタミン葉酸ミネラルの商品は、基本的に同じだ。長下の指示は、訴求が違うから、別のところに置いてもらえだった。お店は、シンセン食品株式会社の考えどおりにやってくれるのだろうか。
深見は、指示されたととおり、10時45分までに話を終えた。ガリバーの社員が聞いていたことが気になった。牧本には聞いていない。
「はじめてだ」隅安芸は言った。
質問の時間になった。
「ガリバーと同じものだが、ホントはシンセン食品株式会社が正しいとは、どうして言えるのか」
先里の考えは、いつも気に入らない。自分の信じることが１番なのだ。
「シンセン食品株式会社としては、この食品の形態だと、ビタミン葉酸ミネラルが最もふさわしいと思っているだけです。特に女性に対しては」
深見は、やわらげないと、押し通すことができない。
驚いたことに、ガリバーが質問した。決して逆をさせてはくれないだろうと思う。心情的に、お店のみんなも、ガリバーの味方をする。
「ビタミンミネラルを追いかけたら、たまたま、ガリバーと同じになったと言ったが、本当ですか？」
これは、そうだと答えるしかない。先里しか答えられない。

もし質問の時間を限らなければ、質問攻めに出くわしただろう。
隅安芸は、まだ少し早い時間だったが、深見を食事に連れて行った。深見のイライラを鎮めるためである。13時30分から２回目の説明会がある。
「シンセン食品がこのように逃げないで正面から対処するという姿勢が大事だと先里さんは言っていた」

隅安芸は、攻められて辛いけど、会社として、大きな意義があることを、深見に伝えようとした。深見は、体面を重んじる。隙を突かれるようなことはしない。しかし、それだけに、深見の内面にストレスが生じる。どうして自分が攻められなければならないのか。
隅安芸は、牧本と深見の違いを痛感していた。説明が上手とか下手とか、そういう問題ではない。自分の立ち位置のことである。牧本は、シンセン食品と牧本自身の立ち位置を同じにする。深見は、シンセン食品の立ち位置は理解しているが、それは自分の考えとは違うと言ってしまいそうである。安心感が違う。
深見は、こういう場で、上手く説明できないことが、自分にとって、最もイヤなことになる。それはそれで、自分の立ち位置なのだ。しかし、それを越えた議論になると、危うくなる。隅安芸は、微妙な危うさを感じ取っていた。
「隅安芸の心配はわかっているから安心してくれ」
深見は、隅安芸に、そう言った。隅安芸は、次から、質問は、自分が応えようと思った。
隅安芸は、次第に、深見を理解してきた。３年も同期の人間として、ミナミの居酒屋で飲んだが、よくわからなかった。このような厳しい局面に立った時、いままで見えなかったものが見えてくる。
深見は、なによりも自分が大事なのだ。自分を守るためには、たとえシンセン食品であっても、ワルく言いそうである。
「自分としては、ガリバーと同じ作戦が好ましいと、個人的には思っている」
ひょっとすると、言ってはならないことも、言うかもしれない。心底、深見は、そう考えているかもしれない。そう言って、担当を替えられた。

〇深見のよろい

８月30日秋田での説明会だった。牧本から電話があった。深見と隅安芸は、まだホテルで朝ごはんを食べていた。
「ガリバーと対決してるそうだけど」

「先里さんに聞いたら、無視するように言われたから、伝えようと思って」
「ガリバーさんはガリバーさん、シンセン食品はシンセン食品という立場でいいって」
「争わないことだけど」
黙っている深見に、矢継ぎ早に牧本はことばを投げてきた。お互いに、今の時間は忙しい。
「わかってる」
深見は、先里が言っていると言われる度に、反発心が芽生えてくる。隅安芸も牧本も、先里が言っていれば、それで安心そうに見える。そんなバカなことはないだろう。

８月31日青森の説明会でのことだった。
ついに、隅安芸の心配していたことが起こってしまった。葉酸値に関する質問だった。
「特色として表現するほどの値ではない」という意見である。
隅安芸は、シンセン食品としては、意味があると答えた。
「その根拠は何だ」という質問に、「なんとしてもエネルギーにしたいのだろうが、反対はしない」
隅安芸は、慌てて、深見の個人的な意見だと、付け加えた。
最初から、エネルギーが主であることはわかっている。ごはんだってパンだってそうだ。その中で、何を重視したかが、シンセン食品のテーマである。
隅安芸は、また早いお昼に、深見を誘った。
「向こうの言い分を認めるようなことを言わないでくれ」
「エネルギーが１番多いことは確かだから」
「シンセン食品の主張は違う」
話は平行線になってしまった。これでは、説明会にはならない。隅安芸は、深見に、説明だけをして、質問の答えは自分がやると言った。
13時30分からの２つ目の説明会の前に、牧本から、また電話があった。
「深見くんさ〜自動車はさ〜走るんだよ〜だけど〜今はさ〜電気で走るのか、排気ガスがないのか、燃費がいいのかとかさ〜そういう話してるん

よ」
「エネルギーがあるのはあたりまえなんよ」
「そんなことオンナはみんな知ってるんよ」
青森での、２回目と３回目の説明会では、際どい質問も出ずに、終了した。

９月１日だった。札幌の説明会である。
「青森で、本当はエネルギーが正しいというような説明をされたようだけど」
隅安芸は、慌てた。これだけ説明会をやってくると、隅安芸には、話に尾ひれがくっついて、どうにもならなくなることも承知してくる。
「そうではなくて、この商品に、エネルギーがあるのはあたりまえだと言っているだけです」
何か言いたそうな深見を抑えて、隅安芸が答えた。本当は、こういうことも言いたくはなかった。
隅安芸は、東北北海道を、深見と回っている。９月１日の札幌になって、次第に、シンセン食品の新製品が、ガリバーから逃げている感じがしてきた。隅安芸は、真剣に考えた。牧本と回っている時は、ガリバーを追っていた。牧本の、オンナに売るんだからという一言で、納得してもらった。深見との説明会では、なにかがおかしい。
牧本から、メールが返ってきた。
「深見くんのよろいなんよ〜これは」
「深見くん〜前からだけど〜自分のよろいを守るんだったら、どんなことでもするんよ」
「こういう自分のよろいになってない説明会なんか危ないよ」
「隅安芸くんがさ〜深見は説明だけしろって言えばいいんよ」
「わたしは、オンナだから、ビタミン葉酸ミネラルがいいんよ」
隅安芸は、やっぱり、牧本と来るべきだったと、後悔していた。
隅安芸は、牧本のメールの内容がよくわからなかった。深見のよろいとは何だろう。時々、真鍋が使うことばではある。

夜になって、隅安芸は、コンビニに買い物に行くと言って、外に出た。函館

は、夜は静かになるようだ。
「だからさ〜深見くんはさ〜工学博士とかあるでしょ？自分のよろいが〜それ守ることが１番なんよ」
「みんな〜べつに深見くんを攻めてんじゃなくて、シンセン食品の新製品を攻めてるんだけど〜深見くんは自分のよろいが攻められてる感じするんよ」
「実は、自分もそれでいいとは思ってるみたいなこと言うかもしれん」
「わたしは、オンナが大事なんよ〜深見くんは自分のよろいが大事なんよ〜バカみたいだけど」
隅安芸は、牧本と話していて、少しづつわかってきた。
隅安芸は、あの叩き潰されたに等しい牧本が、こんなに勢いよく隅安芸に話すようになっていることも、不思議だった。牧本に、何があったのだろう。深見のよろいとは何だろう。

９月４日の夜、旭川から、隅安芸と深見は帰ってきた。２人とも、ドロドロに疲れていた。夜になっていたが、牧本も、九州から帰ってきた。三条は、明日から生産を開始と言って、今日中に、様子を確かめたかった。
牧本は、隅安芸と深見を見て、ヤバイと感じた。
「北海道のお店は難しいかもしれない」
隅安芸が言った。
「九州と中国は平気だよ」
牧本が言った。
三条は困った。生産を開始するが、どれくらい積み上げればいいか、まだよく把握していない。フル生産して積み上げるのか、１直で生産するのか。牧本の言っていることと、隅安芸の言っていることが、大きく異なる。
長下が来て、深見を連れ出した。深見の新製品の状況を、長下が深見に説明するらしい。長下は、別の新製品で、東京に出かけなければならないと言った。
「隅安芸さんは急に弱気になってるけどどうしたのですか？」
三条が聞いた。
「隅安芸くんも深見くんもオンナがわからんのよ」
牧本が隅安芸が返事をする前に言った。

「どうも、いつも質問攻めにあって自信をなくした」
隅安芸は、今の心境を話した。
「隅安芸くんはどう思ってんの？」
「オレはオンナはビタミンと葉酸とミネラルだっていうのでいいと思ってる」
「深見くんがエネルギーかビタミンかの話しに巻き込まれるからでしょ？」
「深見くんはさ〜この仕事はムリなんよ」
牧本の考えは、はっきりしている。
「深見くんがさ〜エネルギーが大事かビタミンが大事かとか考えるからだよ〜そんなのどうでもいいんだよ〜深見くんじゃなくてオンナだよ」
「深見くんのよろいがダメなんよ」
隅安芸は、またよろいの話になったと思った。
三条は、迷っていた。
「北海道のお店が、たとえゼロでも、関東から西のお店では、半分のお店に入るから」
牧本の強気の発言で、三条も、気をとりなおしていた。
深見は、その日は、深見の新製品の状況把握に追われた。

○隅安芸が自信を取り戻して

９月５日日曜だった。隅安芸は、松山での２つの説明会に出かけた。牧本と一緒である。隅安芸は、はっきり言って疲れていた。もうガリバーのしつこい質問に、対処したくはない。それだけ必死なのだろうけど。
空港から、会場に直行した。13時30分説明会だった。20名が集まっていた。薬剤師の研修だということだった。バイヤーもいて、聞いたこともないシンセン食品のプレゼンテーションを聞いてみようという姿勢だった。
牧本の説明は、20分で終わった。そして、どういうわけだか、ここでもガリバーがいた。
「わたしはオンナだからオトコには興味はありません。男はエネルギーだとおっしゃるんだったら、どうぞ」
牧本の突っぱねたような答え方に、ガリバーの社員は、次の質問を忘れたか

のようだった。みんな男の社員なのだ。オンナを出されると、弱いのだ。
「両方売れたら売上増えるか」
バイヤーの一言で、話は終わってしまった。
隅安芸は、次は夕方の５時だから、どこかでごはんを食べようと、牧本を誘った。
「牧本のペースを忘れていた」
「いいとかワルイじゃないんよ〜深見くんは向かないって〜こういうのは」
「どうしてだ？」
「深見くんの中で主語がオンナにならへんのよ」
牧本は、天丼とうどんを食べていた。
「今度のお客さんはオンナでしょ？オトコは捨てるんよ」
隅安芸は、うどんもくださいと頼んだ。牧本が食べているうどんがおいしそうだった。
「牧本は、主語が自分から離れられないと言ってるのか」
「よろい脱げないからね」
「オレはこの商品はエネルギーだと思ってるが深見くんの主語なんよ」
「深見くんのプライドなんよ」
「オンナだって言うのがわからん」
隅安芸は、ずっと牧本と話をしていた。
「牧本は、どうして長下さんにあんなこと言ったんだ？」
「わたしも深見くんと一緒だったからさ〜自分のよろいに主語があったんよ」
「勉強してきたからムリないって先里さんに言われた」
「だけど、世の中、お客さまが１番だからって言われて、長下さんに謝れって言われて」
「最近だよ〜謝ってもいいかって思ったのは」
「今は〜深見くんのことワルク言ってるけど〜少し前の自分だよ」
隅安芸は、牧本の言っているよろいが何であるか、次第にわかってきた。
「真鍋も先里さんのことをメールしてくるけど」
「なべちゃんは、自分が苦しい時に、先里さんに話し聞いたんだよ〜よろいだけど」

「よろい脱いだらラクになるからさ〜」
「わたしも長下さんとケンカして少し経って〜なべちゃんに連れられて先里さんと会ったんよ」
「よろい脱げたからさ〜長下さんに電話した」
「それで先里研究室に異動になったのか」
「わたしたちみんな〜よろい中心主義なんよ」
「よろい脱げないよ」
隅安芸は、次の説明会の心配をしていなかった。深見と北海道を回った時は、常にビクビクしていた。今は、牧本と、よろいの話をしている。説明会の話をしていない。

隅安芸は、帰りの飛行機の中でも、網野ゆみこのよろいの話しを、牧本から聞いた。
隅安芸も、何から何まで、網野ゆみこが自分で話したので、知っている。隅安芸は、網野が、どうして沈んでもいいものを、あんなに明るくなれるのか、何があったのか知りたかった。
「簡単なんよ、ゆみこはよろい脱いだんよ」
「なべちゃんに連れられて先里さんに会ったんよ」
「ゆみこ〜憧れてたんよ〜オンナ経営者とか」
「おかしなオトコに狙われたんよ〜よろいあるから」
「よろいって価値観だからさ〜」
「お米つくってトマトつくって〜私がやりたいって言われてさ〜先里さんに」
「わたし達よろい中心主義なんよ」
「お米とトマトによろいはないからね」
松山から大阪は、アッという間に着いてしまう。隅安芸は、牧本のよろいの話を聞きながら、自分のよろいについて考えていた。
「わたし達みんなよろい中心主義なんよ」
隅安芸は、どちらかというと、いまだよろいを重ねたい人だったのかもしれないと思った。これといった、よろいが見当たらない。資格が何かあるわけでもない。深見のように、工学博士でもない。

「オレはどうなんだろうね」
牧本に聞いてみた。
「よろい脱いでみるとさ〜よろいが見えるんよ」
「だから深見くんのよろいが見える」
「隅安芸くんもさ〜先里さんと話したわけでしょ？」
隅安芸は、真鍋に、先里のところに連れて行かれた。そして、この仕事に深入りすることになった。何か、わかったような気がしている。あの時に、転職しなくて良かったと思っている。
しかし、よろいの話は聞かなかった。辞めるつもりでやっているだけである。
「よろい脱ぐってなんだ？」
「ハダカになるだけだよ」
「先里さんの話だけどさ〜オンナはよろいを重ね着してる確率が少ないんだって」
「あかちゃんいるから」
「あかちゃんよろいないからね」

○深見が手伝ってかえって混乱した

深見の新製品は、10月１日出荷になった。リスクも何もないが、深見は、忙しくした。牧本は、自分だけでは説明会をこなさせないので、深見を頼んだ。長下にお願いした。深見も、最初は断ったが、どういうわけだか、やると言ってきた。失敗したと思った。苦しくても、自分がやればよかったと思った。牧本には、よろいがない。ガリバーのように、シンセン食品ごときなどと考えない。お客さんが受け入れなければ負けである。しかし、オンナの商品だ。オンナに限れば、自信がある。負けるとは思わない。
深見に応援を頼んで、かえって混乱させてしまった。深見は、かえって混乱させてしまったなどとは、思ってもいないだろう。自分のよろいの体面を守れなかったかもしれないので、悔いているだろうと思った。
牧本には、深見が、よく読めていた。多分、深見には、自分自身が読めていない気がした。牧本だったら、「自分が応援してかえって混乱させたかもし

れない」というメールをする。そこが、よろいで動いている人の辛さだと思った。少し前の牧本である。

三条は、相変わらず、忙しく走り回っている。生産が開始されて、サンプルができてきた。営業は、サンプルを持って走っている。出来は良かった。札幌支店からは、サンプル追加の依頼がないと、三条は言っていた。他の店は、サンプルが少ないと、電話がかかっている。５０００万円などアッという間になくなってしまう。
牧本は、考えていた。再度札幌へ行くかどうか。青森も、静からしい。深見には知らせられない。多分、深見は、理解できないだろうと思った。
「よろいがしゃべったのでは説得力がないでしょ？」
先里が牧本に今日も言った。口を酸っぱくして、先里は、よろいのことを言う。深見に知らせないといけないのに、どうしていいかわからない。
牧本は、先里に呼ばれた。
「埼玉のお店の勉強会なんだけど、お客さんの勉強会です」
お店によっては、近所のお客さんを集めて、勉強会をしている場合があるらしい。もちろん、シンセン食品は、はじめてである。
「私のパワーポイントも、もっとわかりやすくしないといけない。４分と30秒の映像はそのままでいいけど」
９月11日だということだった。牧本は、お店に電話をして、詳しいことを聞いた。今日は９月６日である。
お店の端に集まってもらうだけだから、スライドなどは使えないと言われた。牧本は、急にイメージが萎んでしまった。
「身ぶり手ぶりで大きな声で、最初に、気の利いたことを言うように、締めのことばは考えておけ、時間延長はない」
先里が、牧本に言った内容である。
牧本は、また新しく展開したのだと思って先里に聞いた。
「売場が売ろうと考えなければこのようなお客さま勉強会はありませんよ」
過去、シンセン食品では、例がないと、先里は言った。

牧本は、東北と北海道が気になっていた。今日、隅安芸は、１件も入らない

だろうと言った。すごく気になる。牧本には自信がある。キチンと説明して、ガリバーがありながら、シンセン食品の新製品を並べてもらう自信がある。
片方で、お客さま勉強会にもなっているのに、片方では、まるで、話題にもならない。
「もしあなたが、よろいを脱いで良かったって思うのだったら、１人でもいいから、知らせて、よろいを脱ぐのを手伝ってください」
先里に、今日言われた。多分、真鍋も、先里にそう言われたのだろう。彼女は実行した。その１人が牧本だった。
牧本は、深見だろうと思う。しかし、牧本には、何をすればよいかわからない。さっぱりわからないのだ。深見と大ケンカになる気がする。なぜ真鍋は、うまくできるのだろう。網野にしても、あの泥沼に手を突っ込んで引き上げた。しかし、牧本は、深見をどうすればいいのか、さっぱりわからない。深見は、このままでは、何度も同じことが起きる。自分の知らないうちに、何度も辛いことが起きる。それは、自分が経験したことだから、よくわかる。
牧本は、自分と深見のどこが違うのか、考えてみた。
深見は、自信を喪失したことがないのだろう。常に、１番できた。今までのやり方では、１番だった。今度だって、東北北海道で１件もお店に入らなかったら、深見がまずかったとは言わないだろう。牧本は、深見のワルイところまでわかっている。深見は、何と言うのだろうか、予想がつかない。
１度、底まで墜ちないと、自分がおかしいかもしれないとは思わないのかもしれない。それは牧本の経験である。真鍋の言っていることを素直に聞いた。網野だって同じだ。網野は、真鍋の言っていることを、真剣に聞いた。深見は、底まで墜ちることがないような気がする。難しい。

○９月**11**日お客さまの勉強会

ガリバーのいる新製品に、先里は、まったく口も手も出さなくなった。すべて牧本が出ていく。先里は、何か、わけのわからないことを、新しくはじめたようである。

牧本は、毎日忙しい。営業からの問い合わせが多い。社内説明会も何度もやることになった。牧本は、もう深見に手伝ってくれとは言わない。深見は、それどこではない。もうすぐ、自分の担当する新製品の出荷日がくる。
そして、９月11日になった。
牧本は、紙芝居をつくって、一応、持って行った。埼玉県の団地が多いスーパーマーケットだった。食品売場の隅に、イスが20並べられていた。今日、ここで３回話をすることになっている。多分、すべて女性だろう。土曜日だから、ダンナも一緒の奥さんもいるかもしれない。
「誰もお客さんがいなくても、時間になったらはじめるように」
先里に言われた。誰もお客さんがいないということは、みなさん、興味がないのだ。売れるわけがない。そういうケースもあると、先里は言っている。それでも、キチンとやれと言っている。昔の牧本だったらできないと思う。そういうつもりでシンセン食品に就職したのではないと言ってしまう。やはり、よろいは脱がないといけない。店内に、貼り紙がしてあった。東京の担当営業が、カラーコピーのパンフレットを配りはじめた。
「オンナのビタミン葉酸ミネラル」という題になっていた。

「オモロイ話しやったら、11月から売り出すこれ買ってください」
牧本は、大阪の人間である。東京のことばを使うと、考えてしまう。今日は、隣のおばさんと、大阪弁で話すことにした。
「ビックリするかもしれへんけど、こんなにビタミンが入ってます」
牧本が調子良ければ、１人漫才になる。同期会でも、ずっと、牧本が、座を暖めてきた。笑いが絶えない。３年が過ぎるまでの同期会である。今年４年目に入って、８人全員に、試練が訪れた。そして、牧本にも試練がやってきて、牧本から１人漫才が消えた。
しかし、今日は、完全に１人漫才が復活している。ほとんどが、どうしよう〜と思いながら、お店の店員に、強引に勧められて、イスに座っている。誰も期待などしてはいない。
しかし、話はおもしろい。大阪弁も助けている。サンプルを少し持ってきているのだが、ゼンゼン足りない。

牧本は、帰りの電車の中で、このガリバーのいる新製品は、ひょっとすると、うまくいくかもしれないと思うようになった。誰も、ガリバーのことなど聞かないしイメージしない。牧本も、ガリバーの話など一切しない。先里に、キツク言われている。先里の言っているとおりに、今日は進んだ。オンナの生活者は、ガリバーなどどうでもいいのだ。自分とは無関係だと思っている。こういうところが、つくり手側にいると、読めない。
牧本は、隅安芸に、もっとたくさん、生活者への説明会を開催してくれるようにお願いするメールを出した。帰って話せばいいものを、ケータイメールをした。牧本は、うれしかった。先里に、ＣＣした。
こういう話を、深見としたいものだが、深見には、わからないかもしれないと思った。深見には、マーケティングの建前に押し切られそうである。お店の隅で、数人のお客さんに説明するのは、効率が良くないなどと、言われそうな気がする。そこでまた議論になる。マーケティングの担当が三条に変わってよかったと思った。隅安芸が、営業のまとめ役でいてくれるのも、こころ強かった。
それにしても、深見をどうすればいいのだろう。牧本は、別の悩みを持っていることになる。深見は、新入社員として一緒に入社した時は、１人抜けている感じだった。大人びていた。それが、４年目の今年、深見だけが、幼い感じがする。牧本の感じ方である。深見もだが、今年に入って、みんな、辛い思いをしている。それぞれが、一皮剥けた。大人になったのかもしれない。牧本も、同じである。具体的には、それは、よろいを脱ぐことだった。
牧本は、もうよろいを着ていない。お店の片隅での説明会であろうと、この、ビタミン葉酸ミネラルをわかってもらったら、うれしい。１人でも話をさせてほしい。

夜になったが、牧本は、ミナミのオフィスに寄った。隅安芸が待っていた。
「こういうスケジュールつくってみたんだけど」
出荷して、お店にモノが並んだ時の方がうまくいくとのことで、牧本の説明会を、11月１日から１ヶ月間、連続して、入れてある。
「まだ交渉してないけど、お店は売上上がればいいんだから」
牧本は、これでいいと言った。11月１ヶ月間は、休みが１日もなくなる。先

里は、自由にやってくださいだろう。あとで連絡しておこうと思った。牧本は、深見のことが気になっていた。深見は、10月１日出荷の自分の担当の新製品に追われているはずである。
三条と同じ部屋だが島が違う、深見の机に向かった。
「深見くん、どう？」
深見の机には、たくさんのポストイットが貼られていた。パッケージの印刷ミスで、シール対応をするようである。
９月28日にシールが貼りが終わって、お店にモノは直送するのだろう。直送する数を電話で受けている。
牧本は、深見と話をしたかったが、深見の顔は、牧本と話したくないと言っていた。
そのまま引き返そうとすると「なにか用事ですか？」深見が声をかけてきた。
「一緒に帰ろうと思ったんだけど」
「ゴメン、もしかして帰れないかもしれない」
「わかった」
なんで深見がシール対応したモノの直送数を記録しているのか、よくわからなかった。深見は、何をしているのだろう。

〇網野の妊娠

９月12日だった。日曜である。牧本は、朝寝をしていた。
多分、隅安芸は仕事をしているだろう。三条も忙しくしているだろう。このガリバーのいる新製品は、パッケージも生産に組み込まれていて、毎日の生産量が膨大になる。このような仕事は、シンセン食品はじまって以来だと言っていた。三条などは、眠ってもいられないだろう。５０００万円の販促費も預かっている。
起き出して、メールを立ち上げてみた。
「11月３日の披露宴お願いします。まきちゃん受付とかやって」
これはタイヘンである。11月は、１カ月連続でお客さま説明会にしてある。
「じゃ〜11月３日は堺のお店で午前中だけにすればいいの？」

隅安芸は、もう牧本の11月のお客さま説明会の手配をしている。すぐ電話して良かった。
「ゆみこの披露宴行くでしょ？」
「あたりまえだよ」
隅安芸は、メールを見ていた。
「それより、大丈夫なのかな～」
「なにが？」
「妊娠してることだよ」
牧本は、網野のメールをゼンブ読まないで隅安芸に電話した。網野は妊娠していた。
「ひょっとすると、お腹大きくなってるかもしれんけど、ビックリしないで」
牧本は、何かがおかしいと思った。網野は、こういうことを隠す人だった。披露宴では、目立たないように、太目のドレスにしそうである。それが網野だった。だから、甘いことばに惑わされた。この網野のメールには、別人ではないかと思わせるものがあった。妊娠してるから驚かないでと言っている。
真鍋から電話がかかってきた。
「お昼どう？」
牧本は、駅の近くのカフェで12時だと言った。今日は、もうミナミのオフィスには行かないことにした。真鍋と、網野の披露宴の相談をしないといけない。もう２カ月もない。

牧本は、真鍋と、こうして時々会っている。会社では、同じ敷地にいる。夕方、先里の机に２人で出向くことが多い。牧本が窮地に陥った時、真鍋は、イヤがる牧本を引っ張って、先里の机に向かった。先里は、個室などなくて、高いパーテーションで仕切られているだけである。話をすれば、研究室のみんなに聞こえてしまう。だから、真鍋は、夕方しか、先里の机には行かなかった。
牧本は、最初は、先里を、不思議の国の人のように見ていた。
「心棒というもんがあって、人や集団には欠かせないものですが、集団の心

棒は揺れるのが常だから、あんまり従ってばかりいると、自分の心棒を失ってしまいます」
何を言いたいのか、よくわからない。
真鍋の解説がなければわからない。今は、牧本は、牧本の心棒で動いている。シンセン食品の心棒は大事だが、それより、自分の心棒が大事だ。会社の心棒は揺れるのだから、その揺れを怒ってみても、どうにもならない。牧本は、マーケティングの責任者の長下に、いちゃもんをつけられて、言ってはならないことを口にした。自分が未発達だったし、長下らの会社も揺れることがわかった。
牧本は、一時、立ち上がることもできないくらいに落ち込んだし、長下を恨んだ。
「心棒が揺れるのに、恨んでもはじまらないでしょ？」
牧本には、先里は、不思議の国の人であった。今は、先里を信じている。自分で長下にも謝った。長下は、人事権がある。牧本を、先里研究室に異動させた。
牧本は、１人でアクセクしていたことがウソのように思える。すべては、自分のよろいを守ろうとした。自分の研究にいちゃもんをつける人などいなかった。先里が言う「お客さんがいなくても成立する研究なんてやってはいけない」ということばに、深く共感できるようになった。牧本は、その研究が、まだ誰も手をつけていないかどうかが大事だった。お客さんなど、思ってもみなかった。

「わたしが司会するから」
真鍋は、自分が、網野の披露宴を仕切ると言った。
「お金ないのわかってるから」
質素にすると言った。ただ、堺では、まして養子を迎えることになるのだから、それなりのことはしないといけない。
「まきちゃん受付だから」
「１人で受付できないから、深見くんとか手伝ってもらって」
真鍋は、もう仕切っている。
牧本は、よろいの典型である披露宴を、真鍋がどう仕切るか、興味が出てき

た。
「わたし、ゆみことまだ相談してないから」
「２人で今から行く？」
牧本は、真鍋に積極的に話している自分に驚いた。
真鍋は網野に電話をして、２人は、パスタを急いで食べて、慌てて電車に乗り込んだ。ここからだと、堺まで、けっこう時間がかかる。

牧本は、網野が持ってきた招待客のリストを見て驚いた。
農家である。毎年自分に代わって稲作の作業をやってくれている人達と畑を借りてくれている人達である。そして、老人施設の作業を一緒にしてくれている人である。主人は介護士である。介護士仲間。一般的に、偉い人が１人もいない。これでは、パーティーにした方がいいのではないかと、牧本は思った。
「ホントに披露したいんよ」
網野は言った。
「フツウの私服で来るの」
「わたしは着替えたりするけど」
「車イスの人がいたりするから」
「やってもらえるのかな〜ホントに」
牧本は、大きくうなづいた。やはり、網野は変った。別人になった。生きることで、何が大切かわかってきた。真鍋が、どう仕切るか興味があった。しかし、網野の方が、しっかりしていた。網野には、よろいがない。

〇深見を手伝う
９月22日だった。牧本は、先里に相談された。
「深見さんの新製品が、うまくお店に入らないんだけど、追加しているモノの意味を問われているようなんだけど」
牧本は、先里が、何を言いたいのか、よくわからなかった。牧本は、連日忙しい。
「長下さんから手伝ってくれないかと言われている」

先里は、膨大なスライドを見せた。５年前に新製品として投入する時に描いたものだと言った。
「どうしてこれを知らないのですか？みんな」
「５年前には、この商品の根拠など、社内には、あまり興味がなかったんです」
埋もれてしまった資料のようだった。それにしても、牧本には、先里が、まだ不思議の国の人に見えなくもない。誰も見てもくれないようなスライドを、多分、夜中に自宅で描いたのだと思う。
「わたしは何をすればいいのですか？」
33枚のスライドに、昨日新しくつくった３枚のスライドを見て、なぜ、新製品を追加したか説明を考えてほしいということだった。３品の追加である。お店だって、場所がある。ただ売上を増やしたいから追加するのだったら、従来のモノを喰ってしまうことがある。それでは困る。
少し前までの牧本であれば、「こんなに忙しいわたしに何言ってんの？やってられへんよ」だっただろう。
とりあえず、今日の予定を繰り下げて、考えることにした。
それにしても、深見は、苦戦しているのだろうか。簡単だと言っていたのに。

お昼過ぎに、牧本は、６枚のスライドにして、先里に送った。
「これでいいと思います。ありがとう」
先里は、多分長下に送ったのだと思った。長下に頼まれたと言っていた。牧本は、販促物のプレゼンがあって、デザイン会社に出かけた。三条も隅安も一緒である。
ガリバーのいる新製品は、お店までは、入りそうである。三条や隅安芸や牧本の努力が実っている。11月１日出荷のための注文が入ってきている。倉庫に、初回出荷の積上げを行っている。牧本は、もちろん、はじめての経験だった。
フックでぶら下げるスタイルのパッケージだが、棚置きスタイルも必要だというので、紙の什器をデザインしている。最近は、メーカーが、勝手にディスプレイ什器をつくってくる。お店の倉庫は、メーカー持ち込みのディスプ

レイで溢れてしまうらしい。隅安芸は、使わなくなったら、捨てられる什器がよいと言っていた。３人とも笑いが絶えない。順調に進んでいる。
深見から電話があった。
「長下さんから聞いたんだけど、これ牧本がつくったんだって？」
声が怒っていた。
「今自分がつくってるのに、どうしてなんだ？」
牧本は、困った。こうなる予感もしていた。深見にメールしておこうと、一瞬思った。
「わたし〜状況よくわからんのよ。先里さんが長下さんから頼まれたらしいんよ」
牧本は、深見に言い訳をしていると思った。隅安芸と三条は、事情を察した。
「簡単だと思って甘く見たんだよな」
隅安芸が言った。
「深見はああいうオトコだからな〜」
隅安芸が言っている、ああいうオトコとは何だろうか。三条は、黙っている。
「オレだったら〜ありがとうで終わっちゃうけどな」
隅安芸は、少し前まで、ありがとうで終わるような人ではなかった。自分の実績を盗られたと怒った。牧本は、隅安芸も変わったと思った。
「牧本は悩むことないから」
隅安芸は、そう言ってくれた。三条は、依然として黙っている。牧本は、また新たな悩みを抱えるような気がした。

遅くなったが、牧本は、先里研究室に帰った。
「おつかれさま」
「お昼に深見くんから電話があって怒ってました」
「深見さんだけになったんだけどな〜」
先里が、不思議の国の住人のようなことを言った。牧本にも、だいたいの見当はついた。よろいを脱がないのが、深見だけになったと言っているのだろう。

「よろい脱がない人のことですか？」
「ええ」
牧本は、もう先里と話す必要がないと感じた。ほんの短いことばだが、問題を複雑にしているすべてのことが理解できた。それも、先里と牧本は、共有している。
牧本は、アパートに帰って、肉じゃがをつくりながら、深見のことを考えていた。深見は、牧本にとっては、先輩の感じだった。同期なのに先輩である。同期の研修でも、深見がリーダーだった。研修屋さんのおじさんにも、深見は重宝された。終わりごろには、深見は、研修屋さんでもあった。仲間８名の、新入社員研修を指導した。
それが、４年目に入って、どうしたというのだろう。牧本も、深見に手伝ってもらうと、かえってメンドーになってしまった。東北と北海道のお店への説明を、どうするか考えなければならない。今日は、牧本が深見を手伝おうとしたのだが、深見は怒ってしまった。
７名の新入社員は、なんとはなしに、深見に頼っていた。そして、いきなり全員に、辛い出来事が襲って、そして、みんな変っていった。牧本も変った。自分でも、これで良かったと思っている。よろいを脱いだことだ。
よろいで勝負はしない。
しかし、深見は、依然として、深見のよろいで勝負している。牧本は、そう感じていた。このことを深見に知らせるのは、至難だと思った。

〇深見のよろい
９月27日になった。牧本は、昨日は、真鍋と、駅前のカフェで、網野の披露宴の相談をした。
もう、招待者に、案内を配る。
「牧本さん、相談があるんだけど」
９時に先里が話しかけてきた。
「やっぱりうまくいかなくて焦っているんだけど」
先里は、主語を言わない。最近、やっと慣れてきた。深見の３品の追加新製品が、お店に陳列してもらえないことだ。

「深見くん自分で資料つくってるって言ってましたけど」
先里から送られた深見の資料を見て、牧本は驚いた。表題があって、シンセン食品株式会社マーケティング部深見甚太郎とあった。博士とも書いてあった。
昔、新入社員研修のとき、牧野は、深見の、こういうスライドに、憧れを持っていた。重要人物が書いたスライドだと思わせる。
７枚のスライドだったが、牧本は、これは、シンセン食品の営業が、説明できないと思った。深見の名前のモノを、どうして説明できるだろう。もっと誰でもがわかりやすくしないといけない。
先里は、牧本が考え込んでいるの見ていた。牧本は、どうしていいかわからなかった。
「うちの営業が話せないって言ったんですか？」
「社内でモメててお店に行ってない」
これはタイヘンなことになってしまった。今日は９月27日だ。
「決まっているお店はあるのですか？」
主要なお店が決まらないようだ。メーカーの思うようにはなりたくない。どう考えても、メーカの、安易な売上拡大策にしか見えない。
牧本は、この７枚のスライドを説明してみた。シュミレーションしてみた。これは、明らかに、深見が、同業者や研究者に向けて語っている。お店にとっては、深見などどうでもよい。３つも追加するが、そのそれぞれに、どういうベネフィットがあるのかわからない。ピントがズレている。
牧本は、この７枚のスライドは、深見のよろいが描いたものだと思った。これでは、シンセン食品の営業は説明できない。説明されたお店も、説得に応じられない。牧本も、これはまずいと思った。
牧本は、ガリバーのいる新製品の、東北と北海道の、お店への説明会を、深見に応援してもらった。スライドは、牧本が使っているスライドをコピーしたものだ。しかし、説明会は、深見のよろいの説明になったのだと思った。深見にとっては、自分のよろいが傷つかないようにすることが、１番大事なのだ。牧本は、だんだんわかってきた。
「わたしにどうしろとおっしゃるんですか？」
「このままではみんなに迷惑がかかります」

「深見くんと対決ですか？」
「牧本さんのスライドを営業に渡してくれと言ったら対決になるでしょ？」
「長下さんだって限度だから」
牧本は、電話した。深見が危ない。

牧本は、遅いお昼を、いつものミナミの居酒屋で、深見と食べた。
もう、お客は少なくなっている。
「みんな知りたいのはさ〜３つ追加するけど〜そのベネフィットだよ」
「深見くんがどう思うとか〜どうでもいいんよ」
深見は、牧本が、どうしてこういうことに口を出すのかわからなかった。関係ないのに。
「このままだとさ〜長下さんだって黙っていないよ」
「お店に入らへんのに」
深見は、口を出すなと何度も言う。
「８人しかいない同期だから言うんよ」
「深見くんがどうでもよかったら無視するんよ」
１時間も行き違っている話を続けて、深見が言った。
「牧本のスライドもあるから、好きな方を使ってくれでいいか」
「牧本のスライドとか余計なこといらん」
「２つスライドあるからでいいのか」
16時になって、やっと牧本は、先里研究室に帰ってきた。
先里は、心配そうに、牧本をチラッと見た。
「深見さんからメールが来ています」
牧本は、メールを立ち上げた。２つのスライドをつくったので、説明しやすい方を使ってくれだった。
「深見くん〜よろい脱がないかもしれん」
独り言にように牧本が言ったことばを、先里は、じっと聞いていた。

牧本は、先里の言っているよろいが、自分の中で鮮明になってきていると思った。それは、真鍋や網野を通してだ。そして、今は、深見を通して、よろいが鮮明になってきている。そして、牧本自身のことも、はっきりしてき

た。
牧本は、シンセン食品に入社して３年が過ぎるまで、ずっとよろいを着てきた。次々によろいを厚くしていった。小さい頃からである。今は、はっきり言える。それが、すべてよろいだったと。大学院時代は、牧本のよろいがことばを発していた。どこまでが牧本で、どっからが牧本のよろいであるのかさえ、はっきりしなかった。次第に、牧本がいなくなってきたのだろう。今は、そう思える。
長下に、自分の研究にいちゃもんをつけられて、怒って、言ってはいけないことを言ってしまった。今は、恥ずかしい。先里が言う「お客さんのいない研究をやってはいけない」も、すごくよくわかる。牧本は、お客さんの概念がなかった。
今深見と対決する時、今の自分にはお客さんがあって、今の深見には、お客さんがいないのだと思えるようになった。深見は、自分のよろいしか見ていない。少し前の牧本を見ているようだ。
牧本もそうだが、人は、どうしてよろいを着るのだろう。考えなければならない。あかちゃんにはよろいはないから、よろいは着ていくものだ。

「深見さんのことを考え過ぎない方がいいです」
先里には、読まれている。しかし、深見と対決するように仕向けているのは、先里だ。
先里のよろいの考えを受け入れて、ラクに生きれるようになったのは、網野だろうと思う。一度は、生き残ることを諦めたのだ。今では考えられない。
「よろい脱ぐと何がいいですか？」
「よろいは愛を隠すから」
牧本は、先里の少ない言葉を、大きく受け止めることができるようになっていることを確信した。
網野には愛が蘇ったのだ。牧本自身にも。真鍋が最初に愛を蘇らせた。そして対決している深見には、愛が蘇っていないのだろう。深見は、愛も勉強してしまうようなところがある。

○有働のイリノイからのメール
９月28日３品追加した新製品は、牧本のスライドが活躍していた。牧本のスライドは、営業の身になって描かれていた。深見のスライドにように、深見をアピールするような感じではない。出荷日までの時間はなかったが、駆け込みで、出荷数が上がった。
17時過ぎになって、アメリカの有働からメールが入った。イリノイ州の農場からの写真が添付されていた。種蒔きが終わって、大豆が少し大きくなって青々としている。作業服になっている有働の顔には、自信が溢れていた。
ひょっとすると、有働は、大豆にこだわった仕事を、一生の仕事にするかもしれないと思った。牧本だけではなくて、７人の全員がそう思うだろう。会社の心棒は揺れるから、いつまで有働を自由にしてくれるかわからない。もし有働がシンセン食品に帰らなくても、しようがないと、牧本は思った。それほどに、明るい太陽の下の緑の写真がキレイだった。
有働をここまで決心させたのは何だろう。考えたいが、電車で考えよう。
牧本は、今日もミナミのオフィスに出向かなくてはならない。お化粧がメンドーだ。大阪に出ると、朝ごはんよりもお化粧が大事だ。有働のメールを見ながらお化粧をしていると、朝ごはんを食べる時間がない。コンビニで何かを買ってミナミのオフィスで食べることになる。

朝ごはんを食べないと、電車が苦しい。食パンを、焼かなくてもいいからお化粧しながら食べてくれば良かったと思った。元気が出ない。
有働をイリノイに行かせた弾きがねは何だったのか、考えようと思った。
バックを探った。チョコが２つあった。気づかれないように口に放り込んだ。そして、有働のことを考えた。
有働にアメリカ行きを決心させたのは、先里だ。
「売ればいいというもんではない」
多分、先里はこう言ったに違いない。短い言葉だったに違いない。このままほっておけば、せっかく大豆で大きな仕事ができてきているのに、またゼロになるだろう。何もノウハウがないのだから。大豆が、どのように栽培されているのかさえ知らない。ただ粉だけ買っている。誰が考えても、先行きに

不安がある。その不安を、会社に持っていくか、自分に持って行くかの違いだろう。有働は、結局、自分に持って行った。会社は、コンクリートと配線でしかないという先里のことばが効いたのだろう。
有働は、どこでよろいを脱げたのだろうか。それも、今年に入ってからに違いない。新入社員の３年間は、実績を上げる罠にはまっていた。隅安芸が探してきた仕事を、盗んだわけではないが、引き継いだ。自分の中では引き継いだが、隅安芸は盗まれたと思っただろう。
盗んだ盗まれたでは、よろいを脱ぐどころではない。
明らかに、先里との接点だ。先里に出会わなければ、よろいなどには気がつかない。よろいを脱ごうなどとは思わない。しかし、有働と先里は、会っていないのではないかと思う。牧本は、先里と有働が会っているのを知らない。隅安芸が、話を仲介したのだと思う。
また有働からケータイにメールがきた。この時間だと、イリノイは夜中だろうに。
「さもんとしろうの『よろい』を電子出版の書店からダウンロードして読め」
同期の７人全員に来ていた。牧本は、よろいということばに反応した。牧本は、自分を救ってくれたのは、よろいの考えだと思っている。先里のよろいの考えだ。人は、すべて、よろいで人の品定めをするという考えだ。だからよろいを厚くしようとする。しかし、よろいは、愛を隠す。よろいは、人を愛から遠ざける罠だ。そう思ってきた。最近の牧本だ。しかし、有働は、さもんとしろう『よろい』を読めと言っている。どういうことだろうか。

牧本は、今日も忙しかった。三条が仕掛けた、ビタミンミネラルの社内勉強会だった。全国から集めた担当営業に、９時から15時まで話をした。シンセン食品の社員が、ビタミンミネラルに強くならなければ、結局は、このガリバーのいる新製品は、ながくは望めないという先里の考えからはじめたものだ。こういう試みは、シンセン食品はじまって以来のことらしい。牧本にとっては、どういうことでもない。先里が忙しいから、自分が代わりに話しているだけだ。先里は、忙しいのでお願いしますと言うが、牧本には、ヒマのように見える。

16時ごろ、深見の島を覗いてみた。白板に、目標配荷物数と実績のグラフが書いてあった。今日９月28日だけで、一挙に目標に近づいている。それでもまだ70％くらいか。深見は、走り回っているのだろう。姿が見えなかった。

〇さもんとしろう『よろい』

牧本は、先里に電話をして、研究所には寄らないと言った。さもんとしろう『よろい』のことが気になっていた。ミナミのオフィスも早く出た。
牧本は、着替えもせずに、炊飯器だけを働かせて、電子出版のサイトを探った。

炊飯器がごはんの炊き上がりを知らせている。
冷蔵庫を探っておかずを調べた。牧本は、何も考えずにごはんを炊いた。つくり置きのギョーザを取り出して、フライパンを取り出した。味噌汁はインスタントにしよう。キュウリだけは切ってラッキョウの漬け汁で食べよう。
フライパンでギョーザを蒸している時間に、牧本は、やっと着替えた。この暑さである。着替えるといっても、ハダカに近い。
アッという間にごはんができる。さもんとしろう『よろい』を必死に読んでいた。とにかく、晩ごはんを食べようと思った。

牧本は、先里に電話をした。さもんとしろうは先里ではないかと思ったからだ。言っていることが同じなのだ。これが同一人物でなかったら、どちらかが、ことばを盗んでいる。
「有働さんにはメールで知らせました」
先里は、有働と会っていない。有働のメールの返事に、さもんとしろう『よろい』を知らせたのだと言った。
「遅くにすみません」
牧本は、先里は、不思議の国の人にしか見えない。誰も、先里が、さもんとしろうだと知らない。知れば、ダウンロードして読むかもしれない。本が売れればいいだろうに。
牧本は、真鍋と網野と隅安芸と秋元と美濃と深見にメールをした。

「さもんとしろうは、先里一郎だった」
牧本が、真鍋や先里から聞いていないことが、さもんとしろう『よろい』には書かれてあった。よろいと権力の関係もおもしろかった。やはり、権力の考えがなければ、よろいを厚くしようとは思わないのかもしれない。一般的に、権力の志向は、オトコに強くてオンナには弱い。したがって、よろいを脱げるのも、女性が多いと書いてあった。よろいを着ることでは、オンナが早い。夢など追わないでよろいを追いかける事がある。現実的である。しかし、よろいが覚めるのも早いらしい。現に、真鍋も網野も牧本も、同期８人のうちの３人の女性が、よろいを脱いでいる。真鍋が１番早かった。牧本も、今では、よろいの考えが、手に取るようにわかる。
有働は、さもんとしろう『よろい』を、必死に読んだに違いない。
イリノイに行ったのはいいが、英語も話せないだろう。何十年も英語を勉強しながら、こういう時に何も役に立たない。よろいがあったら、わからないことも聞けない。バカにされてもいいから自分でことばを発しないとダメだ。大豆がどうとか以前の問題がある。よろいを脱がないことには、大豆どころではなくなる。
牧本の経験では、よろいさえなくしてしまえば、何事も簡単である。知らないことは知らない。教えてほしいことがあれば聞ける。謝らないといけないことは謝ればよい。
牧本は、有働が、大豆を愛せるのかどうかだと思った。牧本は、よろいが外れて、オンナを愛しているのではないかと思うようになってきている。
オンナはビタミンとミネラルだと思うと、身体が動いてしまう。
先里が言っていたが、よろいが外れると、愛が浮かび上がってくる。愛は、人が動く押しボタンだと言っていた。先里が言っていた。牧本は、オンナが浮かび上がってきた。

遅くなって、真鍋から電話があった。網野からはメールがあった。
２人とも、さもんとしろう『よろい』を必死になって読んでいたようである。
「なんで先里さんはさ〜これ読めとか言わんのやろう」
「いいけどさ〜ことばの方がわかりやすいから」

牧本は、深見のことが気になっていた。多分、深見は、牧本のメールを、そのままにしてあるだろう。さもんとしろう『よろい』を読まないだろう。なぜだか、そう思った。深見は、よろいが好きなのだと思う。よろいの立派さを誇ることが好きだろう。
牧本は、深見のことを考えると、どうしていいかわからなくなる。

○秋元の上海からのメール

牧本は眠っている時に、上海の秋元からメールが入っていたらしい。牧本が、慌ただしく、化粧をしながらパソコンを開くと、秋元のメールがあった。有働に返事をしたものを、７人全員にＣＣしている。牧本に、さもんとしろう『よろい』のお礼を言っていた。
牧本は、ミナミへ出る朝は、朝ごはんが食べられない。化粧に時間がかかってしまう。インスタントのコーヒーだけを飲む。パンを焼こうと思えば焼けるのだが、コーヒーで済ませてしまう。
秋元のメールは長かった。
「中国といっても自分は上海の人しか知らないが、上海の人は、よろいが少ない。ダメなモノはダメ。いいものはいい。自分が、シンセン食品から来ていることで、ただそれだけのことで、何かしらの権威を持とうとしても、難しい。日本からたくさんの会社が来ているが、やはり、よろいの少ない人が中国に来ないと難しい。自分は、よろいでなんとかなると、甘く考えて上海に来た。この、さもんとしろう『よろい』を読んでみて、はじめて理解できた。よろいについては、これからの上海の人の方が難しいだろう。経済が発展して、よろいを着る人が多くなるだろうし、よろいを着ようと思えば着れる状況ができてきている。もし上海の人がよろいを着てしまえば、日本と同じように、辛い社会構造ができるだろう」
何度読み返してみても、秋元の、このメールは、難しいことを言っている。
牧本は、ケータイに転送して、電車の中で、読み返すことにした。結局、パンを食べる時間などなくなった。慌ててカギを締めて出た。

牧本は、電車の中で、秋元のメールを読み返してみた。どう考えてみても、

よろいをよくわかっている。秋元は、よろいを自分のものにできた。どうしてだろう。いろいろ考えるより、聞いてみようと思った。
電車から、秋元にメールをした。夜には、秋元からメールが来るだろう。
深見の机を見てみた。しばらく寝ていないのではないかと思えるくらいに、騒然としている。机が落ち着いていない。
「深見くん、平気？」
まだ初回出荷数が１００％確保されていないと言った。この髪と髭だと、外部の説明会には出かけていないのだろうと思った。
深見は、牧本の顔を見ない。昨日から、同期の間では、さもんとしろう『よろい』の話題で騒がしい。しかし、深見には、無縁のことだっただろうと思った。深見は、10月１日出荷の新製品が、初回出荷数に達しないことが、自分のよろいにかかわることなのだ。そのように、牧本には見える。牧本は、あまりのギャップの大きさに、ため息が出た。

やはり、秋元からのメールが、夜になって入ってきた。
「上海の人と接することができたことが、よろいがわかることになった。ダメ人間なのに、自分を否定するでもない自分を、上海の人は、かわいそうな人だと解釈した。３人の部下だった営業マンとは、今は仲間だが、毎日中国語を自分に教えている。やはり、営業だから、ことばがわからなければどうにもならない。新しいマネージャーも、自分のお客さんを、私に紹介する。私を外すようなことをしない。単に、日本のシンセン食品の会社から来ているということだけで、仕事ができると思ったのが大間違いだった。さもんとしろう『よろい』は、自分の、こんなことを、すべて説明してくれている。よろいがジャマなんだと言っている。上海の人はよろいが少ないと言っている。自分によろいを脱げと言っている。今は、毎日楽しい。新しいお客さんもどんどん増えている。よろいを脱ぐと、上海のお客さんが、よく見える」
牧本に返信されたものだが、ＣＣで同期全員に送られていた。

「どうもありがとう。ガンバってください」
牧本には、短い返事しかできなかった。そして考え込んでしまう。
網野にしても、隅安芸にしても、有働にしても、秋元にしても、入社して３

年間は、何事もなかった。そして、４年目になって、生きることに係る大きな出来事に直面した。牧本自身もだ。福岡に行った美濃もだ。みんな大きな出来事に直面して、よろいを知った。真鍋は、唯一、人生を左右するような大きいな出来事に遭遇していない。多分、シンセン食品に入社した時には、もうよろいを理解していたのではないと思う。真鍋は、先里の価値がわかっていた。自分がなんとかできない時は、先里のところへ引っ張って行った。牧本も、真鍋に連れられて、先里の机に向かった。

○福岡からの美濃のメール

９月30日だった。牧本は、今日もミナミへ出かけなくてはならない。先里は、依然と、何をやっているかわからない。ガリバーのいる新製品は、牧本に任せっきりである。
シャワーをして化粧に忙しい。
パソコンを開いてみた。
美濃からのメールが入っていた。オトコのメールは長いのだろうか。よくわからない。
「九州のオンナははじめてだが、さもんとしろう『よろい』に照らし合わせてみると、よろいが少ないように感じる。東京のオンナよりもはるかによろいが少ない。大阪のオンナも少ないが、大阪なりのよろいを着ている。福岡のオンナはよろいが少ないので、こっちがよろいを着ていなければ、コミュニケーションがうまくとれる。仕事の仕方が、まったく変った。福岡の女性たちに手伝ってもらって仕事をしている。福岡のオトコは、少しやっかいだ。九州はオトコ社会だっただろうから、独特のよろいを着ている。しかもシャイだ。よろいを着たうえにシャイだと、ほとんどしゃべらない。しかし、おかしなよろいではない。悪意のあるよろいではない。こうやって、いろいろなことが照らし合わせられるようになった。我ながら成長したものだと思う」
牧本は、化粧をしながら笑ってしまった。まさか、九州人のよろい分析が来るとは思わなかった。これはすごいことだと思った。先里もビックリだろう。

牧本は、今日も朝ごはんを食べずに、慌ててカギを締めて出た。

牧本がミナミのオフィスに着くと、隅安芸が待っていた。
今日は、２人で姫路のお店に説明会に行く予定である。
「深見が荒れているから近づくな」
チラッと深見の島を見た。誰もいない。
「目標に達しなかったの？」
「そうだ」
深見だけが何かおかしい。深見は、入社以来３年間、８人の同期のリーダー格だった。それがどうしたというのだろう。隅安芸にも、近づくなと言われてしまう。
隅安芸と牧本は、新幹線で姫路に向かった。
「隅安芸くんさ〜美濃くんのメール読んだ？」
隅安芸は、有働のメールも秋元のメールも美濃のメールも、ケータイに転送していた。
「みんな先里さんのおかげで大人になれたよ」
隅安芸が、このようなことを言うとは思わなかった。
「オレたち〜ずっと子どもだったんだよな」
「よろいが脱げないうちは子どもなの？」
「オレはそう思う」
隅安芸は、先里とは接触している。先里に、聞いたことがあるのかもしれない。もう、あまり隅安芸とよろいの話をする意味もないと思った。隅安芸も、何からなにまでわかっている。
牧本には、不思議である。今年の４月１日までは、ミナミの居酒屋に集まって「わたしやってられへんよ」と言っていた。牧本である。それが、たった半年で、こんなに変ってしまった。８人の同期全員である。それが、さもんとしろう『よろい』ではっきりした。ここ数日ではっきりした。１人を除いて。
「深見だよな〜問題は」
隅安芸は、いきなり、そう言った。
「深見が荒れているから近づくな」と隅安芸は言った。

「先里さんは〜わたしに深見くんと対決しろみたいなこと言うんだけどね」
「牧本の手には負えないよ」
「どういうとこ？」
「深見のヒエラルキー崇拝みたいなのは〜みんなスレ違うよ」
隅安芸は、深見は、社長になりたがってると言った。偉い人が好きなんだと言った。

牧本は、お店の説明会が終わって、聞いてみた。
「10月１日から３品が追加されて新製品が出ますけど」
意外なことに、お店は知らなかった。もちろん、隅安芸と牧本は、深見の新製品のパンフレットを持ってきていない。説明もできない。口頭でお知らせして、お店を出た。
「隅安芸くんさ〜なんでお店の人は知ってはらへんの？」
早く、営業の隅安芸に、深見の新製品について聞いてみたかった。
「営業が、自分で判断してしまうんだよ」
「お店に紹介しないの？」
深見の新製品は、すでに５品ある。そして３品を追加した。今回３品を追加すると、いままでのどれか３品が定番落ちになるのだと、隅安芸は説明した。営業は、説明に行かないこともあるそうだ。
「リスク大きいじゃない」
牧本は、深見が、リスクの少ないテーマを選択したと言っているのを聞いたことがある。今の隅安芸の説明では、リスクは大きい。
「マーケティングと現場の営業の違いだよ」
牧本は、なんとなく、深見の考えがわかるような気がしてきた。机の上での計算かもしれないと思った。

〇私の責任ではありません

10月４日になった。牧本は、午前中先里と話をしていて、午後に、芦屋のお店に説明会に伺うことになっていた。ミナミのオフィスに行った。牧本は、見てはいけないものを見てしまった。

「営業部が勝手に決めて説明しなかったところが40％もあるから、私の責任ではありません」
深見が、長下に、大きな声で話していた。怒っていた。
「最初から40％くらいは営業は動かないかもしれないことはわかっていたんだから」
「私はそういう計算はしませんでした」
牧本は、半年前、同じように、長下に、ピントのズレたことを言って、しかも、言ってはならないことを言ってしまった。恥ずかしい。今は恥ずかしい。しかし、深見は、まだピントがズレたままである。
このままでは、深見が危ない。長下は権力者なのだ。
電車の中で、牧本は隅安芸に聞いた。
「深見くん〜ホントに40％が動かないって〜計算しなかったのかな〜」
「ホントに計算しなかったと思う」
「深見にとっては、会社が決めたことを守るのは当然だと考えるから」
深見らしい考えなのだ。会社が決めたことは、みんな守らないといけない。５品あるが３品の追加を決めたのだから、これを紹介しない営業は、よくない営業なのだ。
「でもな〜５品あるからな〜お店に決めて持ってこいって言われちゃうよな〜」
「うちは５品しかスペース用意しない」
「フツウはそうなるんだよ」
「深見くんだって知ってるわけでしょ？」
「深見の考えでは〜５品が８品になったら売上が増えるという考えだから」
牧本は、今年の春までの牧本自身の考えのように、深見の考えは幼いと思った。
「困ったな〜」

深見の５品あって３品追加する新製品が苦戦するなか、三条と隅安芸と牧本の、ガリバーのいる新製品は、勢いを増していた。営業は、しばらくは様子を見ていた。コンセプトは大幅に違うとはいえ、ガリバーがいる。通常、シンセン食品は、こういうガリバーのいる商品と対抗することはあり得ない。

得意でもない。ダメそうだったら動かない。営業としての自分の実績もある。
しかし、やはり、牧本のお店への説明会が大きい。お店が徐々に動いてきた。東北と北海道以外は動いてきた。一旦動きはじめると、営業が、積極的に動く。だから、ガリバーのいる新製品は、勢いを増してきたのだ。もう１つ、営業にとってのメリットがある。それは、ガリバーのいる新製品が売れた場合、いままで、シンセン食品がやってない分野なので、完全に１００％売上増加につながることだ。営業にとって、リスクも大きいが、うまみもある。
隅安芸と牧本がミナミのオフィスに帰ると、三条が待っていた。まだ内緒だが、販売目標を設定しようとしている。このガリバーのいる新製品は、販売目標を慎重に設定しないといけない。社内全体が、ひょっとすると、ガリバーに叩き潰されるかもしれないと思っている。店別の販売目標が大きいと、躊躇してしまう。怯んでしまう。
「話があったお店を積み上げただけなんだけど」
三条はそう言って、エクセルの一覧表を、隅安芸と牧本に見せた。牧本は驚いた。このまま11月１日なったら、いきなりシンセン食品Ｎｏ１の商品になってしまう。しかも、東北と北海道がゼロに近い数字なのに。
三条は、ここのところ、ずっと営業部と打ち合わせばかりしている。お店への説明会は、隅安芸と牧本に任せている。
「隅安芸くんはどう思ってんの？」
「牧本の11月の店内説明会次第じゃないか？」
お店が、お客さま説明会を開催しようという雰囲気が出れば、そのまま走れるかもしれないという感触なのだ。

牧本は、深見のことが気になった。深見の島を見たが、誰もいなかった。どうなったのだろう。深見と長下はどうなったのだろう。
真鍋からアパートに来るように言われていた。晩ごはん一緒に食べることもあるが、網野の披露宴の準備をしないといけない。11月３日だ。もうすぐだ。
「深見くんさ〜長下さんとぶつかったんだって？」

真鍋は、いつも情報が早い。なんでも知っている。
「わたしの半年前と似てるんよ」
牧本は、真鍋のカレーがおいしいと思った。ダシをとっていた、ダシだろうか。
「何が似てるん」
「会社が決めたことをどうしてやらないのか」
牧本も、会社が決めた研究テーマに、どうして長下がいちゃもんをつけるのか、噛みついた。
「深見くんの会社の考えが幼いんよ」
真鍋は、ドイツの缶ビールを持って来た。おいしかった。今年は特に暑い。多分、ビールはたくさん売れているだろう。
「深見くんさ〜会社が決めたことはゼッタイだと思ってるから〜長下さんとぶつかるよね」
「おかしいね〜長下さんは会社なのに」
ホントにおかしいのだ。長下は権力者である。事実上の会社そのものなのだが、何かが深見と違う。
「深見くん〜わたしみたいに危ないのかな〜」
「マーケティング人材不足してるから」
牧本は、真鍋のことばに驚いてしまった。

〇深見の人事異動

10月12日、牧本は、仙台にいた。ガリバーのいる新製品の、東北と北海道を巻き返そうと思った。三条は、半分諦めている。このガリバーのいる新製品は、都会のオンナが対象である。東北と北海道を諦めても、なんとか数字はつくれる。
「人間って、売れない地域があると、そこを見習うものです。逆もあるけど」
先里が、ボソっと言ったことばに引っかかった。牧本は、隅安芸に頼んで、４日だけ、東北北海道を歩くことにした。
牧本は、朝から４つのお店の説明会をやることになっている。

「深見の人事異動があった」
隅安芸が、９時の最初の説明会の前に、牧本に言った。
「健康をテーマにしたマーケティング研究会への出向になってる」
牧本は、意味がわからないが、現在の仕事から外されたことは確からしい。
しかし、真鍋の言った「マーケティング人材不足だから」も、わかるような気がした。
牧本は、深見どころではなかった。今日は、仙台で、４つのお店の説明会をやる。いずれも、ガリバーのいる新製品を導入してもらっていない。仙台の営業は、全員参加して、お店の説得に努めている。

牧本は、もう夜になって、盛岡に動いた。クタクタだった。隅安芸も疲れていた。真鍋から電話があって、深見の人事異動のことを知らせて来た。網野の披露宴の準備で堺に行ってきたと言った。
「ゴメン〜わたし忙しくしてしまった」
隅安芸と、ホテルの近くの居酒屋で、ごはんを食べていた。もう、盛岡は寒い。
「深見くん〜どうなのかな〜」
お互いに、同期の深見が気になっている。以前だったら、深見を励ます会をやっている。深見に、集めてくれとメールした。深見が、幹事ではないのに、幹事っぽく全員にメールを出した。
「オレも〜辛くて深見に相談したけど〜深見は誰にも相談しないだろうな」
「なんで？」
「同期でも、深見は、他の７人と自分とは違うと考えてる」
年齢が高いこともある。大学院で博士である。自分は特別な存在だと思っていると、隅安芸は言った。牧本は、気がつかなかった。いつも、みんなのために何かをした。網野のピンチの時だって、真鍋と一緒に東京に行った。同期ということだけで、そこまでやる人はいない。
深見にもピンチはたくさんあったはずなのだが、同期のみんなを頼ったことはない。
「オレたちはたいしたよろいじゃないから簡単に脱げるけど、深見のよろいは立派だから、簡単には脱げないよ」

隅安芸は、深見をよく見ていると思った。最近、見えてきたのかもしれない。
「隅安芸くんさ〜わたしはどう思ってるの？」
「深見と似てるんだけど〜よくよろい脱げたよな」
「あの人事異動が大きかった。叩き潰されたから」
牧本は、隅安芸をじっと見ていた。自分自身を考えてみても、深見の態度は、自分の半年前の態度なのだ。
「隅安芸くんさ〜わたしのことずっとそうやって見てたの？」
「ここ１カ月くらいだけど」
やはり、隅安芸も、今急速に変っているのだ。同期のみんながそうなのだ。真鍋と深見を除いて、大きく人が変わった。
みんな、先里のよろいの考えに影響されている。牧本も、よろいを脱ぐことができれば、ラクに生きられると信じているし、そのように努力している。
「深見くん〜どうしてるかな〜」
牧本は、深見がミナミのオフィスからいなくなるのではないかと思った。長下にとっては、深見の顔も見たくないはずである。
「ショックだろうな〜」
隅安芸は、深見の気持になろうとしていた。

〇深見のメール

牧本は、旭川から札幌に帰って、夕方の札幌で説明会を行った。９月15日である。今日で、４日連続の、東北北海道の巻き返しの旅が終わる。成果はあったと、札幌の営業所のみんなは言ってくれている。昨日は、夕食会をみんなでやってくれた。
そして、今は、羽田に向かっている。ホントに疲れた。隅安芸も疲れた。
「隅安芸くんさ〜ガリバーの会社の人から質問あった？」
前回は、深見が、何度も、ガリバーの会社の社員から質問をされた。しかし、今回は、牧本には、意図的な質問があったようには思えない。４日間ゼンブである。
「おかしな質問はなかった」

「なんで？」
「ようわからん」
少しずつ、ガリバーのいる新製品の状況も変っているような気がしていた。

牧本がアパートに着いたのは、夜中だった。明日は土曜日である。休もうと思っている。三条は、休みどころではないだろう。
三条からメールが来ていた。
「おつかれさま、ガリバーのいる新製品は、どんどん数字を伸ばしています。明日と明後日は、ゆっくりしてください。11月は、また１日も休みがなくなります」
三条は、上司ではないのだが、牧本が、このようなメールをもらって、どんなにうれしくなるか、よくわかっている」
三条のメールを読んでいる時に、深見からメールが入った。どうしてオトコのメールは長いのだろうか。
「大阪にいたくないこともあって、早めに東京の研究会の宿舎に来ている。宿舎といっても、ホテルではないので、何もない。ベッドがあって、共通のリビングがあるようなもんだ。共同生活をすることになる。ずいぶん高いだろうが、よく金を出してくれたと思う。今日初日のミーティングがあった。各自の経験を話して、自己紹介のようなミーティングになった」
こんなことを同期の全員に知らせてどうするのだろうと、牧本は思った。深見は、どうしたいのか。
「みんなの話を聞いていたら、自分には、まだマーケティングのスキルが足りないのだと思った。１年の研究会を通じて、ヒット商品を数多く出せるような技を身に着けるつもりだ」
牧本は、このメールを見て、今年の３月までだったら、「深見くんガンバって、深見くんだったらできると思うから」、こんな返信をしただろうと思った。コトは、そう簡単ではない。深見が、簡単ではない。
このメールは、すべて、深見のよろいが発している。悔しさを隠して、なんとかよろいを維持しようとして、研究会の立派さを知らせてきている。自分のやるべきことの、重さを知らせてきている。カタチづくっている。コトは、そういう問題ではない。長下は、深見を外したかったのだ。そうかと

いって、戦力外にはしたくなった。複雑な人事なのだ。牧本には、手にとるように、深見の人事が理解できた。
それなのに、深見は、自分のよろいを大事にする。今回の人事を、自分のよろいが傷つかないように、正当化しようとしている。
牧本が、今年、長下に研究テーマのことでいちゃもんをつけられて、言ってはいけないことを長下に言って、総務の飛行機の予約の係に移動させられた。牧本は、それを正当化しようとは思わなかった。しかし、空白で、何もする元気がなくなった。真鍋は、牧本を、先里のところへ引っ張って行った。
「たいしたよろいじゃないのによろいを守ろうとするからケンカになる」
先里に言われてカチンときたが、次の日も、真鍋に引っ張られた。
「牧本さんはどうして研究したいんですか？」
先里のように聞かれたことがない。
「お客さんのいない研究をしてはいけない」
長下が言ったのは、このことだ。
しばらくして、牧本は、長下に電話をした。謝った。お客さんのいない研究はしませんと言った。
そして、牧本は、先里研究室に異動になった。ちょうど、ガリバーのいる新製品で勝負を仕掛けようと、長下は考えていた時だ。牧本は、そのシナリオの登場人物になった。
何度か先里と話して、毎日のように真鍋と話していて、牧本は、よろいを脱いだ。不思議と、人が、よく読めるようになった。この深見のメールが、どのような背景で出されているのか、手に取るようにわかる。これは、明らかに、深見のよろいが、発信している。「自分のよろいは傷ついていない」と言っている。
牧本は、このようなメールを出さなかった。出す元気もなかった。０時になって、うどんをつくった、お腹が空いて眠られないと思った。
「まだ起きてんの？」
真鍋から電話があった。深見のことに違いない。
「深見くんさ〜前から本音言わんかった？」
「こんなふうにキレイゴト並べたら〜ずっとよろい見えないよ」

「深見くん〜よろい脱げないかもしれんよ」
牧本と真鍋の会話には、２人だけが通じるものがある。よろいの話をする時は、あまり多くのことばを必要としない。
「このままほっとけないけど」
「なべちゃん〜わたしがピンチの時に、先里さんのとこに引っ張って行ったけど」
「深見くんにはできないよ」
「どうして？」
「あまりにもよろいが厚いんよ」
牧本も、おなじだと思った。深見のよろいは、あまりにも厚いのだ。今日のメールのようにである。
「深見くんはさ〜まだよろいの厚さが足りないって思ってるかもしれん」
牧本は、間違いはないと思った。
「オトコはさ〜みんな同じだよね」
「わたしたちも同じだよ〜よろい厚い」
「ただささ〜オトコは気がつかへん」
しかし、隅安芸も秋元も有働も美濃も、４人は気がついた。オトコなのに気がついた。
「じゃ〜深見くんが特別なのか」
真鍋は、もう返事に困ってきたようだった。
「どうする？」
「深見くん〜もう東京行ったから先里さんに会わせられないし〜さもんとしろう『よろい』を読んだ？くらいしかできないかな」
「じゃ〜わたしもさもんとしろう『よろい』を読んだ？でいこう」
牧本と真鍋は、同じ作戦で、深見によろいをわかってもらおうとした。確かに、それくらいしかやることがない。

○よろいの価値観

10月17日日曜だった。真鍋と牧本と網野は、堺の結婚式場で待ち合わせをした。

「有働くんはイリノイから一時帰国するんだって」
「どうせ帰るんだったらって〜網野の披露宴に合わせたんよ」
牧本が確認している。
「秋元くんも上海だから来るって」
「美濃くんも福岡から」
「隅安芸くんはいいんだけど〜深見くんがはっきりせえへん」
深見は、11月３日に、研究会で日光へ行くことになっていたらしい。夜に日光でプレゼンテーションの大会があって、どうしても、それに出たいらしい。
「いいわよ〜深見くん〜東京でタイヘンだし」
「そうじゃないんよ〜それがよくないんよ」
「深見くん〜研究会の中でトップの成績になろうとしてるんよ」
「ずっとそうやってきたんだろうね」
「研究会でもトップの成績になるんだろうけど〜深見くん〜なにも変らん」
真鍋も牧本も網野も、ため息が出てしまう。やはり、８人しかいない同期なのだ。１人だけ、優秀なのだが、何かがおかしい。ほってはおけない。
披露宴の担当者に呼ばれて、事務的な相談になった。話は、それっきりになってしまった。今日現在では、招待者ではっきりしないのは、深見だけである。多分、欠席である。

堺から帰りの電車の中で、真鍋と牧本は、深見の話をしていた。
「深見くんのよろいの何がいけないのかな〜」
「よろいはみんなダメなんよ〜深見くん〜自分しか見えてないのがダメなんよ」
「お客さんが見えないこと？あんたが先里さんから言われたけど」
「よろいの価値観なんよ〜いけないのは」
牧本は、真鍋とよろいについての議論ができる自分に満足していた。話ながら、満足していた。たった数カ月前までは、真鍋に連れられて、イヤイヤ先里の机に行っていたのに。
牧本は、自分で言って考えてしまった。
「よろいの価値観ってなに？」

真鍋に言われそうだった。
「よく考えてみたらさ〜深見くん〜わたしたち８人のトップだけど〜いつもトップがなんか言ってたんよ〜深見くんじゃなくて」
「学校でもそうだったんよ〜いつもいつも」
「会社でもそうだと思ったんだろうけど〜会社は違うから」
「お客さんがいるからさ〜」
牧本は、自分なりに、よろいの価値観を、うまく説明できたかもしれないと思った。
「じゃ〜わたしたちは〜本当の深見くんを知らないんだ」
「うん」
牧本と真鍋は、黙ってしまった。

「自分は今大事な時期で、日光の夜のプレゼンテーションを外したら、トップになれないかもしれない」
今日、真鍋と網野と会ったと伝えたら、とんでもない返事が、すぐに来た。有働だってイリノイで苦労している。どこが違うのだろう。有働は、イリノイで、大豆の研究をして、ノウハウを身に着けたいのだろうが、それを、売り物にしてのし上がりたいわけではない。有働が大豆を研究したかったのは何だろうか。のし上がりたいわけではなかったら何なのか。愛か。有働は、大豆を愛してしまったのか。シンセン食品をも愛してしまったのかもしれない。シンセン食品の大豆の事業を愛してしまったのかもしれない。
深見は何なのか。
網野の披露宴より、研究会でトップになることが、深見にとっては、重要なのだ。それは間違いない。しかも、それはみんな、わかってくれるだろう？みんなの願いでもあるだろう？と言っている。
バッカじゃないかと牧本は思った。どこかがおかしい。自分のよろいが、何かを解決させてくれると勘違いしている。みんなが自分のよろいに期待していると勘違いしている。網野の披露宴より、自分が研究会でトップになることが、みんなの望みだろう？と言っている。自分だったらトップになれるけど、なのだ。
確かに、シンセン食品に入社以来３年間は、こういう深見の姿勢に憧れに近

いものを持っていた。これは牧本だけではなくて、７人全員である。自分にはできないけれど、深見だったらできる。研究会でトップの成績になることは、深見だったらできる。
しかし、今の牧本には、「それがなんなの？」になってしまう。そんなことに、どういう価値があるのか。研究会でトップになることに、どういう価値があるのか、わからなくなった。少なくとも、牧本だったら、日光に行かなくて、網野の披露宴に帰ってくる。

〇深見が気になる
ガリバーのいる新製品が、タイヘンなことになっていた。シンセン食品はじまって以来の新製品の出荷数になるらしい。牧本にはよくわからない。昨日は、鹿児島に飛んだ。お店の説得に、営業だけでは難しい。毎日毎日出荷数が増えていった。もう、今日で連続７日間、説明に飛び回っている。11月になったら、お店での、お客さま説明会がはじまる。１日も休みを用意していない。
「身体に気をつけてください」
先里は、牧本の顔見れば、こう言う。
「深見さんはどうしてますか？」
今日の朝は、先里は、深見のことを聞いた。牧本も、よくわからない。深見から何もメールがない。網野の披露宴も、はっきりと断ってきてないのだが、欠席にしておいた。
いつも気になる網野の披露宴は、真鍋が仕切っている。牧本は受付である。
「ゼンブできてるから安心して」
「あいさつと幸せソングはやっておいてよ？」
真鍋から何度も言われる。

「深見さんは元気ですか？」
10時になって、先里が、また深見のことを聞いた。
牧本は、11月に連続１カ月行うことになっている、お店の、お客さま説明会のシナリオを考えていた。

「元気だと思うんだけど何も連絡がありません」
話はそれだけだった。そして、牧本は、必死になってお客さま説明会のことを考えた。
三条が、最近いつも言っている。これだけお店に入れると、お店での店頭回転率が心配だ。お客さまに買っていただけないと、店頭回転率が下がる。お店だって、売れない商品を、ながく店頭に並べることはできない。11月の牧本の店頭説明会に期待がかかる。牧本も隅安芸も、店頭説明会だと思っている。シンセン食品には、テレビコマーシャルを流すようなチカラはない。
10月30日だった。三条から営業に、初回出荷を２倍にしたが、次の初回導入は、12月１日にするという連絡メールが、全社に流された。区切りをつけないと、生産が間に合わないのだ。どんどん数字が上がってしまう。11月１日初回導入のお店は、これで打ち切るという連絡である。さみだれ式にお店を増やさないで、次は、12月１日なるという連絡である。
「いいタイミングです」
先里が言った。
牧本は、最近、こんなにながく先里の顔を見るのは、はじめてである。12時近くになった。
「深見さんが帰って来ることはないのですか？」
先里から深見のことを聞かれたのは、今日はこれで３度目である。
11月３日の網野の披露宴のことは、先里には知らせていない。
「何も聞いていません」

牧本は、真鍋とお昼ごはんを食べるのは、久しぶりである。
「わたし弁当つくって行くから」昨日の夜メールがあった。
食堂の隅のテーブルに、真鍋が待っていた。
「電話してくれた？」
牧本は、先里に３度も聞かれた。真鍋にケータイメールをしていた。
「留守番にしておいたけど」
深見からメールが来なくなった。深見からだけではなくて、有働も秋元も美濃も連絡はないのだが、なぜだか、深見の連絡がないことだけが気にかかる。先里にも、３度も聞かれた。

「このごはんおいしいと思うんよ」
運動会のお弁当のように、真鍋は、たくさん持ってきていた。これは昨日の晩の残りだけど。
真鍋は、いい奥さんになれると、牧本は、思っている。料理もおいしい。なによりも、人を気遣う。牧本も網野も、真鍋がいなかったら、どうなっていたのか、わからない。
「深見くん〜ピンチでしょ？」
牧本は、誰かがピンチになると、必ず手を出してくる真鍋が、今回の深見のピンチには、何も手を出さないのが不思議だった」
「わたし〜深見くんに何したらいいのか〜わからん」
真鍋は、手を焼いている病気の患者の治療に困っている医者のような言い方をした。
「あんたとかゆみことか〜わたしもうダメって言うけど〜深見くん〜言いそうもないもん」
「本音出さないって言うの？」
「よろい厚いからね」
「ホントに〜何したらいいかわかんないよね」
真鍋のやり方は、先里に近づけることだ。牧本も、真鍋に引っ張られて、先里の机に行った。先里は、不思議の国の住人であると思った。フツウとは違う。１番の違いは、今はわかる。先里にはよろいがない。ふんどし１つで生きている。真鍋や牧本には、それがよくわかるが、フツウの人は、それが、不思議の国の住人に見えるだろうと思う。
深見から先里を見れば「なんだこの人は」になってしまうのだろう。コミュニケーションがとれない。深見のよろいを、自分で気づかせるチャンスがないのだ。
「先里さんはさ〜なんで深見くんのことを何度もあんたに聞くの？」
「わからん」
話は、それだけで終わってしまう。今晩、幸せソングを２人でデュエットしなければならない。一緒にカラオケのお店に行く約束をした。もうすぐ、披露宴である。

○11月連続のお客さま説明会がはじまる

シンセン食品のガリバーのいる新製品の出荷がはじまった。牧本の最初のお店でのお客さま説明会は、千葉からはじまった。今日は、３回の、説明会を行う。明日も千葉である。そして、11月３日は、午前中だけ堺のお店で１回、午後は網野の披露宴にしてある。

営業が、牧本の最初の説明会に選ぶお店だけあって、シンセン食品のガリバーのいる新製品が、大量陳列されている。隅安芸や三条が見たら感動するだろうと思うくらいの陳列である。牧本は、お店に入って、オープンの10時から、お客さんに説明をしている。派遣店員になっている。おもしろいことに、ガリバーとどこが違うのかなどという質問が何もない。試食分のサンプルをたくさん持ってきている。

11時になって、１回目の説明会がはじまった。はじまったというより、お店の隅に、20くらいの椅子を置いただけの会場である。

「オンナはビタミンミネラルが少なくなったら生きていかれへん話しします」

15分以上話さないように、店長に言われている。経験から、お客さんは、15分以上お店に足留めされることを好まないらしい。牧本も、最近は、よく承知している。牧本の１人漫才になる。テンポの良い１人漫才になる。

20人の方が、途中退席することもなく話を聞いてくれて、５名の方が、シンセン食品のガリバーのいる新製品を、買物カゴに入れてくれた。初回からヒットが打てた。

シンセン食品の東京の営業マンは、自分が商品説明をしているので、食事をしてきてくれと言った。お店の中にフードショップもある。三条から電話があった。反応を知りたかったらしい。初回からヒットが打てたと話した。隅安芸からも電話があった。２人は別々らしい。商談をしているらしい。12月１日導入のお店への説明会だと言った。

こうなっていたのだ。

「牧本さん、11月は１日も休みがないから、詰めないようにお願いします。倒れたらタイヘンだから」

三条らしい。イタリアっぽいファーストフード店だった。甘くしたコーヒー

がおいしかった。

３回目の説明会は４時ごろ終わった。うれしかったことがある。立って話をきいてくれた方もいて、30人くらいになった。そして、終わった時、みなさん、シンセン食品のガリバーのいる新製品を買物カゴに入れてくれたのだ。こうなるとは思わなかった。お店の担当の方も驚いていた。
「牧本さんが、ガリバーのいる新製品の商品説明係ではなくて、開発者として、よろいなく話せたら、お客さまは、キチンと受けてくれます」
先里が言っていたことばを思い出した。先里は、ことばは少ないし難しい。しかし、今、はっきりわかった。
「私の代理だから」
今は、牧本は、先里の代理で、研究開発者として、ガリバーのいる新製品の説明をしている。自信に溢れていると、自分でも思う。
先里に電話をした。
「お客さまは、わたしが開発したように思うかもしれないけど、そうするしかないから」
「それでいいです」
「３回目の夕方の説明会では、30人くらいいて、みなさん買っていただきました」
牧本は、うれしかった。
「明日も千葉だし忙しいから早くホテルへ帰って休んでください」
牧本は、もっと話していたかったが、ホテルへ帰ってシャワーをしたくなった。
牧本は、次第に、いろいろなことがわかってきている。よろいのことも。

東京の営業マンに、ホテルまで送ってもらった。丁寧にお礼を言われた。
「晩ごはん１人でいいですか？」
「ゆっくりしたいから１人がいいです」
牧本は、考えたかった。
「明日も８時に迎えに来ます」
そう言って、東京の若い営業マンは、車で走り去った。東京支店に帰ったの

だろう。
牧本は、ゆっくりシャワーをして、ゆっくり、ホテルのレストランで晩ごはんを食べた。ゆっくりしたかった。何かしら、うれしい。ハシャイでしまう自分を抑えられない。
牧本にとって、はじめての達成感のようなものだった。いままでの、試験で合格したような達成感ではない。生きる道しるべが１つできたような達成感なのだ。新しい道を切り拓く方法の１つが見つかった気がした。
ゆっくり歩いて、部屋に帰った。
「やった〜！」
牧本は、ずっと、こう言いたかった。抑えていた。多分、明日からも、うまくやれる。必ずうまくやれる。
今まで、何度もお店の担当の方への説明会をやってきている。しかし、今日のような達成感を感じたことはなかった。なぜだろう。
「商品はお客さまあってのものだから」
先里が言っていた。シンセン食品の中で、ゴチャゴチャ言い合っても仕方がない。お店と言い合ってもどうにもならない。やっぱり、商品はお客さまのものだ。
先里のことばはわかりずらい。あとで、いろいろわかってくる。
明日の紙芝居の用意をした。
多分、よろいを脱いだご褒美だと思った。

〇**11**月３日網野の結婚式
牧本は、堺の披露宴の会場に、着替えなども頼んだ。昨日は夜中に千葉から帰ってきた。今日は、早くから堺へ行く。披露宴で着るドレスっぽい洋服も持っている。シューズもである。一方で、紙芝居も持っているので、行商のおばさんっぽくなる。大荷物である。
あんまり眠っていない。朝ごはんも食べていない。オンナは朝ごはんより化粧だと言うが、そうだ。駅で、朝ごはんの代わりになるようなものを買って、電車に座って、ほうばった。最近は、化粧まで電車でやっているオンナが多い。せめて、朝ごはんにすべきだと思う。

真鍋から電話だ。
「あんた12時だからね？遅れないでよ？キレイになれないよ？遅れたら」
もう何度も聞いている。牧本の説明会のお店と披露宴の会場は、車で10分で行ける。問題はない。お店では、時間を引き延ばせない。
ミナミの営業が堺の駅で待っていた。牧本の荷物を見て驚いた。
「お店の隣にカフェあるからごはんしましょう」
９時20分に来てくれだったが、朝ごはんの時間だったのかと思った。そう言ってくれれば、ムリして電車の中で、ほうばることもなかった。そういえば、お店は、常に20分前に入ってくれと言う。あんまり早くても困るし、遅くても準備ができない。20分が適切な時間なのだ。

牧本は、店長を探した。お礼を言わなければならない。
ミナミの若い営業マンは、車を、前に回してくれている。やっと、倉庫にいた店長を見つけてお礼を言った。
「今日だけでもう40売れました。どうもありがとう」
なぜ店長が、そこまで知っているのか不思議だった。すごいことになっていることは確からしい。
牧本は、そんなことより、急がなければならない。
牧本が式場に着いたのは、11時50分だった。急いで、美容室へ向かった。
14時結婚式である。
「牧本〜すごい忙しいんだって？」
有働が、シンセン食品の仲間では、最初に現れた。
「ゆみこ〜うれしいんよ〜有働君がイリノイから来てくれて」
有働は、日焼けして真っ黒だった。外にいることが多いと言った。
「深見は来てないのか」
有働の話しぶりは大人びていた。
そこへ秋元が現れた。遠い人ほど早い。
「秋元くん〜ありがとう〜ゆみこ喜んでたよ」
「牧本も忙しいんだって？」
有働も秋元も、同じことを言う。
有働と秋元は、キチンとした服装だったこともあるが、大人びて見えた。

みんなと話したかったが、式がすぐにはじまった。
15時披露宴の受付開始だった。
真鍋と牧本は、２人で打ち合わせをした。
「ゆみこ〜つわりなんよ〜時間短くするから」
確かに、なんとなく、ふっくらしている。調子ワルそうではないが、気になる。
「わたしたちのあいさつと歌さ〜ゆみこいない時にしたから」
「２次会もわたしだから〜早くに切り上げるから」
「３次会〜７人とダンナさんだったんだけど〜ゆみこにいいって言ったから」
３次会は６人である。確かに、網野は妊娠初期だ。これは辛いだろう。

６人は、いつものミナミの居酒屋にいた。まだ９時だった。
「みんな立派になった」
居酒屋のおやじさんが言った。
お互いの顔を見合わせたが、誰１人、立派になったなどとは思っていない。
網野がさっき書いたという手紙を真鍋が読んだ。
「字が走ってるからみんなには見せんといてって言うから、読みます」
「有働くんイリノイからありがとう〜わたしも新しい人生見つけてるけど、有働くんも同じなんだと思う。大豆ハカセになってくれるといいけど。秋元くんも遠くからありがとう。上海の人はよろい少ないって聞いたから、秋元くんには住みやすいかもしれん。美濃くんも遠くからありがとう。福岡のオンナはしっかりしてそうやから、早くにいい人見つかるかもしれん。どこで披露宴やっても、わたし呼んでください。隅安芸くんありがとう。まきちゃんがわたしの披露宴のことで飛び回るの、仕事カバーしてもらって。忙しい時やけど身体気をつけて。まきちゃんありがとう。すっごい忙しい時期にいっぱいお願いして、まきちゃんがこんだけ頼りになるとは思わんかった。なべちゃんにはもう、何から何まで・・・・・」
「ここはええから」
「わたしが今日１番にお礼を言いたかったのは、深見くん。もしなべちゃんと深見くんが東京に来なかったら、わたし、今、ここにおらんと思う。また

今度、深見くんには、お礼言うから」
「追加なんやけど」
「今、８人の中で１番ピンチなのは深見くんやと思う。わたしからもお願い。でも、わたしは、どうしていいかわからん」
一瞬、６人とも言葉を失った。網野は、深見を気遣っている。自分の披露宴で深見を気遣っている。
シンセン食品に入社した８人の仲間の絆は、どういうわけか、ものすごく深いものになった。牧本は、多分、よろいのせいだと思った。７人に共通しているのは、全員よろいを脱いでいることだ。深見だけが、厚いよろいを着たままである。網野が、どうすればいいかわからんと言ったのは、牧本だって同じだ。深見に、どうすればよろいを伝えられるか、切り口がないのだ。
最終の電車まで、イリノイの若者の話を聞いていた。上海と北京の違いを聞いていた。博多オンナを聞いていた。隅安芸は、ガリバーのいる新製品がどこまでやれるか、賭けてみたいと言った。
話が尽きない。
「もう今日は閉める。次の予定決めておいた方がいいんじゃないか？」
居酒屋のおやじさんがうながした。
次の予定などない。
しかし、みんな、それぞれ、自分の道が見えている。網野もである。誰も、今年の３月までのように、迷ったヒツジのような状態ではない。みんな意思が強くなっている。牧本も、迷いは何もない。今は、先里を受け継ぐことだと思っている。何年もかかりそうだ。

〇選抜試験

11月23日だった。シンセン食品の選抜試験があった。級が上がる試験である。級が上がれば、給料も増える。仕事の内容も、上の仕事ができる。エラくなるステップの１つである。
休日だった。
網野の披露宴で会ったばかりだが、有働も、会社の費用でイリノイから帰ってきた。秋元も上海からだ。隅安芸も、美濃もいた。真鍋もである。もちろ

ん、牧本もいた。しかし、いるはずの深見がいなかった。
「深見くんどうしたん」
「わからへん」
牧本にも、理由などわかるわけがない。真鍋の方が、こういうことは詳しい。
「わたしも知らん」
試験の、ミナミの会場で、６人が不思議がっていた。成績がワルければ試験に参加できないことは、よくわかっていた。新入社員に、４年目にやってくる登竜門である。
牧本たちと一緒に選抜試験を受けるのは、牧本たちの１つ上の女性と、２つ上の男性だった。８人である。
牧本は、この選抜試験のために、なにか勉強したことはなかった。社内には、毎年、予想問題集が、アングラで出回る。将来の幹部候補になるかもしれないのだ。
牧本は、深見は、シンセン食品では、社長になりたいだろうと感じていた。そこは、牧本とは、大きくコンセプトが違っている。シンセン食品に勤めているコンセプトだ。
その深見が、もしここに来られない事情があるとすると、それは、タイヘンなことだ。しかし、牧本には、深見のことを、深く考える時間はなかった。
「面接もありますから、筆記が終わったらこちらへお願いします」
シンセン食品の人事の人ではない。外部のコンサルタントの会社なのだろうか。よくわからない。牧本は、８割はできたかなと思った。
「あなたがシンセン食品株式会社に貢献したと思われることがありましたら記してください」には、ガリバーのいる新製品のことを、細かく書いた。書きはじめて、おもしろくなって、時間ギリギリまで書いた。スペースがなくなって、裏に続けて書いた。
面接があった。
２人の面接者が、牧本の筆記の結果を持っていた。話は、ガリバーのいる新製品に集中した。牧本は、面接者と話ながら、何かしらの違和感を感じていた。面接者の２人は、共通して、牧本のよろいを調べている。ガリバーのいる新製品での牧本の体験が、どれだけ牧本のよろいをつくったのか、それを

測ろうとしていると感じた。
こういうことは、深見が得意である。深見だったら、この２人の面接者の望む結果を出すだろうと思った。牧本は、こういうことは得意ではない。最近、特に、不得手になったような気がする。

「牧本さんおつかれさまでした」
シンセン食品の人事の担当者が顔を見せた。終わりの時間である。
「深見くんがいないんだけど」
「人事考課の点数が足りなくて」
深見の事情ではなかった。長下と深見の関係のことだった。牧本も、人事考課の点数は良くないと思ったのだが、直近の上司は先里である。先里だと、多分、人事考課を改善してくれただろう。深見は辛いと思った。
また、６人でミナミの居酒屋に向かった。
「人事考課の点数が足りないって言ってた」
牧本が、さっきシンセン食品の人事の担当者に聞いた話をした。
「深見は〜こういうの１番大事にするからな〜心配だよ」
隅安芸が心配そうに言った。
「オレなんか〜もし通らなかったら〜それはそれでいいと思ってるからね」
有働が続けた。
「あの人達〜よろい調べてるような気がして感じ良くなかったな〜」
牧本も、そうだと言った。
「今日深見がいたら１番だよ」
隅安芸が言った。
会社って〜よろいを大事にするんだな〜」
美濃も言った。
「そのよろいを大事にする会社で〜深見が人事考課の点数が足りないって〜なんだろう」
「よろいの価値観とよろいのない価値観が混在してるんよ〜わたしたちは翻弄されてる」
真鍋が、ビシっとしたことを言った。
「よろいのない価値観ってなんだ？」

秋元が聞いた。
「愛じゃないか？先里さんは、そう言ってる」
「会社と愛は相性良くなさそう」
「愛ではメシは喰えないって〜よく言われる」
６人とも、もう大人になっている。シンセン食品が望むことを汲み取って、シンセン食品に望まれる人材になるといった、単純な会社生活ではなくなってきている。会社だって、自分が何を望んでいるのか、はっきり示せない。会社ではなくて、幹部だろうが。
大人びた話になっても、延々と続けられるところが、入社４年目なんだと、牧本は思った。それぞれ、自分の生きる道と、会社生活を、一緒に考えなければならなくなっているのだ。
「有働くんはさ〜今はどう思ってるの？」
真鍋が聞いた。
「今日通らなくてもなんともない。今は〜大豆をしっかり勉強したいし体験したいしやってる。ただ〜早く結果を出さないと、シンセン食品は、このまま勉強させてはくれないだろうけど」
「早く結果出すって〜どういうこと？」
真鍋が聞いた。
「先里さんのようになることじゃないか？大豆の先里さん」
先里は、どんなことでも、研究できるし商品を開発できるし、他者を説得できる。そこまでは、フツウはできない。大豆に関することだけでいいから、有働は、先里のようになりたいと思っているようだ。やはり、会社だから、大豆の、新製品を考えつかないといけないのだろう。
「１年しかないと思ってる」
「秋元くんは？」
「上海行って最近感じてるんだけど、多分、中国は世界１の経済大国になる。勢いが、日本とは違う。いまのままだと〜自分がシンセン食品の枠を飛び出すんじゃないかと思う。そうなったらそれでいいから、もっと、国際的な人になろうと思っている」
「美濃くんは？」
「まだ自分がどうするか、はっきりしていない。ただ、今日試験受けてみ

て、自分の中に、よろいの価値観が薄くなったと思った。多分だけど、ホントの営業力って何かよくわからない。シンセン食品で、それ追ってみてもおもしろいとは思う。サラリーマンの階段登れなくてもいいから」
「隅安芸くんは？」
「やっぱり〜今やっているガリバーのいる新製品がおもしろい。ひょっとすると、シンセン食品の歴史も塗り替えるかもしれない。これ終わったら、またフツウの大阪の営業に帰るけど、これからも、こういうおもしろいものをずっとやっていきたい」
「まきちゃんは？」
「わたしは〜先里さんにホレてるし〜それだけの価値があると思ってる。先里さんはお年だし〜誰かが継がないといけない。わたしが継ごうと思ってる。入社して３年間は、先里さんがどうしてシンセン食品にいるのか、ようわからんかった。今は〜先里さんがいるからシンセン食品が存在するくらいに思ってる」
「わたしは〜先里さんのよろいを見つけた時、これが自分の生きる道だと思った。それ以来、先里さんには、いろんなことを教わったし、それを、みんなに伝えてくれっていう先里さんの願いも、同期のみんなに限っては、伝えられた。深見くん以外は。よろいは人を守るかもしれないけど滅ぼす。早く脱がないといけない。わたしは、自分の生き方が決まって、感謝してる」
牧本は、さっきの面接より、今のみんなの短い話の方が大事だと思った。シンセン食品にとっても大事なんだと思った。しかし、会社は、こういうことがよくわからないだろうと思った。こういうことも、牧本は、理解してきている。

脱げないよろい

〇深見が飛び降りた

それはいきなりやってきた。牧本は、深夜のニュースを見ていた。

クリスマスイヴだった。今日も、岡山に出向いていた。岡山のお店で、お客さま説明会をやってきた。隅安芸は、別の説明会に行かないと、間に合わない。なんとも寂しいイヴだ。明日は、松江に飛ばないといけない。お昼からなので、ゆっくりはゆっくりだ。

９回のビルの屋上から飛び降りた男がいた。深見だった。一瞬、牧本は、異次元の物語を見ているのではないかと思った。

「派遣されていた研究所のあるビルの屋上から飛び降りました」

アナウンサーが、冷静に語っていた。

一瞬、牧本は、何をすればいいのか、わからなくなった。これはタイヘンなことだ。

「え〜」

真鍋は知らなかった。

「どうしよう」

「あんた深見くんの実家とか知ってるでしょ？」

真鍋は、深見のことは、何も知らなかった。そういえば、美濃は、修善寺のホテルにみんなを集めた。実家だった。網野も、何からなにまで私生活を知っている。しかし、深見については、誰もなにも知らない。

通夜は誰がやるのだろう。誰が遺体を引き取るのか。頭はグルグル回るのだが、２人とも、いい考えが浮かばない。

明日、会社はタイヘンなことになっている。そういうことより、みんなに知らせなければならない。

「まきちゃんさ〜もう１回調べて？ネットに出てる？顔なの？名前があったの？」

真鍋は、まだ信じていない。

牧本は、ネットを検索した。テレビ局に電話をした。

間違いなかった。真鍋に電話をした。
「深見くんが東京の研究所の９階から飛び降りて死んだ」
真鍋の短いメールが、７人全員に送られた。
牧本は、よく考えないといけないと思った。自分も同じように危なかった。
網野は、真鍋に助けられた。なのに、深見には、誰も何もしなかった。なぜだろう。
生きるということは、誰しも苦しい。今は、よろいがあるから苦しいと思える。それが今の牧本である。しかし、深見は、よろいを理解しないままだった。
今年４年目の牧本達にとって、全員に試練があった。それは辛いものだった。みんな、その試練を、なんとか乗り越えてきた。全員が危なかった。そして、最後の深見は、最悪の結果になってしまった。
牧本には、まだ異次元のように思える。深見がこの世から姿を消すことそのものが、異次元のような気がする。
網野から電話があった。網野はもうお腹が大きい。
「あんた〜もうあかちゃんのこと気にしてあげて」
「深見くん〜わたしが死んでたかもしれんのに〜助けてくれて〜わたし深見くんになにもしてあげてへん」
「わたし悔しいんよ」
「わたしだって悔しい」
２人で、また泣きはじめた。網野にとっては、真鍋と深見は、恩人のようなものだ。わかる。
網野も牧本も、涙が止まらないのは、もう、なすすべがないからだ。何も気がつかなかったことが悔しい。
牧本は、先里が、何度も何度も、「深見さんはどうしているのですか？」と聞くことを思い出していた。あれは何だったのか。深見さんが危ないから手を差し出しておけだったのか。多分、そうだと思った。しかし、牧本には、深見の危うさが理解できなかった。手を差し出してはいなかった。真鍋にも同じことを言っていたのだろうが、真鍋も気がつかなかっただろう。
なぜだ。
牧本は、夜中だったが、先里に電話をした。先里は、知らなかった。

「よろいは、厚くて硬くて折れやすい。叩かれれば、壊れやすい。自分がよろいの側にあったなら、壊れるよろいが、自分が壊れる感覚になってしまう。深見さんは、よろいを脱がないから、危ないと感じていた」
そう言ってくれればよかったのに、牧本は、危うく、先里にも、つっかかりそうだ。ずっと涙が溢れている。こんな悔しいことはない。
「牧本さんも危なかったけど、よろい脱いでくれて、危うさが消えました」
牧本は、自分のことを考える余裕はない。
「牧本さん、自分を責めても、事態は変わりませんよ？」
またもや、先里は、ハラのたつことを言う。
耐えきれずに、牧本は真鍋に電話をした。
「深見くんのことをさ〜お兄さんのように思ってのがいけないんよ」
真鍋の言うとおりだった。会社生活や社会生活では、いつも深見が先に行っていた。社長に会った時も、牧本や真鍋は、ことばが出ない。敬語がわからない。深見の顔を見てしまう。深見は、牧本や真鍋がビックリするようなあいさつを、社長にした。
有働も秋元も美濃も隅安芸も、オトコは、何も言って来ないしメールの返事もないと言った。
ことばがないだろう。
網野と真鍋と牧本は、ずっと電話をしている。なんの話をしているわけではないが、後悔をしている。悲しんでいる。

〇松江

牧本は、一睡もできなかった。12月25日松江に飛んだ。お客さま説明会だった。
隅安芸は、別の説明会に出席している。まだ頭が混乱している。どうしてこういうことになってしまったのか、わけがわからない。
シンセン食品では、本社も、ミナミのオフィスも、大騒ぎになっているだろう。同期の７人は、無力だ。何をしていいかわからない。真鍋だって、途方に暮れているだろう。有働だって、メールの返信のしようがないだろう。
牧本は、指定された時間に、お店に入った。20分前である。お店では、お店

の片隅に、コーナーをつくって、イスを並べてくれていた。シンセン食品の営業も、パンフレットを配っていた。
「牧本の同期なんだろ？」
合間に、話しかけられる。牧本には、何も話すことがない。
お店には、ガリバーのいる新製品が、思ったより大きいスペースで陳列されていた。
「意外によく売れている。ガリバーと同じくらい売れている」
お店の方には好評だった。お客さま説明会を２回行う。13時30分からと、15時30分である。20分である。13時30分の説明会には、20名が集まってくれた。
「牧本さん〜時間あるからごはん食べに行きましょう」
広島から来ているシンセン食品の営業マンに誘われた。牧本は、朝ごはんを食べていなかった。眠ってもいない。化粧が気になるが、なぜか、気にならない。
凍るような寒さだった。海鮮うどんがおいしいんですけど。牧本より年下だと思う広島の営業マンは、牧本に、海鮮うどんを勧めた。寒いから温まる。
牧本は、お化粧を直して、お店を出た。そして、お店の３つ先の家を見た。なにか慌ただしい。ちょっと覗いてみた。表札が深見だった。牧本は、広島の営業に先にお店に帰ってもらった。確かめなければならない。まさかである。
「深見甚太郎さんはこちらでしょうか」
60くらいの女性が出てきた。
「甚太郎は昨日亡くなりました」
牧本は、自分が、その場に倒れるかと思った。
「お母さんですか？」
深見は、お母さんと２人だった。お母さんは１人残されてしまった。悲しみに暮れた顔である。ずっと泣いているのだろう。
明日の晩通夜だと言った。明後日が葬式だろう。この慌ただしさは、ここで通夜も葬式もやるのだろう。お母さんは、悲しみに暮れるヒマもない。準備がタイヘンなのだ。

牧本は、１番わかってくれそうな先里に電話をした。
「明後日のお店を誰かに頼まないといけないから三条さんに電話してください」
「なにかあったら私が説明するから」
先里のことばは、いつも少なくて主語がない。通夜も葬式も帰ってくるなと言っている。
三条は、明後日の京都を、隅安芸と交代すると言ってくれた。そして、牧本は、真鍋にも電話をした。
「わたし〜このままお母さん手伝いするから」
「わたしはどうすればいいの？」
「明日の晩の通夜に来れる？」
とにかく、15時30分のお客さま説明会を済ませなくてはならない。牧本は、急いでお店に帰った。
お客さま説明会には30名の方が参加してくれた。もちろん、すべて女性だった。
広島の若い営業マンは、驚いて、もう深見の家に行くように牧本に言った。
それでも牧本は、お店の店長に、お礼を言うために探した。
深見のお母さんのところへ伺えたのは、17時を過ぎていた。
「わたし、こういうものですけど、深見くんと一緒に仕事をしていて、今日は、そこのお店の説明会に来ていました」
深見のお母さんも驚いた。シンセン食品からも、明日の通夜に、役員が来られるのだと言った。
「わたし〜ずっと３日間いますから、お母さんの手伝いさせてほしいんです」
深見のお母さんは驚いた。同じ会社に勤めていたとはいえ、３日も手伝う人などいない。
「わたし〜ちょっとホテル予約しますから、手伝わせてください」
牧本は、真鍋に電話をした。ネットで調べて予約してくれと頼んだ。
深見のお母さんは、やっと、牧本を招き入れた。

近所の方もたくさんいらっしゃった。遠い親戚だという方もいらっしゃっ

た。明日と明後日来られない方もいらっしゃった。
深見のお母さんは、ずっと泣き伏している。お茶を出して言葉を聞くのは牧本だった。牧本が、どうしてここにいるのか、誰も聞こうとしない。ひょっとして、嫁だと思っている人もいるかもしれない。
牧本は、とにかく、３日は、深見のために、ここにいようと思った。それがどういうことなのかなど、どうでもよい。たまたま、そうなった。牧本が、松江でお客さま説明会をしたからこうなった。
訪問客が途切れた時、長下から電話があった。
「先里さんから聞きました。よろしくお願いします。今となっては、これしかやってあげられなくて情けないです」
牧本は、思わず涙を流してしまった。これが、長下の本音なのだ。長下がよろいを脱ぐと、下はこうなんだと思った。
どうして深見に、このような長下のような機会が訪れなかったのか、残念でたまらない。また涙が溢れてくる。

〇先里からの手紙
次の日の夜、通夜だった。
真鍋がやってきた。
お母さんと深見の２人家族だった。通夜といっても、お母さんと牧本と、親戚２人がいるだけである。シンセン食品の役員は、あいさつだけして帰っていった。牧本を見て驚いた。
深見は、静かな落ち着いた顔をしていた。
真鍋が、先里からの手紙だと言って、ワードで書かれた手紙を渡してくれた。真鍋と牧本宛てになっている。真鍋は、飛行機で読んだと言った。
「なぜこういうことになったのかわからないと思います。深見さんの立場にたてないからです。よろいが脱げない人の立場です。よろいが傷つけば、切腹だってしたのです。よろいが傷つかないために、もっとよろいを厚くするのです。
少なからず、今の日本では、このよろいの価値観を崩すことは、難しいのです。真鍋さんや牧本さんのように、よろいを脱ぎ棄てて暮らすことは、自分

を守らないという意味でもあって、難しい生き方です。しかし、よろいは傷つきますが、生身は、免疫もあって、すぐに治してくれるのです。ですから、本当は、よろいがある方が、傷つきやすいし、生きにくいのです。昨日の夜、深見さんが出向していた研究会へ電話して聞きました。研究会では、次のステップへ、進めなかったのだそうです。深見さんは、フツウでいう留年したのです。シンセン食品の選抜試験でも留年しました。もう耐えられなかったと思います。それは、深見さんのよろいが耐えられなかったのです。小さいころから、常にトップだったでしょうから。トップになる方法を心得ていたでしょうから。
私が、すごく残念に思うのは、私もですが、誰も、「それがなんなの？」と言ってあげなかったことです。よろいのない人から見ると、トップでなければよろいが傷つくということなどは、ナンセンスです。どうでもいいことです。留年に重い意味などありません。
深見さんは、多分、今は、穏やかな顔をしているのだと思います。なぜなら、よろいをはじめて脱ぎ棄てているからです。よろいは、人生で、自分を守るものと勘違いしますが、実は、自分に重くのしかかるものです。私は、１００の害があって１の理もないと思っています。なぜなら、あかちゃんには、よろいがゼロだからです。豹にも、豚にもありません。人間の大人にだけ、よろいがあるのです。
私は、非常に残念です。深見さんのゼッタイ的な味方になってあげられなかったことです。私は、時間を見誤りました。残念です。
人は、やはりサルだから、仲間が必要なのです。それも、ゼッタイ的な味方が欠かせないのです。
私は、深見さんが危ないことを、よく承知していながら、ゼッタイ的な味方であることを告げる時間を見誤ったのです。手を差し出すタイミングを誤ったのです。厚いよろいを着ている人は、自分から、助けを求めることが少ないので、私が気づいてあげないとけません。しかし、気づいていたのにタイミングを誤りました。それが残念です。
私にできることは、深見さんを教訓にすることです。残念だけど。

ホテルのベッドで、牧本は、先里の手紙を思い出していた。先里は、自分を

責めている。知っていたのにと。それだったら、自分の方が、もっと深見に近かった。危ないことも知っていた、対決しなければならないことも知っていた。なにもしなかった自分が悔しくてならなかった。悔し涙が溢れて止まらなくなる。

『脱げないよろい』

２０１１年

２０１９年

げんじあきら

『壊れるよろい』『ルイハシのよろい』『よろいってなんだ』を読んでいただきたい
『まゆ』を読んでいただきたい
『こころの色』を読んでいただきたい
『人と集団を滅ぼすもの』を読んでいただきたい

脱げないよろい

著者　　　げんじあきら